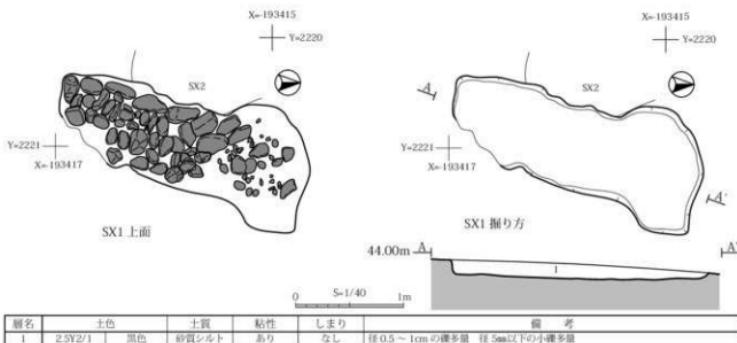


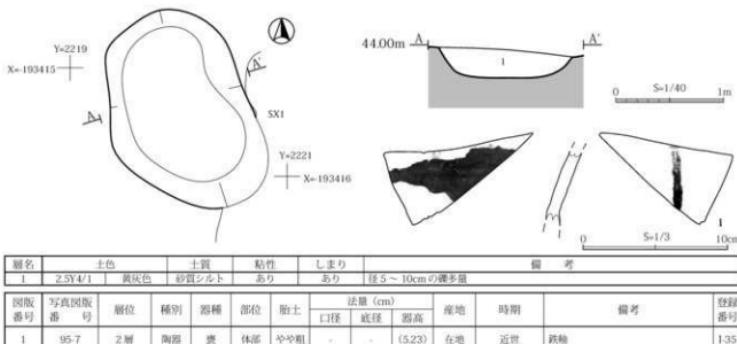
## 第2節 路線部II区



第104図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

### 2) SX2 性格不明遺構（第105図、図版53-3・4）

S2-W8-W9 グリッドに位置する土坑状の遺構である。南東側でSX1と重複しSX1より古い。規模は、長軸 1.93m、短軸 1.32m、深さ 29cm を測る。平面形は、主軸方向 N-29°-W を示す不整椭円形で、断面形は皿形である。堆積土は黄灰色砂質シルトの単層で、径 5 ~ 10cm の礫を多量に含む。出土遺物は、堆積土中より 19世紀代のものと思われる在地産の甕の破片が 1 点出土し、図示した。

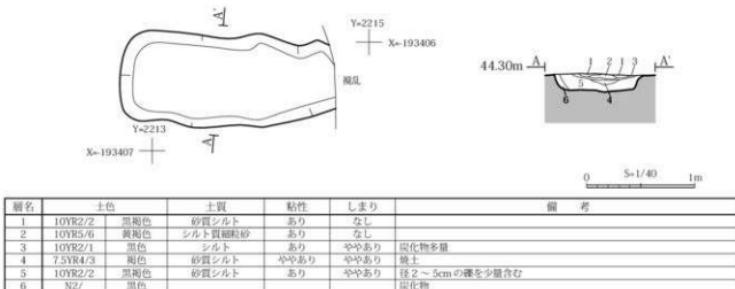


第105図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

### 3) SX3 性格不明遺構（第106図、図版53-5～7）

S1-W9 グリッドに位置する。東西に細長い土坑状の遺構で、東端を搅乱により削平される。確認した規模は、長さ 1.99m、幅 86cm、深さ 17cm を測る。平面形は、主軸方向 N-90°-W を示す概ね円形と考えられ、東側は幅を狭める。堆積土は砂質シルトを主体とし、6 層に分けられる。堆積土 3 層は炭化物を多量に含み、4 層は焼土である。また、南側側面に炭化物（6 層）が堆積する。5 層は径 2 ~ 5cm の礫を少量含むが、中

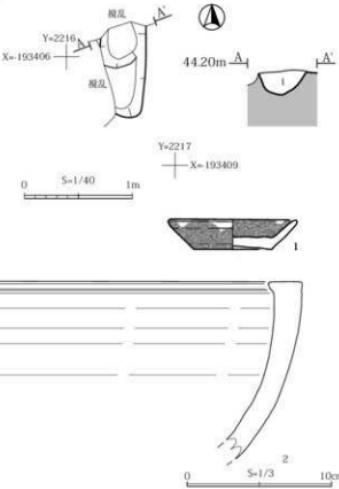
央南寄り付近で人頭大の円錐が1点出土した。底面は緩やかに起伏しながら東へ傾斜し、壁面は概ね内湾しながら立ち上がり、断面形は逆台形である。出土遺物は見られなかった。



第106図 SX3性格不明遺構平面図・断面図

## 4) SX4 性格不明遺構 (第107図、図版53-8~54-2)

S1-W9 グリッドに位置する。北側と西側を擾乱により削平される。確認した規模は、長さ85cm、幅42cm、深さ23cmを測る。平面形は、主軸方向N-3°-Wを示す南北に長い溝状と考えられる。断面形はU字形で、堆積土は灰黄褐色砂質シルトの単層である。底面は起伏しながら北へ傾斜する。遺物は、堆積土中より灯明皿が正位で出土したほか、瓦質土器の火鉢と思われる破片が1点、計2点出土し、図示した。

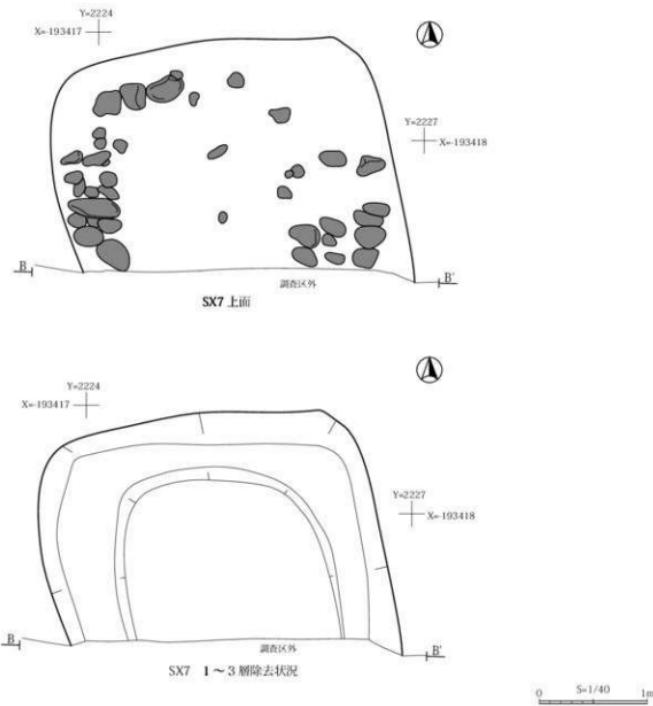


第107図 SX4性格不明遺構平面図・断面図

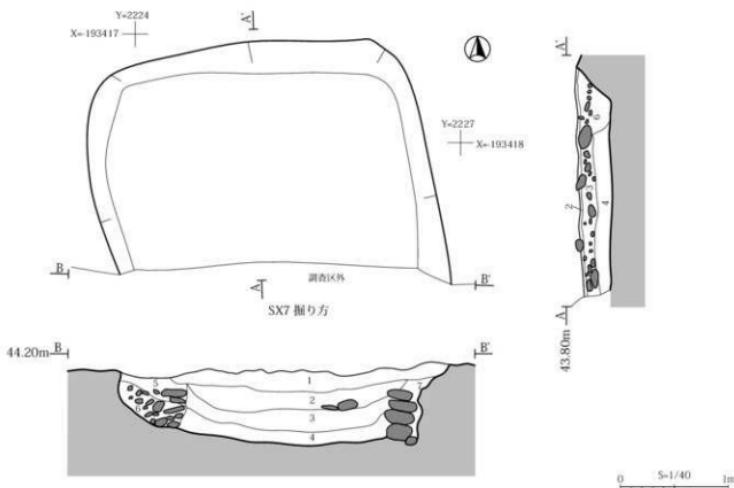
## 第2節 路線部II区

### 5) SX7 性格不明遺構（第108・109図、図版54-3～6）

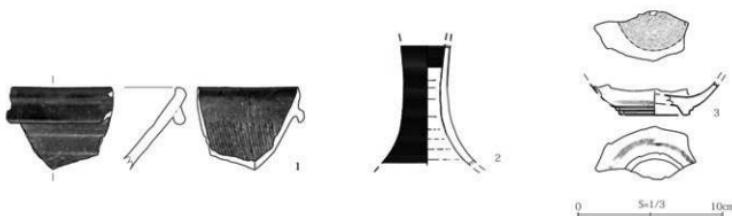
S2-W8 グリッドに位置し、南側は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ3.89m、幅2.12m、深さ68cmを測る。平面形はやや歪な隅丸方形と考えられ、断面形は逆台形である。表層では、径15～30cmの円礫が多量に埋まっていたが、もともとは周囲を削っていたものと思われる。堆積土は7層に分けられる。上層から礫を多量に含む黒褐色砂質シルトを主体とする2・3層を掘り下げるに、中央部が台状に残り、周囲に幅50cm程の溝状の掘り込みが現れた。台状に残った4層は暗褐色砂質シルトで礫は含まれない。出土遺物は、3層より19世紀代のものと思われる在地産の擂鉢、大堀相馬産の壺等の陶器破片2点、產地不明の磁器碗1点、平瓦の破片1点が出土した。そのうち地産の擂鉢と大堀相馬産の壺、產地不明の磁器碗の3点を図示した。当遺構は小礫等で根固めをして円礫を廻らせた、構造物の基礎の一部ではないかと推測される。



第108図 SX7 性格不明遺構平面図



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	なし
2	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cm 塗多量
3	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cm 塗多量
4	10YR3/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 10YR1/7/1 黒シルトブロック多量
5	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	なし 径5~20cm 塗多量
6	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径5~20cm 塗多量
7	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径5~30cm 塗多量



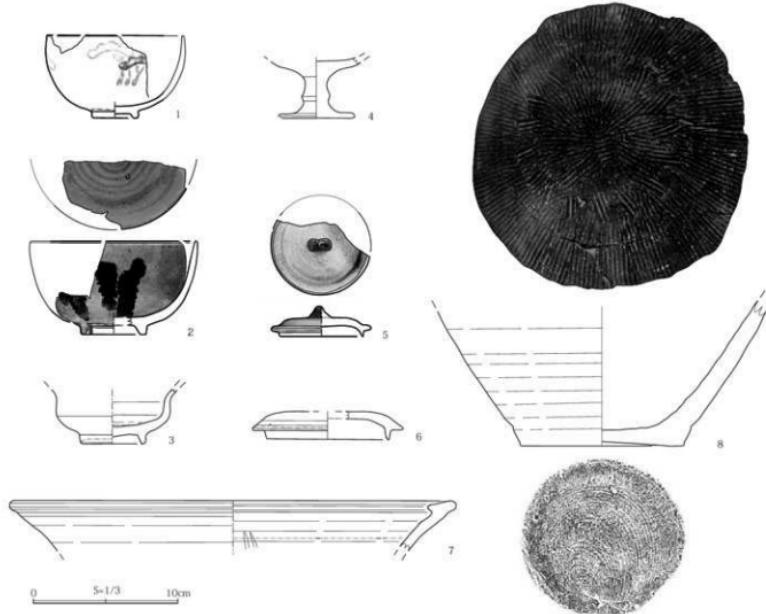
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	95-10	3層	陶器	盤鉢	口縁部	やや粗	-	-	(6.0)	在地	19世紀	鉄軸 柳目 5本 1単位	138
2	95-11	3層	陶器	瓶	体部	やや密	-	-	(8.35)	大頭相馬 19世紀中葉	鉄軸	染付	139
3	95-12	3層	磁器	碗	高台~体部	密	-	(4.8)	2.3	不明	不明	染付 見込み施ふき取り	J34

第109図 SX7性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

## 第2節 路線部II区

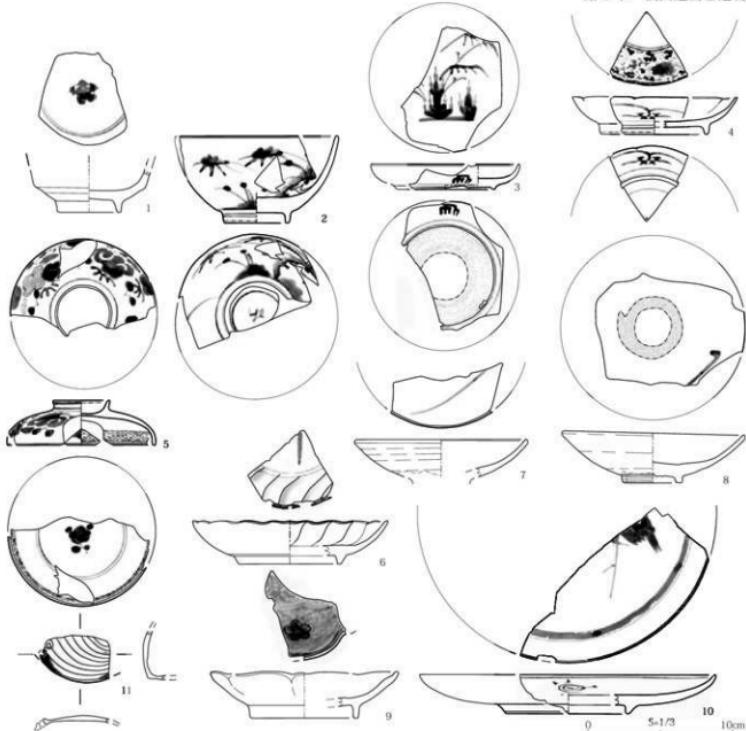
### (4) IV層出土遺物 (第110図、図版96-1～98-1)

路線部II区IV層で遺構外から出土した遺物は総数で236点であった。その内訳は瓦15点、陶器103点、磁器93点、土師質土器23点、その他2点である。遺物の94%は調査区東側のS2-W5 グリッド SD1溝跡周辺の上層からの出土である。遺物のうち陶器は大堀相馬産28点、在地産9点、小野相馬産9点、小野相馬産9点、瀬戸・美濃産3点、岸窯産2点。磁器では肥前産が40点、瀬戸・美濃産11点、波佐見産2点で、その他不明である。ここでは遺存状態の良い19点を図示する。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	产地	時期	備考	登録番号
							口径 底径 器高				
1	96-1	S2-W5	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(9.5) 3.1 5.72	京都	18世紀中葉 道	灰釉 上絵付け(松文 線彫、互 通)	1-40
2	96-2	S2-W5	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	(11.6) (4.4) 6.5	小野相馬	18世紀	灰釉 鉄網掛け流し	1-41
3	96-3	S2-W5	陶器	向付碗	体底部～高台	やや粗	- 4.3 (3.8)	肥前	17世紀代	墨灰釉	1-42
4	96-4	S2-W5	陶器	私衛器	脚部	やや粗	- 4.8 (4.2)	大堀相馬	19世紀	鉄釉	1-43
5	96-5	S2-W5	陶器	蓋	縦み～ 口縁	粗	5.7 - 2.1	瀬戸・ 美濃	18世紀以降 道	鉄釉 灰釉 貫入あり 内面：無釉	1-44
6	96-6	S2-W5	陶器	土瓶器	口縁～ 体部	やや粗	(10.4) (8.2) (1.9)	不明	18世紀後半～ 19世紀前半	鉄釉 内面：無釉	1-45
7	96-7	S2-W5	陶器	瓶	上部～ 底部	やや密	(31.0) - (3.45)	岸窯	17世紀中葉	灰釉	1-46
8	96-8	S2-W5	陶器	瓶	体部～ 底部	やや密	- 11.3 (10.1)	在地	近世	鉄釉 内面：墨引本1単位 回転系切り痕 口クロ左回転	1-47

第110図 IV層出土遺物(1)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	産地	時期	備考	登録番号
1	96-9	S2 W5	磁器	碗	体部～高台	密	4.05 (3.9)	肥前	18世紀中葉	青磁輪 透明釉 内面：見込みに瓦片花、團扇 こんじやく印判	J-35
2	97-1	S2 W5	磁器	碗	口縁～高台	密	(11.1) (4.5) 6.05	波佐見	18世紀初葉～後半	染付(伊豫、草花文)	J-36
3	97-2	S2 W5	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.2) 6.8 (1.75)	肥前	18世紀後半	外底：染付(伊豫、草花文) 内底：染付(松松文)竹文 輪の口沿點目台	J-37
4	97-3	S1 W5	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	(7.4) 2.6	肥前	18世紀前葉～中葉	外底：唐草文 内底：染付(丹唐草文)	J-38
5	97-4	S2 W5	磁器	蓋	口縁～高台	密	10.25 3.85 3.1	肥前	18世紀後半～19世紀初期	外底：透明釉 上給付(赤絵、緑絵) 互顔 内底：染付(芦拂、梅文)	J-39
6	97-5	S2 W5	磁器	輪花皿	口縁～高台	やや密	13.4 7.0 3.0	肥前	17世紀中葉	透明釉 内面：染付	J-40
7	97-6	S1 W5	磁器	皿	口縁～底盤	やや密	(11.8) (2.6)	肥前	18世紀中葉	透明釉 内面：染付 蛇口付施剥落	J-41
8	97-8	S2 W5	磁器	皿	口縁～高台	やや密	12.7 3.85 3.65	肥前	17世紀後葉～18世紀初葉	透明釉 内面：染付	J-42
9	98-1	S2 W5	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	(13.0) (7.3) (3.2)	波佐見	17世紀後半～18世紀初葉	青磁 球形打刃 内底：青磁染付梅文花	J-43
10	97-9	S2 W5	磁器	皿	口縁～高台	密	(20.6) (8.4) 2.7	肥前	17世紀前葉～中葉	染付(宝珠文) 透明釉 内面：染付 文 團扇	J-44
11	97-7	S2 W5	磁器	水滴	上部、注口	密	- - 1.6	肥前	不明	染付 内面無輪 雷頭江波 形	J-45

第111図 IV層出土遺物(2)

## 第2節 路線部II区

### 5 II層出土遺物（第112、図版 98-2～98-9）

II層他からは177点の遺物が出土した。そのうちから近世の遺物で、陶器5点、磁器2点、石製品1点を掲載した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	98-2	S2-W5	陶器	画	口縁～体部	やや密	(8.7)	-	(4.5)	京都	18世紀中葉	灰釉 上輪(青絵、緑絵、互彙) 内面：貢入あり	I-48
2	98-3	S2-W9	陶器	画	口縁～体部	やや粗	(12.1)	-	5.7	肥前	17世紀後半	灰釉 貢入あり	I-49
3	98-6	S2-W5	陶器	画	口縁～高台	やや密	(9.11)	5.15	2.01	大隅相馬	19世紀前葉～中葉	灰釉 ハラケズリ 高台内に墨書き「大田」 内面：鉄筋草花文	I-50
4	98-7	S2-S2	陶器	馬の目	口縁～高台	やや粗	(23.0)	(10.0)	5.6	瀬戸	18世紀後半～19世紀初頭	美濃 内面：馬の目文 ロクロ右側面	I-51
5	98-8	S1-W9	陶器	鉢	体部～底	やや粗	-	(16.0)	(6.9)	瀬戸	17世紀前葉	外腹：湯明輪 内面：鉄筋、粗地	I-52
6	98-4	S2-S2	磁器	繩反繩	口縁～体部	密	(7.6)	-	(4.1)	瀬戸	19世紀	染付山水文	J-46
7	98-5	S2-W7	磁器	段重	高台	密	(13.6)	(9.3)	5.6	肥前	19世紀代	染付景致？文 燒付底？文 燒付底有り 12と異なるか	J-47
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)			石材	備考			登録番号		
				口径	底径	器高	重量						
8	98-9	S2-W9	石製品	2.35	2.25	0.6	4.34		粘板岩	碧石	K-4		

第112図 II層出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### 1 VI層上面検出遺構とVI層出土遺物

迂回路部は、地下鉄東西線建設に係る仮設道路建設工事の計画掘削深度によって、調査の掘削深度も決定され、自然堆積層であるVI層上面まで掘り下げていない。調査による掘削深度は、第1章調査概要第3節で述べたとおり、西側（W8 グリッド列以西）：標高 43.909m、中央（W6・7 グリッド列）：標高 42.614m 東側（W5 グリッド列以東）：標高 42.115 m までと定められた。そのため今回の最終調査面は、西側では概ねV層上面、中央でVI層上面となった。また、迂回路部では、南壁で概ね西から東への傾斜が、西壁で南西から北東方向への傾斜が、東壁では北から南への傾斜が見られており、全体として、北西から南東方向へ緩やかに傾斜する谷地形が存在する。そのため地形的に下がっている南東側についてもVI層まで達しなかった。以上によりVI層は迂回路部中央でのみ確認され、VI層上面で検出された遺構は、溝跡 2 条、性格不明遺構 2 基である。



第113図 VI層上面遺構配置図

### 第3節 迂回路部

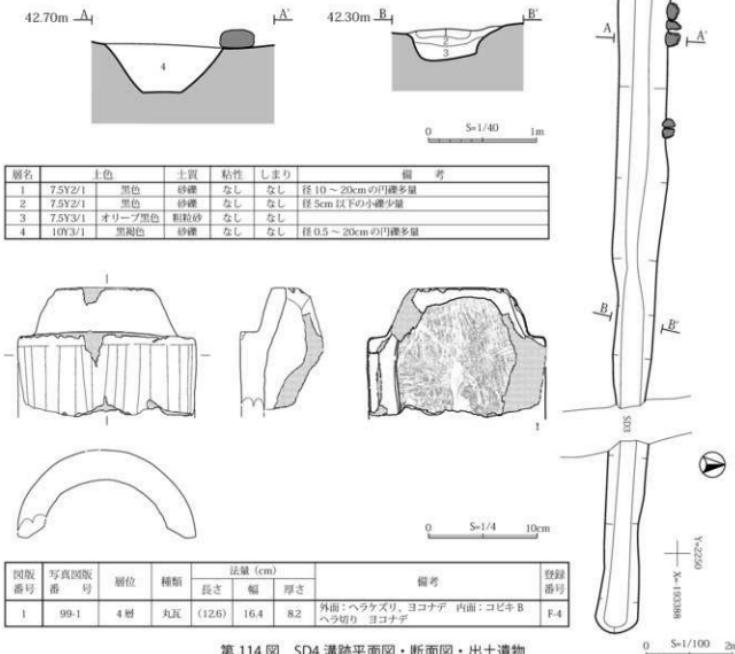
#### (1) 溝跡

##### 1) SD4 溝跡（第114図、図版55-1～5）

N2-W5～N2-W8 グリッドに位置する、東西に走る石組の溝である。西端は北側へ屈曲し調査区外へ延び、東側は次第に浅くなり収束する。東側で上層のSD3に削平される。確認した規模は、検出長23.17m、上端幅0.81～1.10m、下端幅0.24～1.03m、深さ45cmを測る。平面形は大部分が直線状を呈しているが、西側で北へ屈曲する。東西方向はN-87°Wを示す。断面形は逆台形で、堆積土は黒色及びオリーブ黒色の粗粒砂を主体とし、砂礫あるいは円礫等の包含物の差異により4層に分けられる。底面は平坦で、西から東へ向かって傾斜し、壁面は急角度で立ち上がり、ところどころ外反する。

石組は大部分が崩れているが、溝西側の北肩の一部に残存している。石組は、概ね長さ20～50cm、幅15～40cm、厚さ7～20cmの円礫を、面を揃えて1段ないし2段積み上げている。南側では石組は確認されなかった。

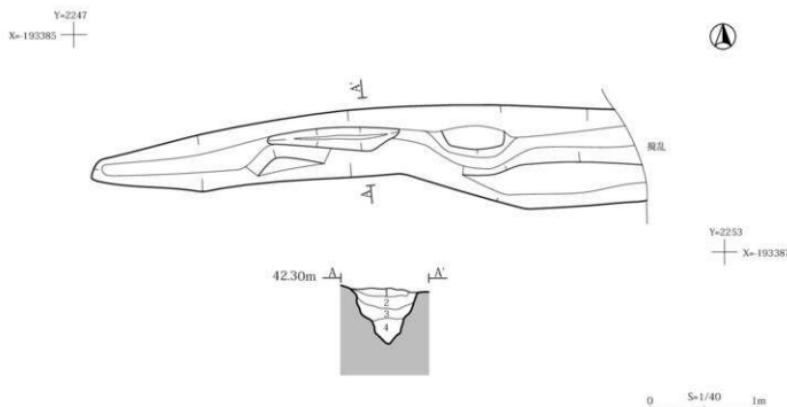
遺物は丸瓦が1点出土したので掲載した。



第114図 SD4 溝跡平面図・断面図・出土遺物

## 2) SD5 溝跡（第115図、図版56-1～3）

N2-W5・N2-W6 グリッドに位置する、東西に走る素掘りの溝である。西端は搅乱により、また大部分の上面はIV層で検出されたSX17 性格不明遺構により、東側は搅乱により削平されている。そのため、本来の掘り込み面は明確ではない。確認した規模は、検出長 5.14m、上端幅 62～90cm、下端幅 22～56cm、深さ 51cm を測る。平面形は直線状で、主軸方向は N-89°-E を示す。断面形は V 字形である。堆積土は黄灰色と黒褐色のシルト、オリーブ黒色の砂質シルトと中粒砂で 4 層に分けられる。底面は緩やかに起伏しながら、わずかに東へ傾斜し、壁面はところどころ階段状を呈しながら立ち上がる。遺物は出土していない。当遺構は、その位置関係から SD3 に繋がる可能性も考えられる。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y4/1 黄灰色	シルト	あり	なし	径 1～5mm の砂礫少量
2	2.5Y3/1 黒褐色	シルト	あり	なし	
3	5Y3/1 オリーブ黒色	砂質シルト	ややあり	なし	径 5～20mm の砂礫多量
4	7.5Y3/1 オリーブ黒色	中粒砂	なし	ややあり	径 5～20mm の砂礫多量

第115図 SD5 溝跡平面図・断面図

## (2) 性格不明遺構

## 1) SX33 性格不明遺構（第116図、図版56-4～7）

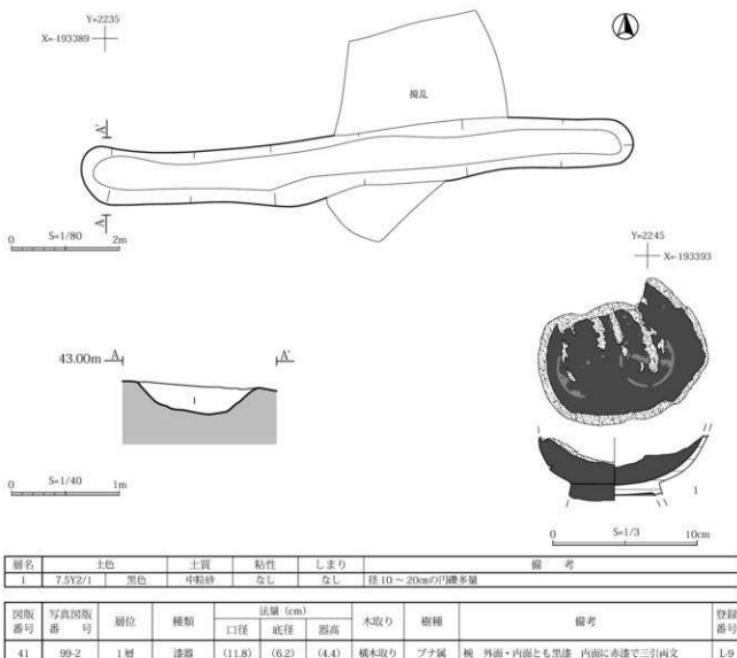
N1-W6・N1-W7 グリッドに位置する、素掘りの溝状を呈する遺構である。北側の SD4 に平行して東西に走り、両端はしだいに浅くなり収束する。中央付近で上端を搅乱により削平されている。規模は、長さ 10.18m、上端幅 0.9～1.22m、下端幅 40～60cm、深さ最大 25cm を測る。平面形は概ね直線状であり、断面形は逆台形である。主軸方向は N-87°-E を示す。上面で長さ 10～30cm、幅 5～20cm、厚さ 4～12cm の円礫が集中して出土したが、これは、上層の盛土に含まれていた円礫が落ち込んだものであろうと思われる。堆積土は黒色中粒砂の単層で径 10～20cm の円礫が多量に含まれる。

当遺構は、当初、円礫が列を成して検出されたため性格不明遺構とした。両端がはっきりしないのと、壁面が緩

### 第3節 迂回路部

やかにたちあがり掘り方が明確に捉えられなかつたので、必ずしも溝とも言い切れず、自然流路とも考えられる。当遺構の西側延長線上にSX41が位置しており、同様の漆器挽も出土していることから、様相は異なつてゐるが、繋がっていた可能性も考えられる。

遺物は、底面直上から、黒漆地に赤漆で三引両文が描かれた漆器挽が1点出土したので、図示した。



第116図 SX33 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

### 2) SX41 性格不明遺構 (第117～121図、図版56-8～57-5)

N1-W7・N1-W8 グリッドに位置し、東西に走る石組の溝状を呈する遺構である。遺構上面、石組の上に、板材や角材等をかぶせた、暗渠状の遺構である。西側は擾乱により削平される。プランが検出されなかつたが、東側へ延びていた可能性は考えられる。また、擾乱より西は、掘削深度の制限があつたため掘り下げておらず、まだ延びている可能性が考えられる。確認した規模は、長さ 2.54m、石組み上端幅約 60cm、下端幅 32～48cm、深さ 32cm を測る。平面形は主軸方向 N-90°-E を示す直線状で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルト及び粘土質シルトで 5 層に分けられる。

遺構上面で検出された木材は、それぞれ溝の幅に切りそろえて石組の上端にさし渡されていた。その数は、芯持

材・半割材・分割材・板材・角材等で破片も含めて46点を数える。蓋として被さるように板材の両側を削りだし、断面がコの字状になるものや、半割材や角材の両側を円礫の形に合うように成形したもの、他の建築材等を転用したと考えられるもの等が見られる。その他に、横に波されている木材の隙間に貫く杭が1本検出されたが、これは、後世に上層から打ち込まれた可能性も考えられる。また、木材の下面是劣化が激しく、溝が水路として機能していたことが推測される。

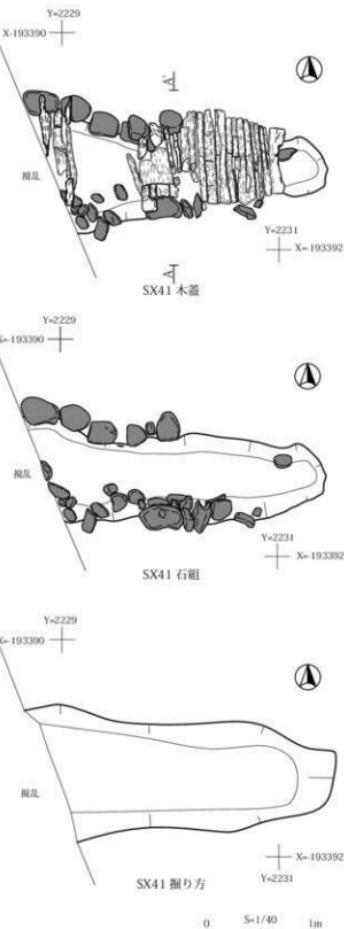
石組は、長さ15～44cm、幅10～28cm、厚さ8～15cmの円礫を2段ないし3段に積み上げ、隙間には小礫混じる砂質シルトを詰めて安定させていたものと思われる。

掘り方の規模は、上端幅72～160cm、下端幅56～76cm、深さ40cmを測り、断面形は不整逆台形である。

出土遺物は、溝の蓋をなす木材のほかに、中世のものと思われる中国産の青磁の皿の破片が1点溝底部から出土した他、木材の隙間から、黒漆地に赤漆で三引両文が描かれた漆器椀の破片が出土した。そのうち磁器1点、杭、溝蓋8点、他2点を図示した。

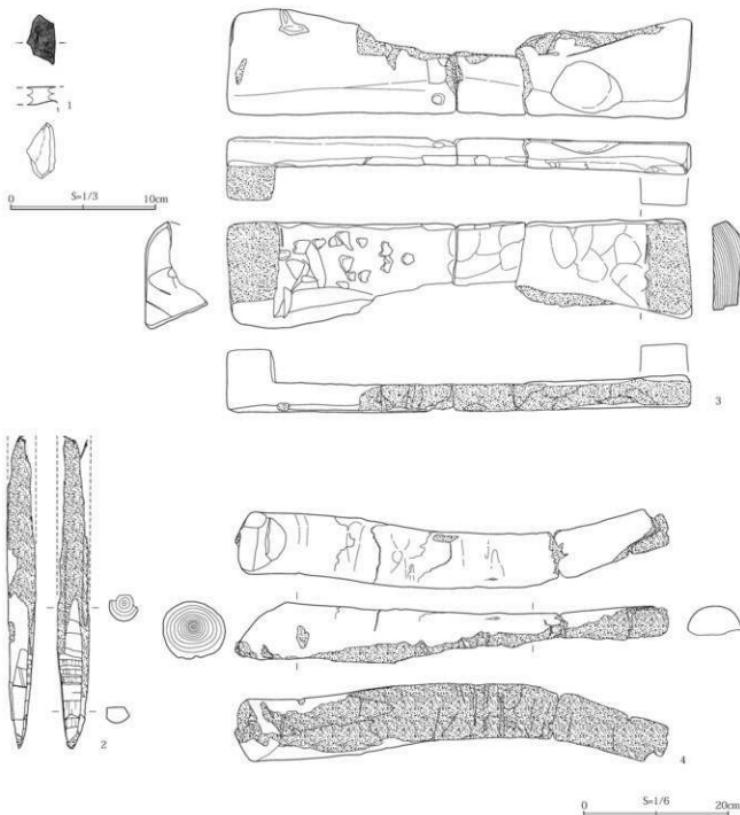
当遺構の東側の延長線上3m程にSX33が位置しており、同様の漆器椀が出土していることから、繋がっていた可能性も考えられる。

なお、木材で蓋をした本遺構と同様な様相を呈すると思われる石組溝は、三ノ丸跡の調査でも見られる（酒造屋敷跡1区KS782）（仙台市教育委員会2010）。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり
2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり 粗粒砂微量
3	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	ややあり
4	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	ややあり 粗粒砂少量
5	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり

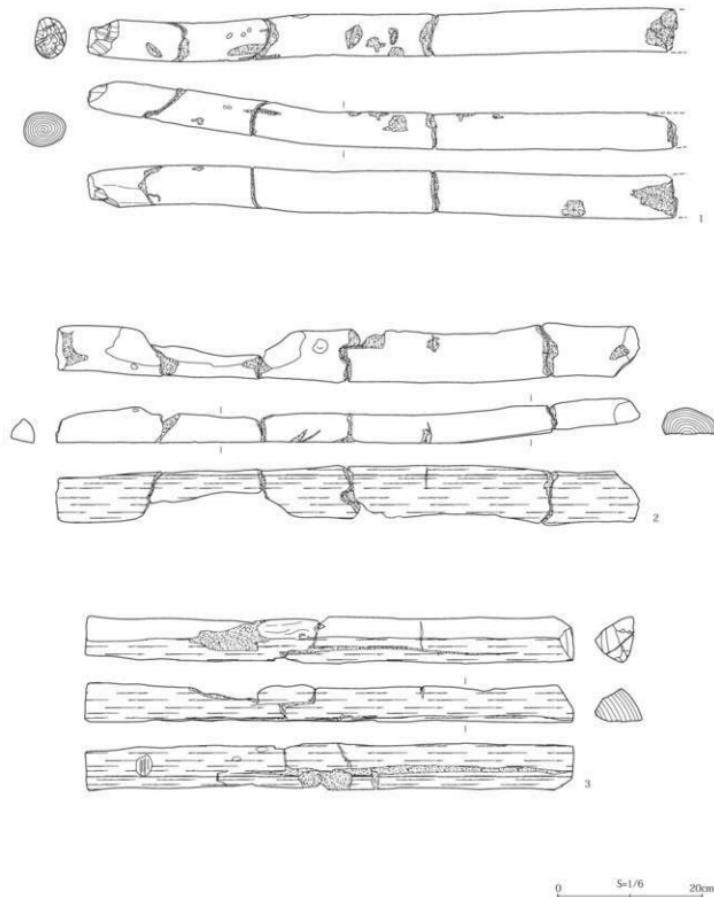
第117図 SX41 性格不明遺構平面図・断面図



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	99-3	6層	磁器	壺	底部	泥	-	-	(1.20)	中国	中世	青磁釉 買入	J-48

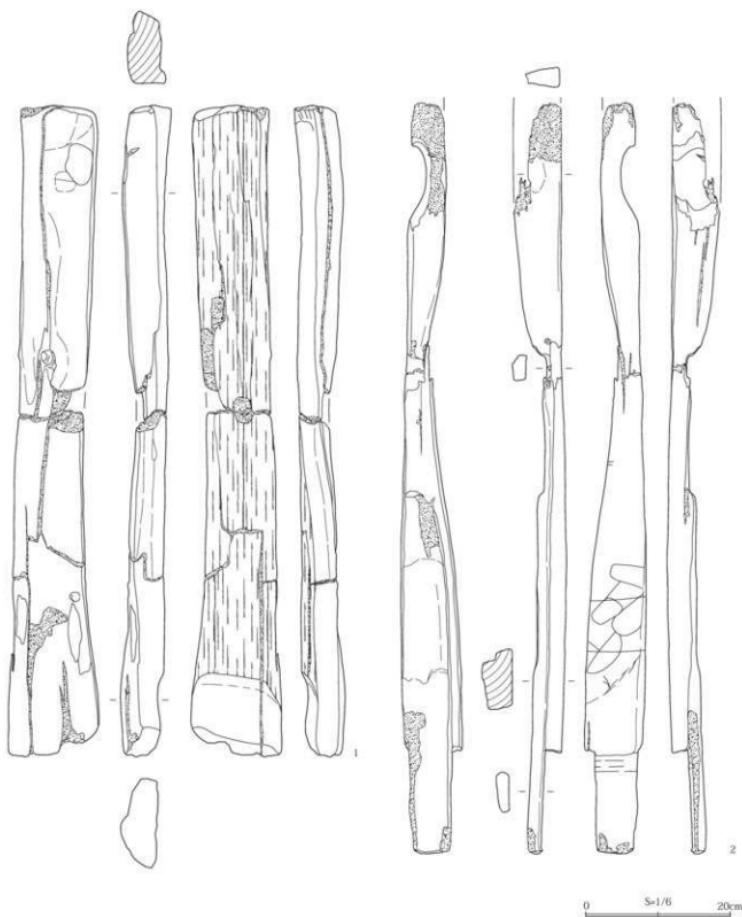
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考			登録番号
				長さ	幅	厚さ			芯持材	コナラ節	杭	
2	99-4	-	木製品	43.2	3.9	4.4						L-10
3	99-5	-	木製品	64.2	14.7	8.7	板目	アサダ	溝蓋 内端に筋			L-11
4	99-6	-	木製品	60.0	8.8	7.8	芯持材	サクラ属	溝蓋			L-12

第118図 SX41 性格不明遺構出土遺物(1)



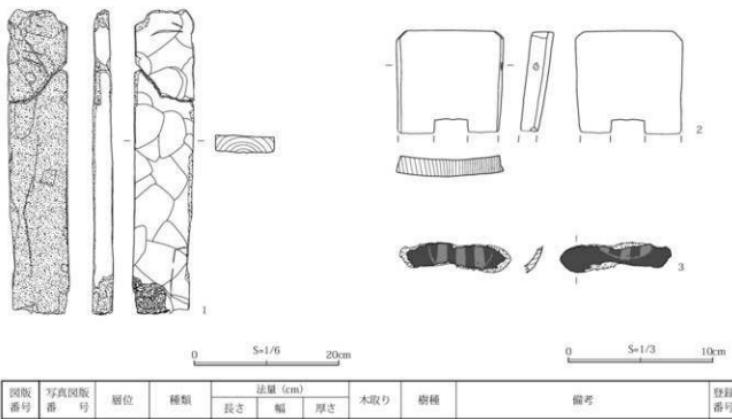
第119図 SX41 性格不明遺構出土遺物（2）

図版 番号	写真図版 番号	部位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ				
1	99-7	-	木製品	81.6	5.9	5.2	芯持材	トネリコ属 コナラ属 コナラ節	溝蓋	L-13
2	99-8	-	木製品	80.7	7.4	4.9	半削材	コナラ属 コナラ節	溝蓋 片側面に抉り有り	L-14
3	99-9	-	木製品	67.6	6.4	5.4	分割材	コナラ節	溝蓋	L-15



第120図 SX41 性格不明遺構出土遺物（3）

図版 番号	写真図版 番号	部位	種類	法量(cm)			木取り	断面	備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ				
1	100-1	-	木製品	90.0	12.5	5.8	板目	ブナ属	溝蓋 内端に側に押圧された痕	L-16
2	100-2	-	木製品	107.9	8.6	6.9	板目	クリ	溝蓋 扱り有り 建築材の転用か？	L-17



第121図 SX41性格不明遺構出土遺物(4)

## (3) VI層出土遺物(第122図、図版100-6・7)

迂回路部では、VI層は完掘していないこともあり、出土遺物はきわめて少なく陶器2点、土師質土器1点の3点であった。そのうち17世紀前葉のものと思われる、志野皿と織部の角皿の2点を図示した。

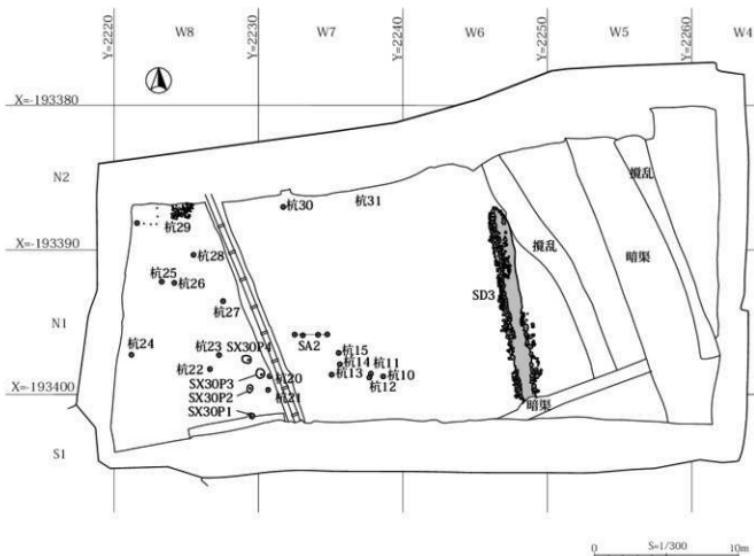


第122図 VI層出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### 2 V層上面検出遺構とV層出土遺物

V層は、調査区中央東側を南北に走るSD3が機能していた当時の面として捉えられた。土層は腐植物に富む黒褐色砂質シルトを主体とした層である。水分に富み、石組や柱根、杭等を伴わない遺構の検出は困難であった。V層上面で検出した遺構は、杭列1条、溝跡1条、性格不明遺構1基である。

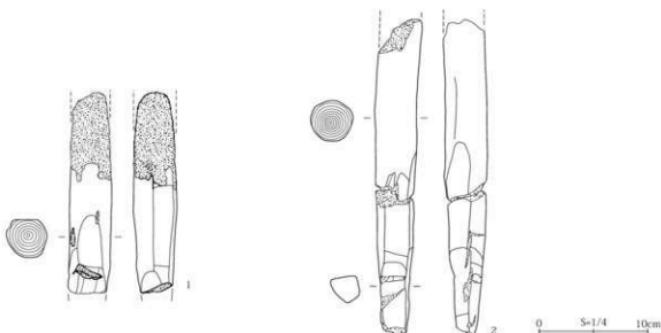
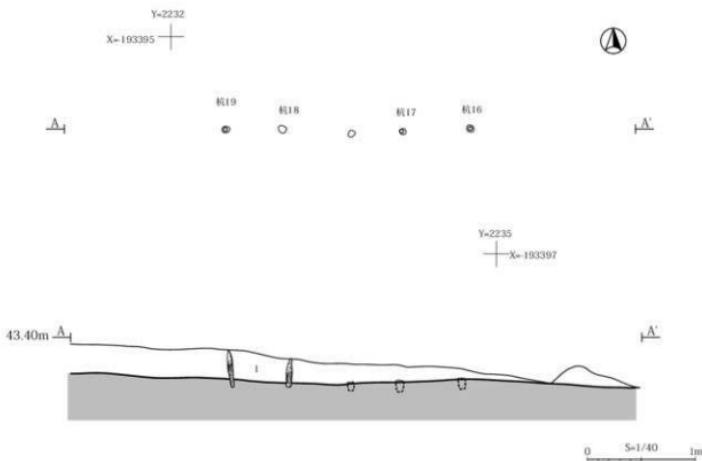


第123図 V層上面遺構配置図

##### (1) 杭跡

###### 1) SA2 杭跡 (第124図、図版58-1・2)

N1-W2 グリッドに位置する SX29 を SA2 と改めた杭跡である。東西方向に並ぶ5本の杭で構成されている。確認した規模は、長さ 2.23m で、各杭の間隔は西から 58cm (1 尺 9 寸)・55cm (1 尺 8 寸)・52cm (1 尺 7 寸)・63cm (2 尺 1 寸) を測る。主軸方向は N-90°-E を示す。検出された杭は、5 本のうち西側 2 本のみ比較的残りが良く、直径約 4cm の芯持ち材の片側を、3 面ないし 4 面削って尖端を形成している。上端は欠損しており残存長は 10 ~ 29cm 程である。同様の規模の杭痕は他にも検出されたが、並んでいたものはこの 5 本のみであった。杭の間隔が短く直径が比較的細いので、建物等ではなく柵等の一部ではないかと考えられる。



図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ				
1	100-8	1層	木製品	18.5	3.9	4.0	芯持材	カマツカ属	杭18	L-21
2	100-9	1層	木製品	29.0	3.9	3.9	芯持材	カマツカ属	杭19	L-22

第124図 SA2 杭跡平面図・断面図・出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### (2) 溝跡

##### 1) SD3 溝跡（第125～126図、図版58-3～59-4）

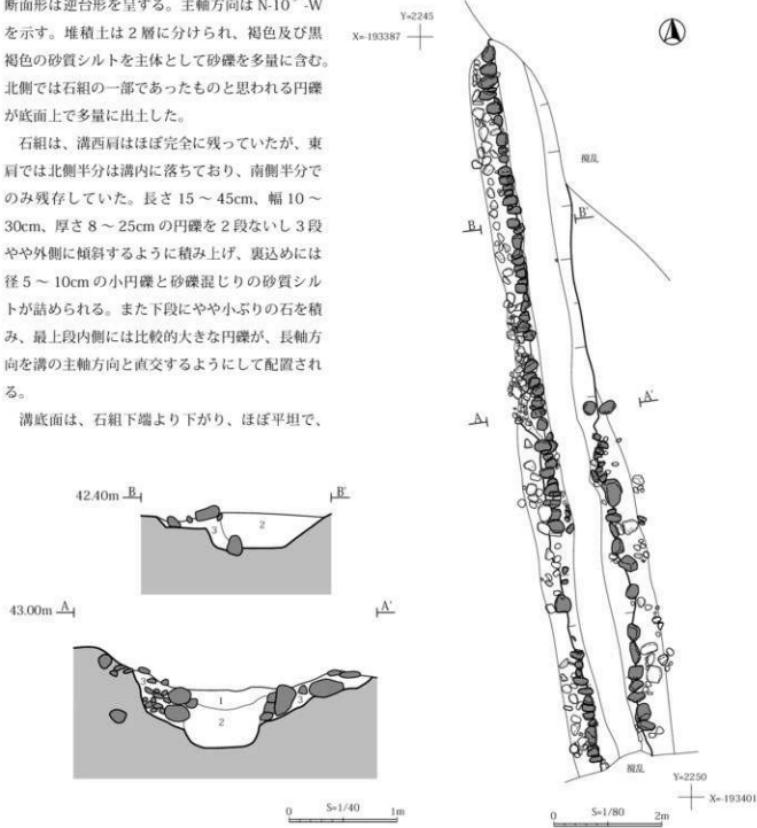
N1-W6～N2-W6 グリッドに位置し、南北に走る石組の溝である。南側は擾乱により削平されているが、調査区外へ延び、路線部Ⅱ区のSD1へ繋がるものと思われる。北端も擾乱により削平され途絶えている。確認した規模は、長さ13.3m、石組上端幅70～102cm、下端幅46～66cm、深さ最大50cmを測る。平面形は直線状で、断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-10°-W

を示す。堆積土は2層に分けられ、褐色及び黒褐色の砂質シルトを主体として砂礫を多量に含む。

北側では石組の一部であったものと思われる円礫が底面上で多量に出土した。

石組は、溝西肩はほぼ完全に残っていたが、東肩では北側半分は溝内に落ちており、南側半分でのみ残存していた。長さ15～45cm、幅10～30cm、厚さ8～25cmの円礫を2段ないし3段やや外側に傾斜するように積み上げ、裏込めには径5～10cmの小円礫と砂礫混じりの砂質シルトが詰められる。また下段にやや小ぶりの石を積み、最上段内側には比較的大きな円礫が、長軸方向を溝の主軸方向と直交するようにして配置される。

溝底面は、石組下端より下がり、ほぼ平坦で、

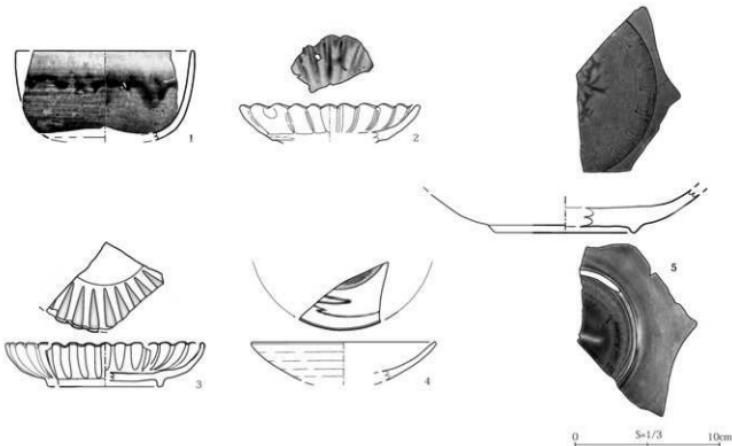


第125図 SD3 溝跡平面図・断面図

南側へ向かって緩やかに傾斜する。掘り方は上端幅1.50～1.80mを測り、掘り方の断面形は南側半分では薺研状である。

遺物は、堆積土から破片も含めて瓦が5点、陶器12点、磁器20点、瓦質土器1点、土師質土器2点が出土した。陶器は17世紀中葉～18世紀中葉にかけての瀬戸・美濃産の碗や輪花皿、大堀相馬産の皿、岸窯産の擂鉢等が堆積土2層から、磁器は17世紀後半～18世紀代の肥前産、波佐見産の碗、皿、杯、鉢、袋物等が1・2層から出土した。そのうち瀬戸・美濃産陶器3点、波佐見、肥前産磁器各1点を図示した。

SD3の機能していた時期は、出土遺物から17世紀代から18世紀中葉にかけてと考えられ、18世紀後葉には埋められてその上に盛り土されたものと推測される。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	100-10	2層	陶器	碗	上縁部 側面	やや密 緻密	(12.1)	-	(6.2)	瀬戸・美濃	18世紀前葉	舟の渡輪	1-55
2	100-11	2層	陶器	輪花皿	上縁部 底部	普通	(12.5)	-	(2.6)	瀬戸・美濃	17世紀後半	灰釉・輪花	1-56
3	100-12	2層	陶器	輪花皿	上縁部 高台	やや密 緻密	(13.7)	(8.0)	3.0	瀬戸・美濃	17世紀中葉	灰釉・型押し 内面に重ね焼き 舟付着	1-57
4	101-2	1層	磁器	皿	上縁部 底部	密	(12.8)	-	(2.65)	波佐見	17世紀末～ 18世紀中葉	内面：染付電文 底の舟輪削ぎ	J-49
5	101-1	2層	磁器	皿	高台	やや粗	-	(9.6)	(2.9)	肥前	17世紀後半	青磁 見込みに墨文印刷	J-50

第126図 SD3溝跡出土遺物

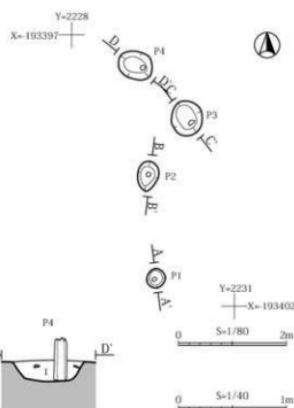
### (3) 性格不明遺構

#### 1) SX30 性格不明遺構（第127図、図版59-5～60-8）

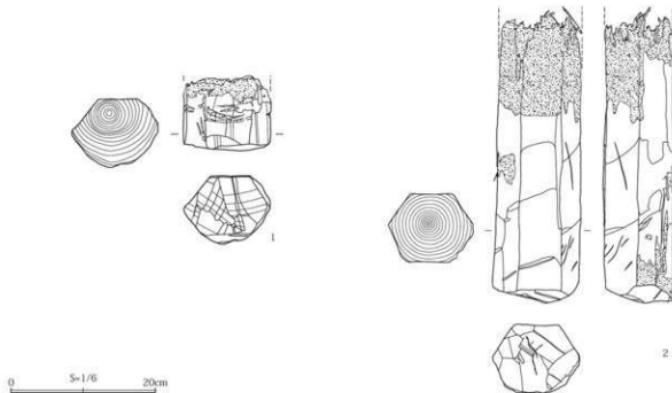
N1-W8～S1-W8 グリッドに位置する柱穴跡である。SX30-P1～P4まで4本の柱根が検出された。P1、P2、P4が南北方向に直線上に、P2、P3、P4は「く」の字形に並び、柱列跡と必ずしも判断しがたいのであるが、何れも柱根の形状が同様であること、掘り方が確認され礎板石らしい石が確認されること等共通しているので、同一の遺構の一部であるとし SX30とした。柱間寸法は、P1-P2が1.92m(6尺3寸)、P2-P4は2.03m(6尺7寸)。

### 第3節 迂回路部

P2-P3 は 1.28m (4 尺 2 寸) P3-P4 は 1.30m (4 尺 3 寸) を測る。各柱穴の規模は、長軸 36 ~ 66cm、短軸 35 ~ 59cm、深さ 6 ~ 19cm を測り、平面形は楕円形、断面形は逆台形または皿形である。検出された柱根は、長さ 9.1 ~ 40.9cm、幅 10 ~ 11.9cm を測り、下端はほぼ平らに、側面は 6 面に面取りされている。上端は V 層上面で欠損しており、IV 層からの掘り込みである可能性が考えられるが確認できなかった。P1 ~ 3 では、柱根の下に礎板石と考えられる円礎が検出された。遺物は、柱根 4 点のみで、P1 及び P4 の柱根 2 点を図示した。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SX30P1	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径 2 ~ 5cm の小礎少量 磚板石
	2	5Y4/1	灰褐色	シルト	ややあり	ややあり
SX30P2	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり
SX30P3	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径 2 ~ 5cm の小礎、径 10 ~ 20cm の円礎（相因石か）少量
SX30P4	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径 2 ~ 5cm の小礎多量

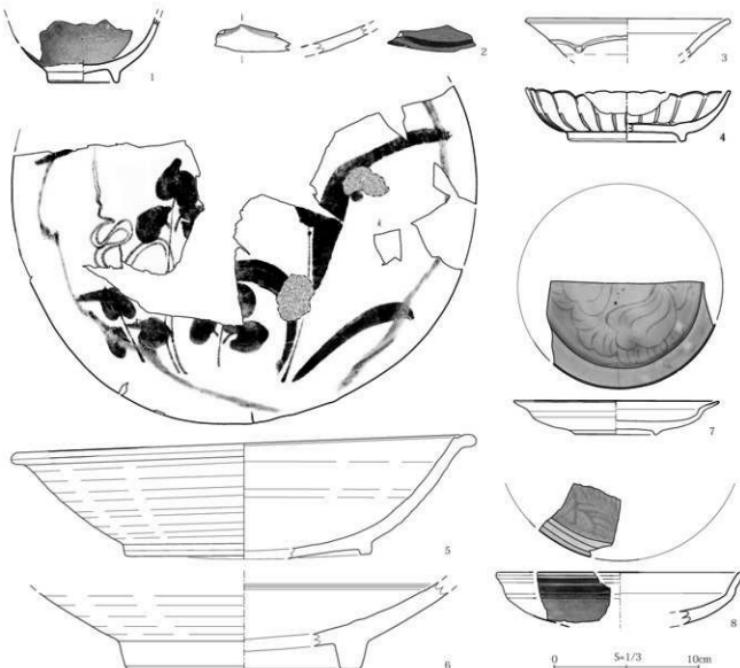


図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ				
1	101-3	SX30P1 1層	木製品	9.1	10.6	8.3	芯持材	クリ	柱根 面取り	L-23
2	101-4	SX30P4 1層	木製品	40.9	11.9	9.7	芯持材	クリ	柱根 6 面に面取り	L-24

第 127 図 SX30 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

## (4) V層出土遺物 (第128~130図、図版101-5~103-6)

V層からは破片総数にして150点の遺物が出土した。その内訳は、瓦12点、陶器20点、磁器42点、土師質土器20点、石製品5点、木製品29点、金属製品7点、その他15点である。瓦は平瓦や丸瓦の破片等が、陶器では、瀬戸・美濃産の皿や鉢が比較的多く、次いで唐津産の皿や鉢等、17世紀代~18世紀中葉にかけてのもの

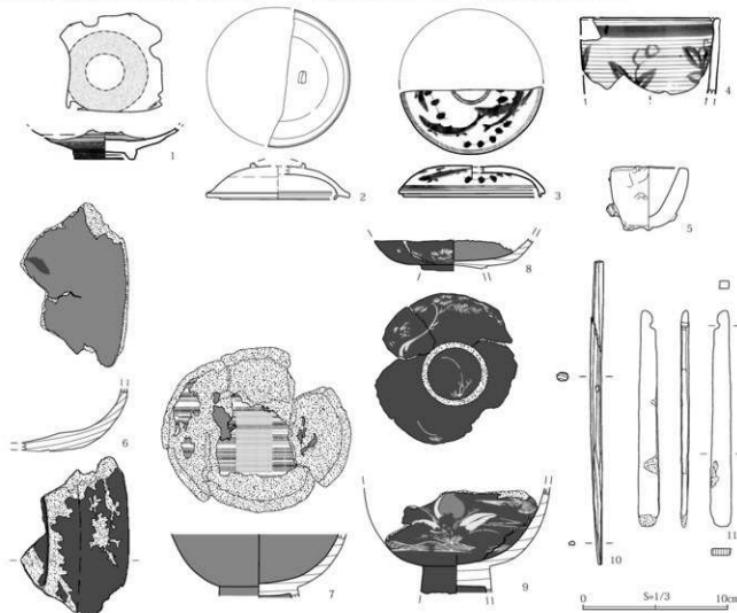


図版番号	写真図版番号	グリッド番号	種別	器種	部位	胎上	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	101-5	N1-W8	陶器	碗	体部~高台	やや粗	-	4.7	4.5	小野相馬	18世紀代	灰釉	1-58
2	101-6	N2-W8	陶器	皿	体部	やや粗	-	-	-	唐津	16世紀末葉~17世紀初頭	内面: 跡船	1-59
3	101-7	N2-W8	陶器	不明	口縁~体部	やや密	(14.2)	(8.4)	(2.72)	瀬戸・美濃	江戸時代	灰釉 隆帯	1-60
4	101-8	N1-W8	陶器	輪花皿	口縁~高台	やや密	(14.24)	(8.14)	3.7	瀬戸・美濃	17世紀末葉	型押し成形後シボによる整形 内面: 布目紋痕有り 重ね焼け	1-61
5	101-9	N1-W8	陶器	鉢	口縁~高台	密	35.5	18.65	9.45	瀬戸・美濃	17世紀後半~18世紀初頭	灰釉 内面: 跡船 緑釉	1-62
6	101-10	N2-W7	陶器	鉢	体部~高台	やや密	(17.7)	(16.4)	(6.0)	唐津	17世紀中葉~後葉	灰釉 無釉 内面: 灰釉 沈線あり	1-63
7	101-11	N1-W8	磁器	皿	口縁~高台	密	(14.2)	(5.8)	2.35	肥前	17世紀中葉~後葉	青磁 磁紋付器 内面: 見込みに印刷	J-51
8	102-1	N1-W8	磁器	皿	口縁~体部	密	(17.20)	-	(3.60)	肥前	17世紀末葉~18世紀前葉	青磁 内面: 見込みに階級	J-52

第128図 V層出土遺物(1)

### 第3節 迂回路部

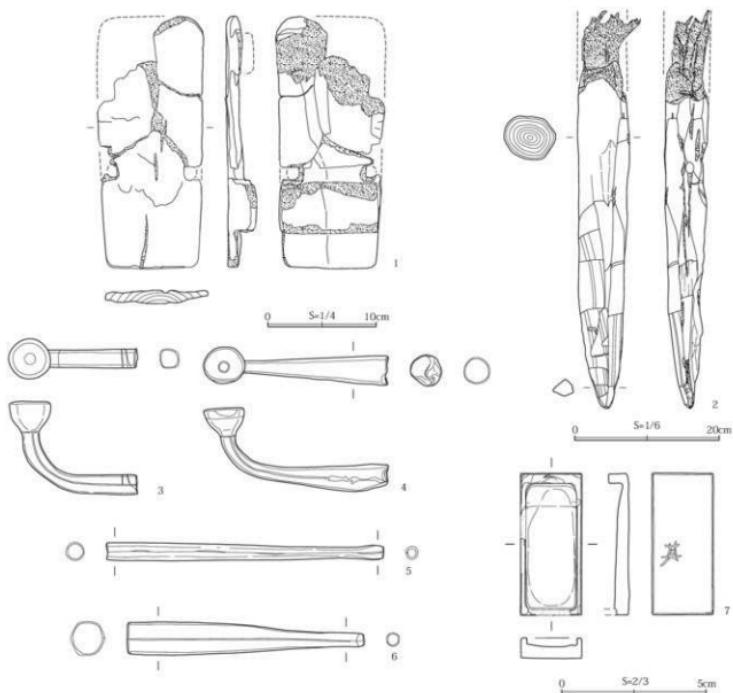
が見られる。磁器も同様に、17世紀後葉～18世紀中葉の肥前産の碗や皿、蓋、香炉等の破片が見られる。木製品では、漆器椀等が比較的多く出土した。ここでは、比較的残りの良い24点の遺物を図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径	器高					
1	102-2	S1-W8	磁器	皿	体部～高台	密	-	4.20	(2.15)	肥前	17世紀後葉～18世紀中葉	染付 内面：蛇/日輪絵	J-53	
2	102-3	N2-W6	磁器	蓋	把手～口縁	透	(8.0)	-	2.5	不明	近世	鉢輪 透明釉	最大径 9.95cm	J-54
3	102-4	N1-W8	磁器	蓋	中央部	やや密	9.5	-	2.15	肥前	18世紀代	染付魚文 捩み欠頭 漆黒底	J-55	
4	102-5	S1-W8	磁器	四型碗？	体部	やや密	9.7	-	5.3	肥前	18世紀代	染付草花文 鮎文	J-56	
5	102-6	N2-W8	土師質土器	明鏡	口縁～底部	粗	5.30	-	4.45	在地	近世	側・湖玉付着 内面：無釉	I-64	

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考			登録番号
				口径	底径	器高			木取り	樹種	備考	
6	102-7	N1-W7	漆器	(11.3)	-	(4.4)	横木取り	トチノキ	楕	円形 外面：黒漆 内面：赤漆		L-25
7	102-8	N1W8	漆器	(13.1)	(5.6)	(4.4)	横木取り	ブナ属	楕	赤漆		L-26
8	102-10	N1-W8	漆器	(10.4)	(4.4)	(2.1)	横木取り	トチノキ	楕	外面：黒漆地に金彩 内面：赤漆		L-27
9	102-11	N2-W8	漆器	(12.8)	(5.0)	(7.1)	横木取り	ブナ属	楕	外面：黒漆地に赤漆及び金彩 内面：赤漆		L-28
10	102-12	N1-W8	木製品	21.0	0.8	0.6	分割材	スギ	著	6面に面取り		L-29
11	102-9	N2-W8	木製品	14.9	1.4	0.5	板目	スギ	有板板	上端付近に抉り		L-30

第129図 V層出土遺物(2)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			木取り	礎種	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ				
1	103-1	N2-W7	木製品	23.2	9.6	2.6	板目	ハリギリ	逆面下駄	L-31
2	102-13	N1-W	木製品	54.9	7.2	5.9	艺持材	クリ	柄	L-32

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
3	103-2	N1-W6	金属製品	4.45	-	-	6.91	煙管(椎首) 最大幅1.4cm 最小幅0.65cm	N-8
4	103-3	N1-W8	金属製品	6.4	-	-	4.48	煙管(椎首) 最大幅1.3cm 最小幅1.0cm	N-9
5	103-4	N1-W6	金属製品	9.6	-	-	4.95	煙管(吸口) 最大径0.6cm 最小径0.4cm	N-10
6	103-5	N1-W7	金属製品	8.2	-	-	8.83	煙管(吸口) 最大径1.15cm 最小径0.5cm	N-11

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)				石材	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量			
7	103-6	N1-W6	石製品	4.95	2.13	0.7	13.32	粘板岩	級 滑帶面 裏面に刻文字「真」	K-5

第130図 V層出土遺物(3)

### 第3節 迂回路部

#### 3 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物

IV層は、迂回路部ではほぼ全域で確認された。IV層中には円碟や角碟等が多量に含まれ、土層断面では、傾斜した堆積が観察された。土層中から概ね18世紀中葉～後葉の遺物が多量に出土しており、当該時期に盛土されたものと考えられる。調査区壁面の観察から、西側では南西から北東方向へ傾斜した堆積が確認される。中央から東側では、南東へ向かって傾斜しており、調査区南東隅ではIV層の堆積は見られなくなる。

IV層上面では、調査区北西部で礎石を伴う柱列跡や11基に及ぶカマド跡が検出され、カマド跡を囲うように南側と東側に石組溝跡が検出された。これらは建物（白所）跡であろうと考えられる。また、その床面では版築状の土層が観察された。この版築状の堆積は概ね台所跡の範囲で確認され、2層に大別できた。遺構は上面（IV層上面）及び2層上面（以下IV-2層上面）で検出した。このIV-2層からは17世紀～18世紀中葉の遺物が出土しており、18世紀後葉頃、IV層の盛土がされた時期に構築されたものと思われる。ここでは、IV-2層上面遺構について先に述べ、カマド遺構等上層の遺構については、その他のIV層上面遺構とともに後で記述する。

#### 〈IV-2層上面の遺構〉

IV-2層上面の遺構は調査区北西側でのみ検出した。IV-2層は、IV層の堆積の上に、黒褐色を基調とする砂質シルトと黄灰色のシルトストーンが水平に堆積している。

検出された遺構は溝跡1条、石敷状の性格不明遺構1基、土坑状の性格不明遺構3基、柱穴8基である。

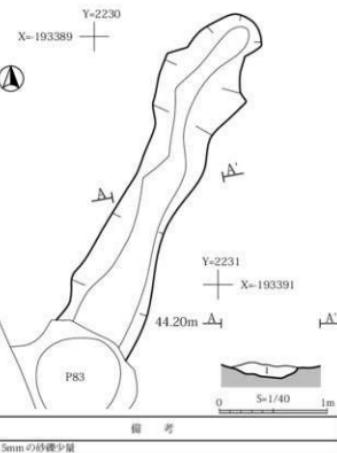


第131図 IV-2層上面遺構配置図

## (1) 溝跡

## 1) SD8 溝跡 (第 132 図、図版 61-3・4)

N1-W8 ~ N2-W7 グリッドに位置する素掘りの溝跡である。西端で P83 と重複し、P83 より古い。北側は、次第に幅を狭めて IV 層上面で検出された SX34 石敷き遺構に接する付近で収束する。確認した規模は、長さ 3.24m、上端幅 44 ~ 74cm、下端幅 10 ~ 64cm、深さ最大 15cm を測る。平面形はほぼ直線状で、断面形は皿状である。主軸方向は N-25°W を示す。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で径 1 ~ 5mm 程の砂礫を少量含む。底面はわずかに起伏しながら南西へ傾斜し、壁面は緩やかに立ち上がる。出土遺物は瓦の破片が 1 点のみ出土したが、小片のため図示し得なかった。

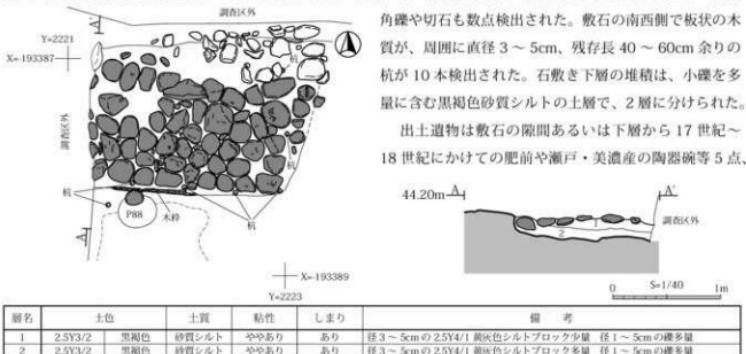


第 132 図 SD8 溝跡平面図・断面図

## (2) 性格不明遺構

## 1) SX40 性格不明遺構 (第 133・134 図、図版 61-5 ~ 62-3)

N2-W8 グリッドに位置する石敷き遺構で、西側は調査区外へ延びる。北側及び東側に隣接して多量の礫が検出されている。当該地点の IV 層上面では建物の礫石列 SB1 が検出されているが、そこから 20cm 程掘り下げたところで検出された。確認した規模は、長さ 2.17m、幅 1.10m を測る。平面形は長方形であり、主軸方向は N-87°W を示す。石敷は長さ 18 ~ 41cm、幅 14 ~ 26cm、厚さ 8 ~ 15cm のやや扁平な円礫を敷き詰め、周囲を板で囲い、杭を打ち込んで固定していたものと思われる。円礫には一部縁辺を削って整形したものが見られる。また、

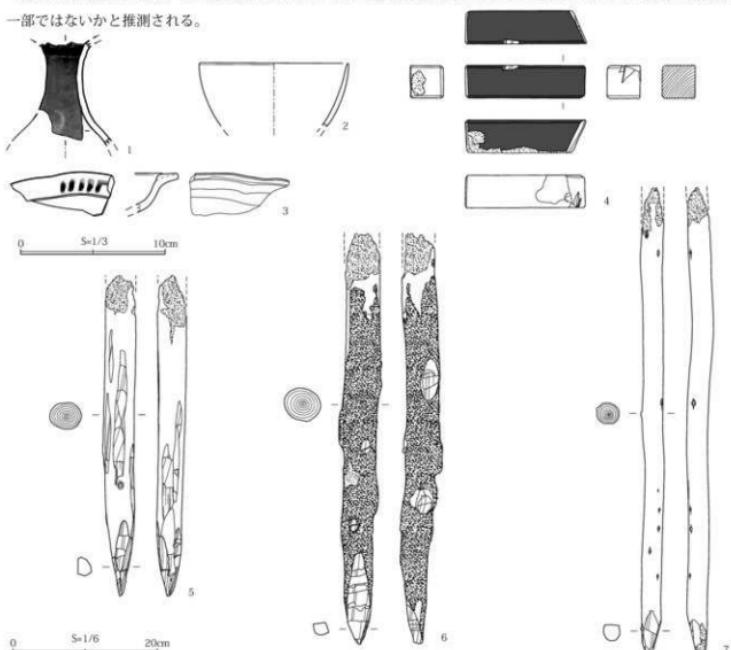


第 133 図 SX40 性格不明遺構平面図・断面図

### 第3節 迂回路部

肥前産の磁器碗や皿3点、土師質土器破片1点、瓦破片2点、木製品では桶把手の一部や黒漆が塗布された部材の一部、その他杭等が12点出土した。そのうち産地不明の徳利1点、肥前産磁器2点、漆製品1点と杭3点を図示した。

遺構の時期及び性格は、出土遺物及び層位から18世紀後葉以降で、IV層上面で検出されたSB1以前の建物跡の一部ではないかと推測される。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	103-8	1層	陶器	徳利	肩部	やや粗	-	-	7.40	不明	18世紀後葉	鉄軸 口縁部に墨輪 最大径6.75cm	J-65
2	103-7	1層	磁器	碗	上縁~体部	密	(10.4)	(5.4)	(4.4)	肥前	17世紀末葉~18世紀初半	透明釉	J-57
3	103-9	1層	磁器	変形皿	上縁~体部	密	-	-	2.2	肥前	17世紀後葉~中葉	染付 折縁	J-58

図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考			登録番号
				長さ	幅	厚さ			直径	針葉樹	部材	
4	103-10	2層	漆製品	8.3	2.3	2.3	直径	針葉樹	部材	墨塗		L-33
5	103-11	-	木製品	44.2	4.3	4.0	芯持材	針葉樹	杭			L-34
6	103-12	-	木製品	56.7	5.2	5.3	芯持材	針葉樹	杭			L-35
7	104-1	-	木製品	64.4	3.1	3.1	芯持材	スギ	杭			L-36

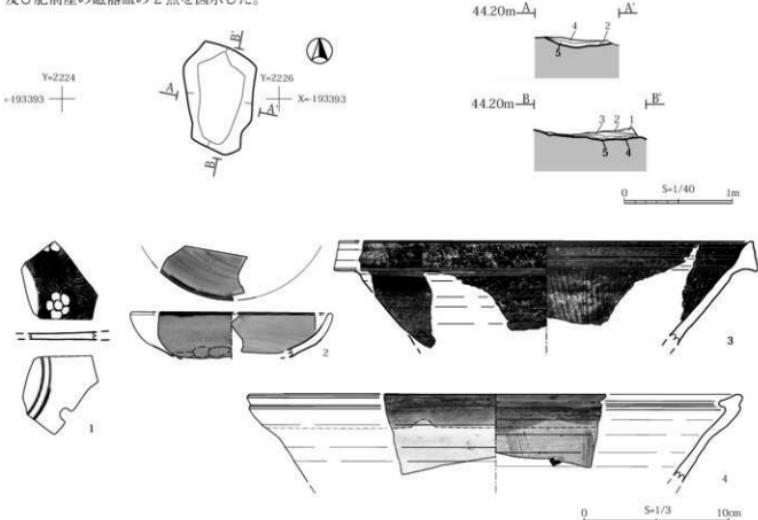
第134図 SX40性格不明遺構出土遺物

## 2) SX43 性格不明遺構 (第135図、図版62-4～63-2)

N1-W8 グリッドに位置する。IV層上面検出のSX21の南側に位置し、IV層上面のSD2 北側の石組を除去したところ、焼土の堆積のみが検出された。規模は、長軸 92cm、短軸 62cm、深さ 8cm を測る。平面形は不整な梢円形で、断面形は皿形である。

焼土は被熱して灰白色に変色したシルトと、その下層に炭化物を大量に含む層が薄く堆積する。また、北側は黒褐色砂質シルトの層が覆っていた。当遺構は、SD2 や SX21 等が築造される以前にカマドの灰等を廃棄した痕跡と考えられる。

遺物は中国産の磁器皿や肥前産の皿、丹波産や岸窯産の擂鉢など、16世紀末葉～18世紀前半の陶磁器の破片が6点、その他土師質土器の皿等が数点と杭が1点出土している。そのうち丹波産と岸窯産の擂鉢2点、中国産及び肥前産の磁器皿の2点を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 5Y5/1	灰色	粘土	なし	なし	被熱 灰少量
2 7.5YR6/4	灰白色	粘土	なし	なし	被熱 炭化物多量
3 2.5Y7/1	灰白色	粘土	なし	なし	被熱
4 N1.5/	黒色	-	なし	なし	炭化物
5 2.5Y2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	ややあり	目 2 ~ 5mm の小礫少量

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	104-2	5層	磁器	皿	底部	密	-	-	(5.5)	中国	16世紀末葉～17世紀初頭 最大幅 4.75cm	染付二重輪線 内面：染付花文	J-59
2	104-3	5層	磁器	皿	口縁～体部	密	(14.0)	(8.1)	(3.1)	肥前	17世紀～18世紀 青磁釉 内面：陰刻	17世紀後半～18世紀前半	J-60
3	104-4	5層	陶器	擂鉢	口縁～体部	粗	(28.8)	-	(7.15)	丹波	17世紀後半～18世紀前半	鐵輪 内面：櫛目7本1単位	166
4	104-5	5層	陶器	擂鉢	口縁～体部	粗	(34.4)	-	(6.1)	岸窯	17世紀前半～中葉	鐵輪 灰釉 内面：櫛目6本1単位	167

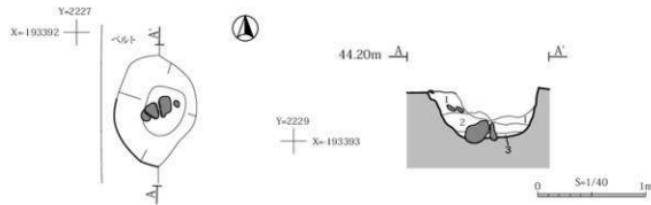
第135図 SX43 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### 3) SX45 性格不明遺構 (第136図、図版63-3・4)

N1-W8 グリッドに位置する土坑状の遺構で、北西側にIV層上面のSX21と重複し、SX21より古い。また、ベルト断面で確認されたため、東側半分は大分掘り下げてしまった。また、上層で別の柱穴と重複する。確認した規模は、長軸 1.13m、短軸 75cm、深さ 41cm を測る。平面形は主軸方向 N0°-W を示す橢円形と考えられ、断面形は逆台形である。

堆積土は砂質シルトを主体とし灰黄褐色、黒色、オリーブ黒色の3層に分けられる。遺物は出土していない。



第136図 SX45 性格不明遺構平面図・断面図

#### 4) SX46 性格不明遺構 (第137図、図版63-5・6)

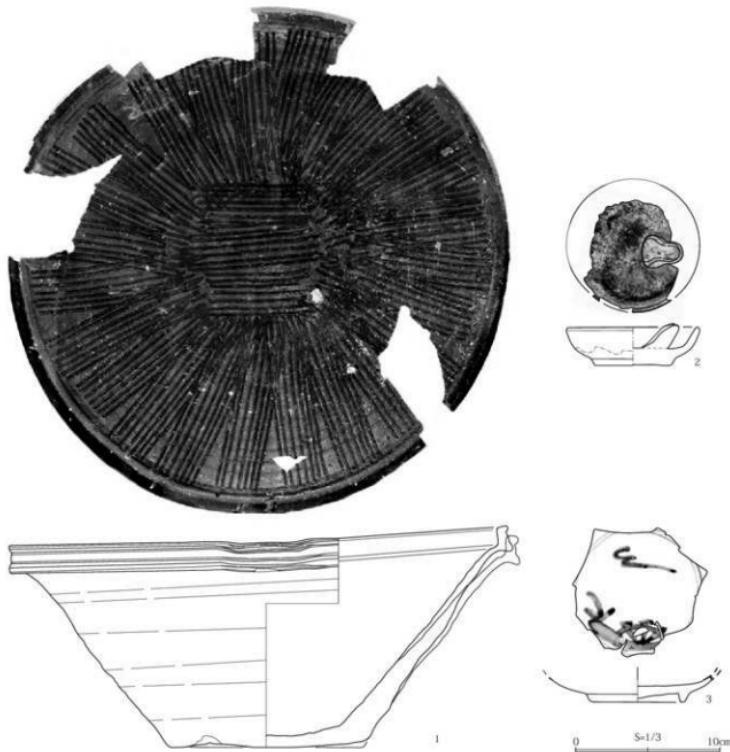
N1-W8 グリッドに位置する土坑状の遺構である。SX45 の北側で検出された。北側は土層観察用のトレチにより削平され、南側が検出された。上層のSX21と重複しSX21より古い。規模は、長さ 41cm、幅 20cm、深さ 14cm を測る。平面形は不明で、断面形は逆台形である。堆積土は暗灰黄色・黒色の砂質シルトの2層に分けられる。焼土を含み、2層は炭化物を大量に含む。遺物は出土していない。



第137図 SX46 性格不明遺構平面図・断面図

## (3) IV -2 層出土遺物 (第 138 図、図版 63-7・8)

IV -2 層からは、総数で 41 点の遺物が出土している。その内訳は陶器 10 点、磁器 9 点、土師質土器 4 点、杭等の木製品 14 点、金属製品 2 点、その他 2 点である。陶器は肥前産の碗、丹波産の擂鉢や岸窯産の擂鉢や灯明皿、磁器では肥前産の碗や皿等 17 世紀～18 世紀後葉にかけての遺物が出土している。これらは、周囲の IV 層堆積層から出土した陶磁器類と時期的に重なり、IV 層が盛上されたのと同時期あるいは若干遅れて IV -2 層が堆積したものと考えられる。ここでは、丹波産の擂鉢と岸窯産灯明皿、肥前産磁器皿の 3 点を図示した。



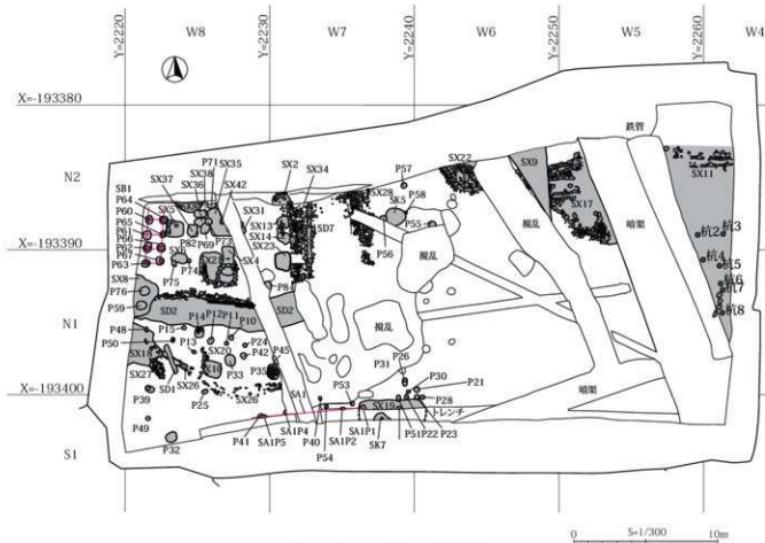
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	104-6	N2-W8	陶器	擂鉢	口縁～底部	粗	34.65	13.93	15.35	丹波	17世紀後葉～18世紀中期	鉄輪底部に口直 内側：瘤目7本1単位	1-68
2	104-7	N2-W8	陶器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	(9.2)	5.35	2.9	岸窯	17世紀後葉	灰釉ロクロ右回転切妻切り縁	1-69
3	104-8	N2-W8	磁器	皿	体部～高台	密	(10.5)	6.45	(1.83)	肥前	17世紀後葉	外面：透明釉 内面：染付二重輪縁 形状歪む	1-61

第 138 図 IV -2 層出土遺物

## &lt;IV層上面の遺構&gt;

IV層上面で検出した遺構は、調査区西側及び南側に多く、北西側で検出された建物跡（台所跡）に伴うカマド遺構及び溝跡と、その南側に溝状あるいは土坑状の性格不明遺構や柱穴が点在する。調査区中央から東側では、屋敷境に係るものと思われる溝状あるいは石列状の遺構が検出され、南東側に向かって落ち込み、低湿地状を呈していたものと推測される。

IV層上面で検出した遺構は、柱列跡1条、建物跡1軒、溝跡3条、土坑3基、カマド跡11基、性格不明遺構16基、柱穴30基である。



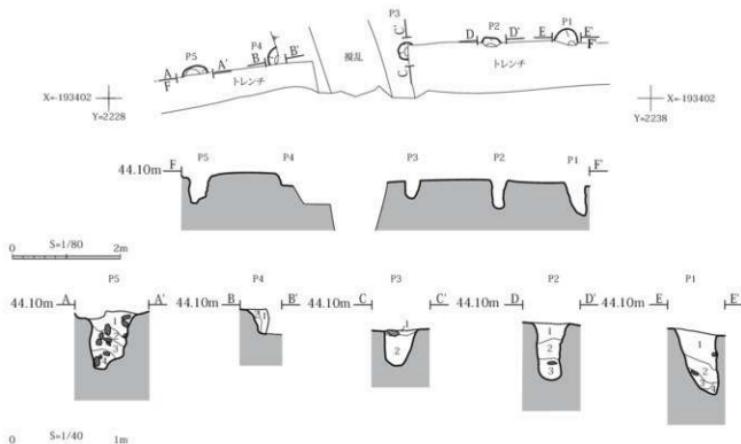
第139図 IV層上面遺構配置図

## (1) 柱列跡

## 1) SA1柱列跡（第140図、図版65-2～66-2）

S1-W7～S1-W8 グリッドに位置し、東西に並ぶSA1P1～SA1P5までの5基の柱穴で構成される。途中P3とP4の間を擾乱が走るため、1基削平されている可能性がある。また、各柱穴の南半分は、調査区南壁に沿って掘削した土層観察用のトレンチによって削平されているため、確認されたのは北側半分である。P4はさらに擾乱により東側半分が削平されている。確認した規模は、長さ7.04m、柱間寸法は東から1.44m(4尺7寸)、1.52m(5尺)、2.40m(7尺9寸)、1.64m(5尺4寸)を測る。主軸方向はN-85°-Eを示す。各柱穴は長軸32～40cm、短軸約35cm、深さ21～60cmを測り、平面形は概ね楕円形を呈し、断面形はU字形を呈する。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、シルトや砂礫の堆積も見られる。また包含される礫や炭化物の量によってそれぞれ2層～4層に分けられる。P4には柱の抜き取り痕と思われる堆積が確認できるが、そのほかは柱痕等は確認できなかつた。

遺物はSA1P1 堆積土上層より大堀相馬産の碗や堤産の擂鉢等、肥前産の染付け碗等 18世紀後半～19世紀代の陶磁器の破片が出土しているが、何れも細片のため図化し得なかった。



遺構名	層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
SA1P1	1 10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	あり	径1～3cmの10YR5/3にぶい黄褐色小ブロック少量 小礫少量 灰化物微量
	2 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.1～2cmの10YR8/6 黄褐色小ブロック微量 小礫微量 灰化物微量
	3 10YR3/1	黒褐色	シルト	あり	あり	径0.1～2cmの10YR8/6 黄褐色小ブロック微量 小礫微量 灰化物微量
SA1P2	1 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.1～2cmの10YR8/6 黄褐色小ブロック微量 小礫微量 灰化物微量
	2 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	10YR2/1 黒褐色の砂質シルト微量 小礫微量
	3 10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	あり	10YR2/1 黒褐色の砂質シルト微量 小礫微量
SA1P4	1 10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.1～2cmの10YR8/6 黄褐色小ブロック微量 小礫微量 灰化物微量
	2 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径0.1～2cmの10YR8/6 黄褐色小ブロック微量 小礫微量 灰化物微量
SA1P5	1 10YR4/1	褐色	砂質シルト	あり	あり	小礫微量 灰化物微量
	2 2.5Y4/1	黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径10～20cmの砂量 大礫微量 灰化物微量
	3 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	10YR3/1 黒褐色シルト 径10～20cmの砂量 大礫微量 灰化物微量
	4 2.5Y3/1	黒褐色	砂礫	無し	あり	

第140図 SA1柱跡平面図・断面図

## (2) 建物跡

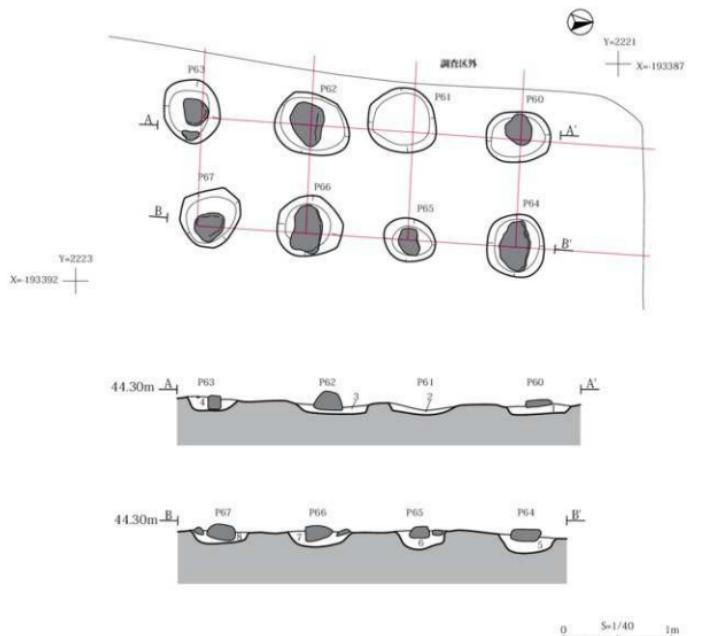
## 1) SB1 建物跡（第141・142図、図版66-3～68-7）

N1-W8～N2-W8 グリッドに位置する礎石建物跡である。南北方向に2列に並ぶP60～68の8基の柱穴で構成される。この柱穴列の南にはSD2及びSX8が位置し、北側は調査区北壁、西側は調査区西壁となる。おそらく、北側及び西側については調査区外へ延びるものと思われる。確認した規模は、西側柱穴列（P60～P63）が3間で3.0m、柱間寸法は南から1.04m（3尺4寸）、90cm（3尺）、1.08m（3尺5寸）、南側柱穴列（P64～P67）も3間で2.84m、柱間寸法は南から90cm（3尺）、92cm（3尺）、96cm（3尺1寸）を測る。また、P60-P64間は1.04m（3尺4寸）、P61-P65間は1.10m（3尺6寸）、P62-P66間は1.0m（3尺3寸）、P63-P67間は1.06m（3尺5寸）を測る。主軸方向はN4°-Eを示す。各柱穴の平面形は梢円形を呈し、長軸45～70cm、短軸38～

### 第3節 迂回路部

56cm、深さ10~12cmを測る。断面形は皿形で、堆積土は黒褐色砂質シルトまたはにぶい黄褐色砂質シルトである。P61を除いてそれぞれ中央には長さ22~44cm、幅18~28cm、厚さ6~18cmの円窪が据えられており、礎石として利用されていたものと思われる。根固め石はP61、P63、P65、P66、P67は礎石の脇にやや小ぶりの円窪が置かれており、P60、P62、P64には見られず、シルトの堆積土のみで固定されていた。

遺物はそれぞれの柱穴の堆積土より19世紀代の堤産の鍋や18世紀代の肥前産の染付け碗や皿の破片、土師質土器の破片、切り釘や寛永通宝(新寛永)、牡蠣の貝殻等が少量であるが出土した。そのうちP67より出土した鍋及び古錢各1点を図示した。



第141図 SB1 建物跡平面図・断面図

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	P67 1層		陶器	鍋	上縁～底部	やや粗	(15.0)	(7.7)	5.85	堤	10世紀代	灰陶 回転式切り歯	I-70

図版番号	写真図版番号	層位	銭貨名	初鑄年	法量(cm・g)			備考	登録番号
					外径	穿径	重量		
2	P67 1層		寶永通宝(新)	1697	2.4	0.6	3.69	無背	N-12

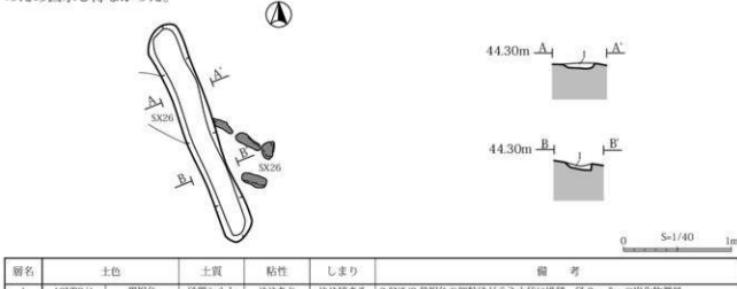
第142図 SB1 建物跡出土遺物

## (3) 溝跡

## 1) SD1溝跡（第143図、図版68-8～69-2）

N1-W8グリッドに位置する素掘りの溝跡である。SX26と重複し、SX26より新しい。確認した規模は、長さ2.1m、上端幅25～31cm、下端幅18～22cm、深さ約5cmを測る。平面形は直線状で、断面形は皿形である。主軸方向はN-21°-Wを示す。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とする単層で、炭化物を含み、黄褐色細粒砂がラミナ状に堆積する。底面は平坦で両端は緩やかに立ち上がる。

遺物は在地産の擂鉢の破片が1点、肥前産の磁器碗破片、土師質土器の破片等が出土しているが、何れも細片のため図示し得なかった。



第143図 SD1溝跡平面図・断面図

## 2) SD2溝跡（第144～147図、図版69-3～70-3）

N1-W8～N1-W9グリッドに位置する東西に走る石組の溝跡である。西端はSX8と重複し、SX8より古い。また、東端は後世の擾乱によって削平される。溝の北側に石組の一部が検出されたほか、溝底面からそれ以前の板溝が検出された。ここでは、石組溝と板溝とを分けて記述する。

確認された石組溝の規模は、検出長11.22m、上端幅82～107cm、下端幅72～103cm、深さ12～15cmを測る。平面形は直線状で、断面形は不整形である。溝の堆積土は、黒色シルト質細粒砂、黒色粗粒砂、黒褐色中粒砂の3層に分けられ、2層の黒色粗粒砂に径3～10cmの礫が多量に含まれる。底面には凹凸があり、北側は石組の壁が立ち上がり、南側は内湾しながら立ち上がる。石組は北側でのみ検出されたが、長さ20～38cm、幅15

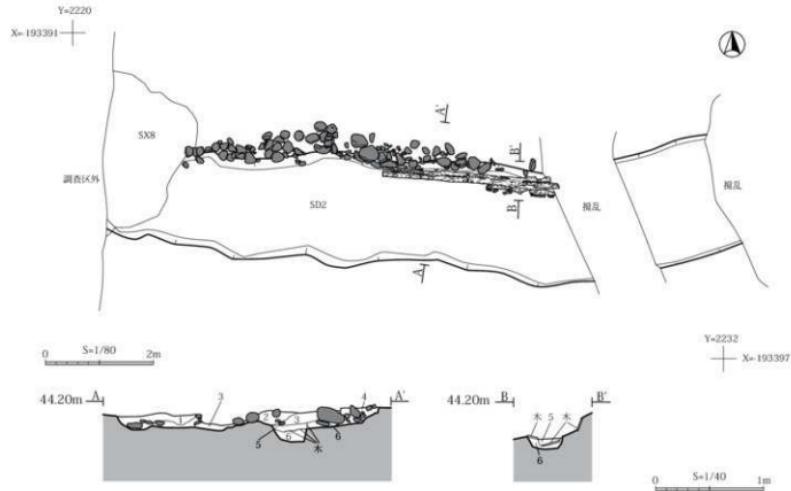
### 第3節 迂回路部

~30cm、厚さ8~18cmの円礫を2段ないし3段積み上げ、裏込めには径5~10cmの円礫や、径0.5~1cmの小礫を含む黒褐色砂質シルトが詰められる。南側では石組は確認できなかった。

石組溝の北側中程から東側の底面で、溝の底板2枚と側板の一部が検出された。石組溝に作り直される以前に機能していた溝と考えられる。規模は、長さ2.86m上端幅30~48cm、下端幅20~30cm、深さ最大8cmを測る。断面形は逆台形であり、底面と両側面に板を張っていたものと思われる。検出された板は杉製で、底板2枚の大きさは、長さ1.6m、幅15~19cm、厚さ2cmと、長さ1.7m、幅18cm、厚さ2cm、南側側板は長さ14.5cm幅12cm厚さ1.8cmを測る。北側側面は長さ10cmほど確認できたがほとんど痕跡だけで図化するに至らなかった。板溝の堆積土はオリーブ黒色中粒砂の単層である。

掘り方の規模は、上端幅2.18~2.86m、下端幅2.02~2.28m、深さ約10.8cm、板溝の掘り方は、幅30~32cm深さ約12cmを測る。

出土遺物は比較的多く、遺物の破片総数は560点を数える。内訳は、瓦69点、陶器295点、磁器99点、瓦質土器7点、土師質土器55点、石製品2点、木製品1点、金属製品(古銭含む)32点である。堆積層1~3層が主体で、陶器は18世紀~19世紀代の大堀相馬産の碗や豆甕、小野相馬産の皿、18世紀代の京都産の碗、17世紀代の瀬戸・美濃産の輪花皿等も見られる。磁器では、17世紀中葉~18世紀後葉の肥前産の皿、猪口、波佐見産の皿等が出土した。その他金属製品で煙管の吸口や、切り釘、鉄滓、寛永通宝等が出土した。そのうち陶器9点。

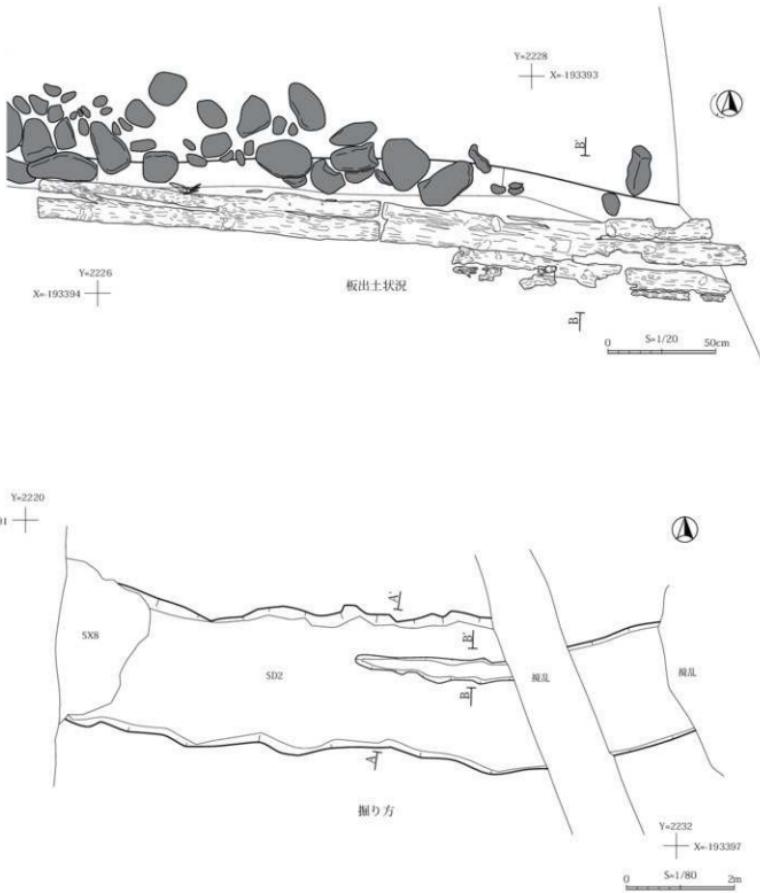


第144図 SD2溝跡平面図・断面図

層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y2/1	黒色	シルト質細砂	なし	なし 2.5Y3/1 黒褐色のシルト質砂多量 径0.5~1cm炭化物少量
2	5Y2/1	黒色	粗粒砂	なし	なし 径3~10cmの砂多量 径1~2cmの炭化物微量
3	2.5Y3/2	黒褐色	中粒砂	なし	なし 径0.5~1cmの炭化物微量 炭化鉄分微量
4	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径約5cmの瓦片微量 径5~15cmの礫込め石多量 10YR4/2 黑褐色の砂質シルト少量 径3~5mmの炭化物微量
5	5Y3/2	オリーブ黒色	中粒砂	なし	なし 径0.5~2cmの炭化物微量
6	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	なし	やや細まる 径0.5~1cmの砂微量 径3~5mmの炭化物微量

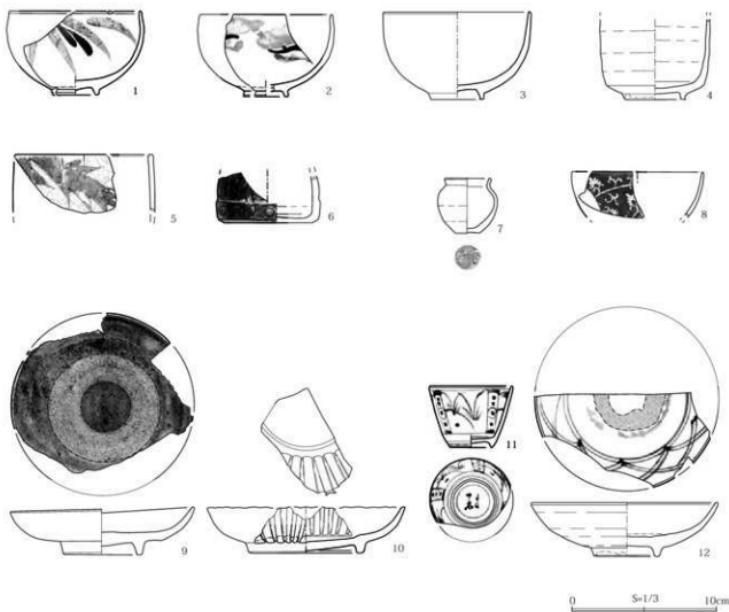
磁器3点、金属製品（古銭含む）4点を図示した。

SD2溝跡の機能した時期は、IV層上面での検出であることや出土した陶磁器類から、18世紀後葉～19世紀中葉と考えられる。またSD2の3層より出土した磁器破片がIV層N1-W6グリッド出土の肥前産の皿（第206図1）と接合関係があり、同時期に投棄されたか、同じ場所からの客土で同じ時期に埋められた可能性が考えられる。



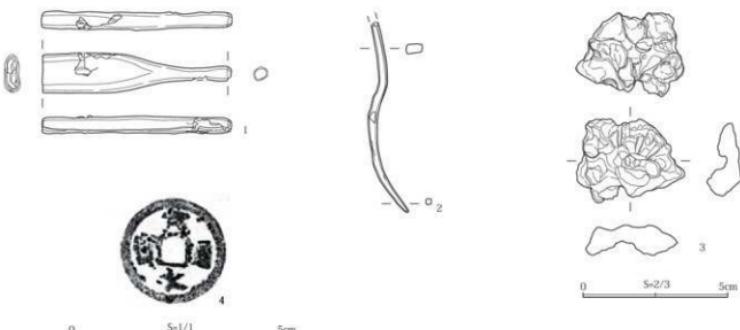
第145図 SD2溝跡板出土状況図・掘り方平面図

第3節 迂回路部



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法線(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	105-3	2層	陶器	碗	口縁～高台	密	(9.0)	(3.2)	5.8	京都	18世紀中葉～後葉	透明釉 上始付け(赤絵、緑絵)	1-71
2	105-4	2層	陶器	碗	口縁～高台	密	(9.20)	(3.10)	5.70	京都	18世紀中葉	色絵 板繪文(上始付け) 最大径(9.40 m)	1-72
3	105-5	2層	陶器	碗	口縁～高台	やや密	(10.25)	3.65	6.05	大堀相馬	18世紀代	灰釉 貫入	1-73
4	105-6	2層	陶器	碗	口縁～体部	やや密	-	4.20	5.50	大堀相馬	18世紀後半～19世紀	灰釉 貫入	1-74
5	105-7	3層	陶器	碗	口縁～体部	やや密	9.6	-	(4)	京都	18世紀～19世紀	長石釉 黒色で練取して黄釉で上始付け 貫入	1-75
6	105-8	3層	陶器	瓶又は詰	体部～底部	密	(7.06)	(5.60)	(3.55)	不明	不明	鐵輪 シノギによる成形	1-76
7	105-9	3層	陶器	豆皿	口縁～底部	やや密	3.20	1.70	3.80	大堀相馬	19世紀中葉	鐵輪	1-77
8	105-10	2層	磁器	碗	口縁～体部	密	9.10	-	(2.15)	肥前	18世紀後葉	上始付け(赤絵；丸文・金彩；唐草文)	1-78
9	105-11	2層	陶器	皿	口縁～体部	粗	12.65	5.35	3.30	小野相馬	18世紀代	灰釉 蛇ノ口輪削ぎ	1-79
10	105-12	2層	陶器	輪花皿	口縁～高台	やや密	(13.76)	(8.0)	(3.20)	瀬戸・美濃	17世紀中葉	灰釉 内面：布目压痕 外縁：輪花	1-80
11	105-13	4層	磁器	皿	口縁～高台	密	5.75	3.08	4.30	肥前	17世紀末～18世紀	染付洋文 高台に記録「大明年製」	J-62
12	106-1	2層	磁器	皿	高台	密	(12.95)	4.55	3.75	波佐見	18世紀中葉～後葉	透明釉 内面：染付格子文	J-63

第146図 SD2溝跡出土遺物(1)



図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	106-2	1層	金属製品	6.55	-	-	4.21	環管(吸L.) 最大径 1.4cm 最小径 0.4cm	N-13
2	106-5	2層	金属製品	6.6	0.55	0.3	46.3	印釘	N-14
3	106-3	5層	金属製品	3.8	2.9	-	17.4	鉄津 板組溝塁より出土	N-15

図版番号	写真図版番号	層位	銭貨名	初跡年	法量(cm・g)			備考	登録番号
					外径	穿孔	重量		
4	106-4	3層	寛永通宝(元)	1639	2.5	0.6	3.23	無背	N-16

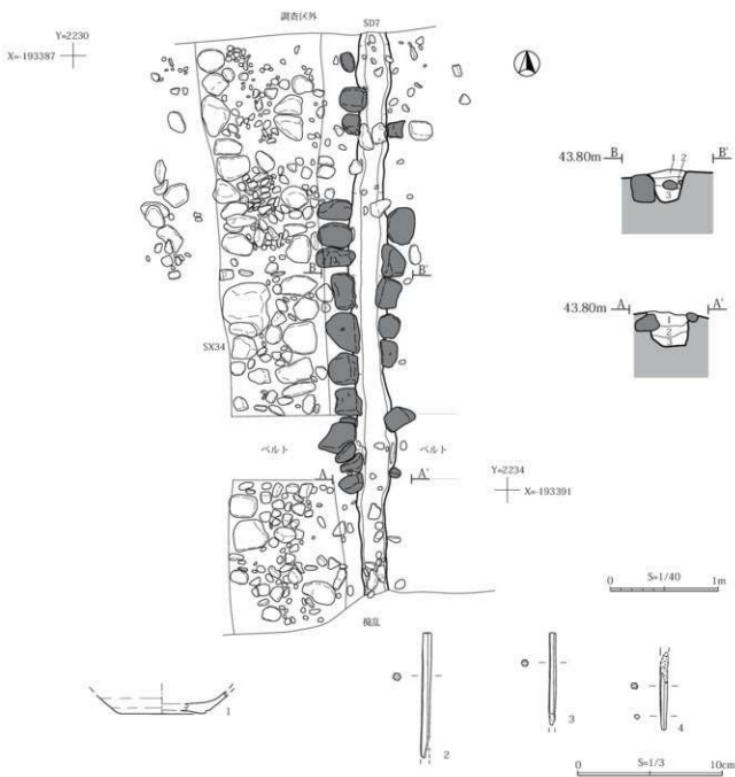
第147図 SD2溝跡出土遺物(2)

## 3) SD7溝跡（第148図、図版70-4～71-2）

N1-W7～N2-W7グリッドに位置する南北に走る石組の溝である。南側は擾乱により削平され、北側は調査区外へ延びる。西側は石敷き状の遺構SX34につながる。確認した規模は、長さ 5.18m、上端幅 18～32cm、下端幅 12～20cm、深さ最大 33cm を測る。平面形は直線状で、断面形は長方形である。主軸方向は N-0°-W を示す。堆積土は暗オリーブ褐色砂質シルト、暗灰黄色砂質シルト、黒褐色砂質シルトの3層に分けられ、何れも砂礫を多量に含むほか、1・2層は円礫を少量含む。3層は機能していた当時の堆積層で、1・2層は人為的に埋められたものと考えられる。石組は、長さ 20～35cm、幅 15～30cm、厚さ 12～26cm の円礫を1段ないし2段重ね、裏込めには径 5～10cm の小礫と砂質シルトを詰めて安定させている。検出するまでに円礫を取り除いているので、上層は削平されて崩れていたものと考えられる。底面は概ね平坦で、石組下端よりやや下がる。

出土遺物は1層から瓦の破片が1点、2層から18世紀代の肥前産の磁器碗の破片が1点、底面直上でかわらけの底部が1点、木製品の破片が数点出土した。そのうち、かわらけ1点、木製の箸3点を図示した。

### 第3節 迂回路部



番名	土色		土質	粘性	しまり	備考			
1	2.5Y3/3		暗オリーブ褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～5mmの砂礫多量 径5～20cmの礫少量		
2	2.5Y4/2		暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～5mmの砂礫多量 径5～20cmの礫少量		
3	10YR4/1		黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径1～5mmの砂礫多量		

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							長さ	幅	厚さ				
1	106-6	3層	土師質土器	かわらけ	体部～底部	やや粗	(8.0)	(6.0)	(1.58)	台地	近世	無輪 口クロナデ	1-81
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考			登録番号	
				長さ	幅	厚さ							
2	106-7	3層	木製品	8.6	0.6	0.5	分割材	アヌラオ属	著				L-37
3	106-8	3層	木製品	6.4	0.5	0.4	分割材	アヌラオ属	著				L-38
4	106-9	3層	木製品	5.4	0.5	0.4	分割材	アヌラオ属	著				L-39

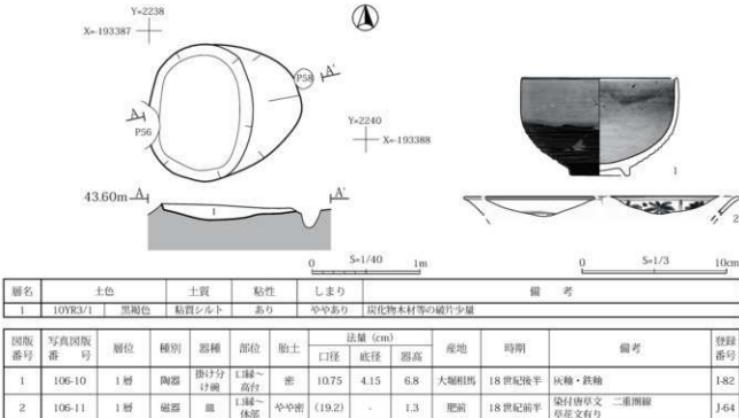
第148図 SD7溝跡平面図・断面図・出土遺物

## (4) 土坑

## 1) SK5 土坑 (第149図、図版71-3)

N2-W7 グリッドに位置し、規模は、長軸 1.42m、短軸 1.25m、深さ 15cm を測る。平面形は梢円形で、断面形は皿形である。主軸方向は N.77°-E を示す。堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層で炭化物や木材等の破片を少量含む。底面は浅く窪み、壁面は外傾して立ち上がり、東側では途中で傾斜を変えて緩やかに立ち上がる。

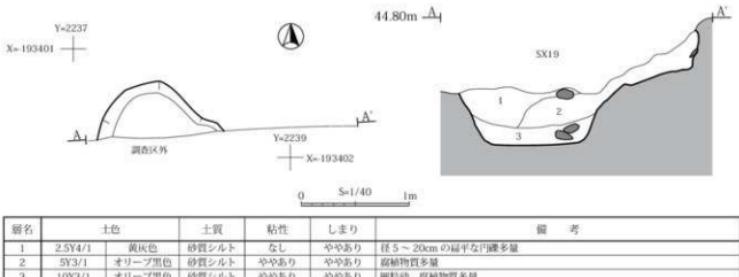
出土遺物は大堀相馬産の碗や、瀬戸・美濃産の鉢、肥前産の染付け皿等 18世紀代の遺物が瓦片とともに出土した。そのうち陶器 1 点、磁器 1 点を図示した。



第149図 SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物

## 1) SK7 土坑 (第150・151図、図版71-4～7)

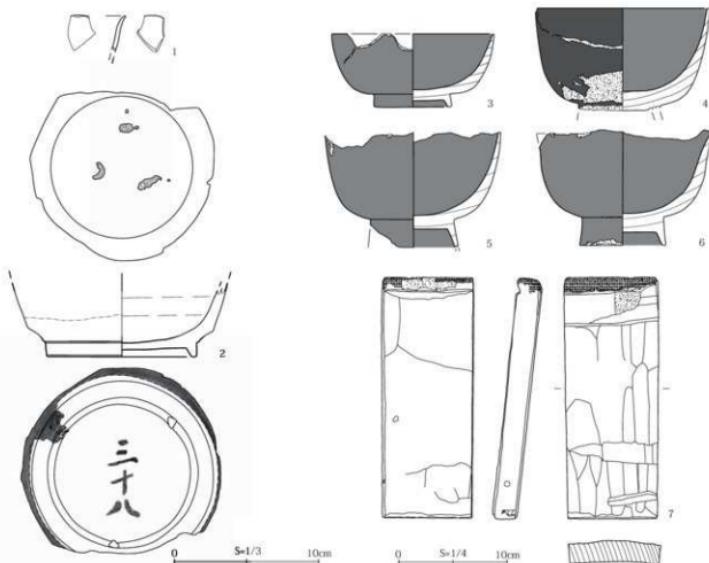
S1-W7 グリッドに位置し、遺構の北半分は調査区南端に設定されたトレンチによって削平され、南側は調査区外となる。SX19 と重複し、SX19 より古く上部を削平される。確認した規模は、検出長 2.21m、幅 55cm、深さ 1.05 m を測る。断面形は階段状である。堆積土は黄灰色及びオリーブ黒色の砂質シルトで 3 層に分けられる。1 層は径



第150図 SK7 土坑平面図・断面図

### 第3節 迂回路部

5～20cmの円礫が多量に入り、人為的に埋められた土層であろうと考えられる。2・3層は腐植物が多量に含まれ、2層から18世紀末葉～19世紀前葉の瀬戸・美濃産の鉢が1点、3層から17世紀～18世紀の白磁の破片と、肥前産の陶器椀の破片が出土したほか、漆器椀4点と結桶側板1点が出土し、図示した。瀬戸・美濃産の鉢は、底面に「三十八」の墨書きが見られる。漆器椀は3点が内・外面とも赤漆、1点は外面黒漆、内面赤漆の椀である。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			產地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	106-13	3層	磁器	小杯	口縁 ～体部	やや密	-	-	(2.50)	不明	17世紀～ 18世紀	白磁 買入	J-65
2	106-12	2層	陶器	鉢	体部～ 高台	やや粗	-	10.4	(5.1)	瀬戸・美濃	18世紀末葉～ 19世紀前葉	鉄輪 高台内に墨書き「三十八」	I-83

図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	断面	備考	登録番号
				口径	底径	器高				
3	106-14	3層	漆器	(11.2)	(5.4)	(5.1)	横木取り	ブナ属	椀 赤漆	L-40
4	106-15	3層	漆器	(12.0)	-	(7.1)	横木取り	ブナ属	外面：黒漆 内面：赤漆	L-41
5	107-1	3層	漆器	(12.2)	(6.2)	(8.0)	横木取り	ブナ属	椀 赤漆	L-42
6	107-2	3層	漆器	(12.2)	(6.0)	(8.0)	横木取り	ブナ属	椀 赤漆	L-43

図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			木取り	断面	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ				
7	107-3	3層	木製品	22.3	8.7	1.9	継目	スギ	結桶側板 上端炭化 侧面に木打 外面：漆の痕	I-44

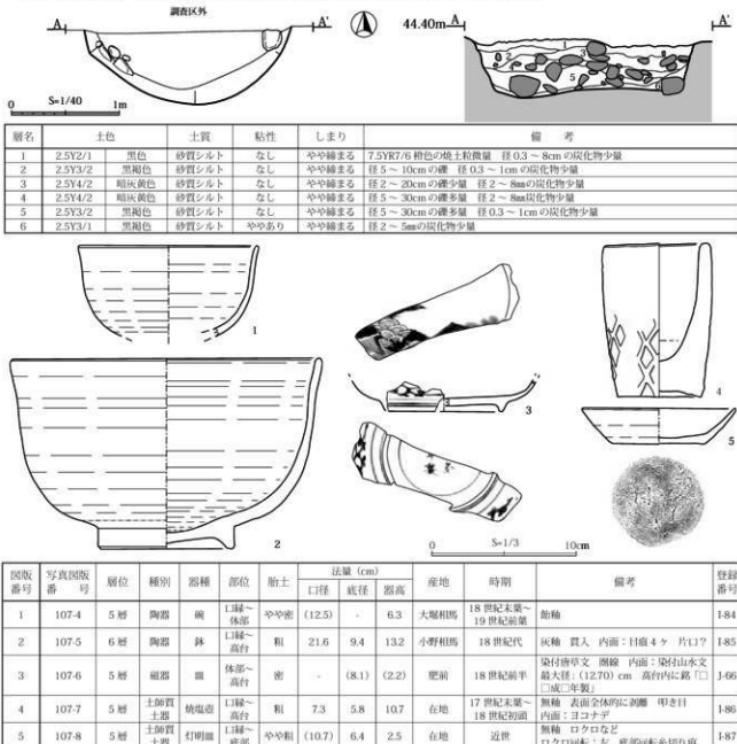
第151図 SK7土坑出土遺物

## 2) SK8 土坑 (第152図、図版71-8~72-2)

N2-W8 グリッドに位置する。北側は調査区外へ延び、検出したのは東側半分程度と思われる。確認した規模は、長さ 2.04m、幅 68cm、深さ 52cm を測る。平面形は全体のプランが不明なため明確ではないが、円形もしくは椭円形であると考えられる。断面形は逆台形である。堆積土は黒色、黒褐色、暗灰黄色の砂質シルトを主体とし、礫や炭化物等の包含物により 6 層に分けられる。堆積土中には径 5 ~ 30cm の円錐が多く含まれる。底面は平坦で、壁面は直線的に立ち上がる。

遺物は 5 ~ 6 層から出土している。5 層からは 18 世紀末葉～19 世紀前葉の大堀相馬産の碗や 18 世紀前半の肥前産染付け皿、在地産の焼塩壺、土師質の灯明皿が、底面直上の 6 層からは 18 世紀代の小野相馬産の片口鉢や瓦の破片などが出土した。そのうち、大堀相馬産、小野相馬の陶器 2 点、肥前産の磁器皿、焼塩壺と灯明皿の計 5 点を図示した。

当土坑の時期は、出土遺物から 19 世紀中葉以降に埋められたものと考えられる。



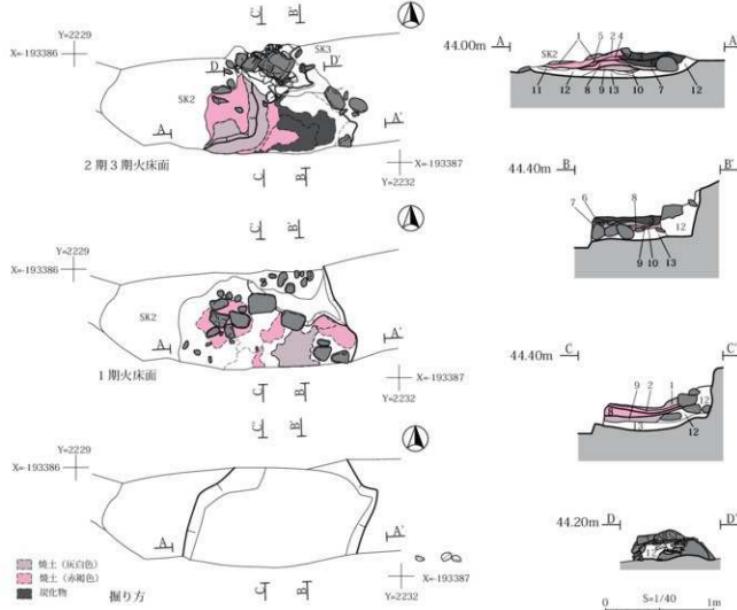
第152図 SK8 土坑平面図・断面図・出土遺物

## (5) カマド跡

## 1) SX2 カマド跡 (第153・154図、図版72-4～73-4)

N2-W7 グリッドに位置し、西側で SK1・SK2、東側で SK3 と重複し SX2 が古い。北側は調査区外に広がり、南側は擾乱により削平される。確認した規模は、長軸 1.48m、短軸 1.04m、掘り方底面までの深さは 40cm である。北側には、構築材と思われる被熱した石や瓦が確認されており、東西方向を主軸として、焚口が西に開く形状であろうと考えられる。

火床面は 3 面検出された。(古い火床面から順に 1 期、2 期、3 期とした。) 火床面は何れも硬く焼き結まり、激しく被熱した中央部は灰白色や浅黄色に、周囲は赤褐色に変色している。火床面の北側には、長さ 21～27cm、



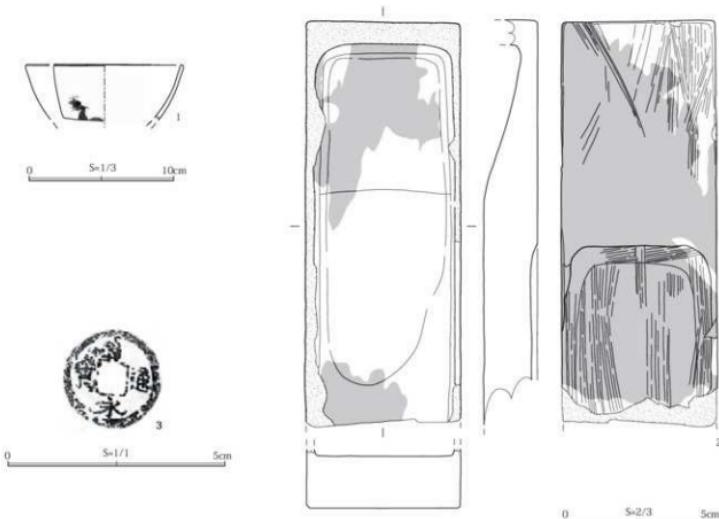
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.SYR7/3	浅黄色	粘土	なし	被熱のため焼化 3期カマド焼土
2	2.SYR8/8	赤褐色	粘土	なし	被熱のため焼化 3期カマド焼土
3	7.SYR3/2	黒褐色	粘土	なし	被熱のため焼化 3期カマド焼土
4	7.SYR3/2	赤褐色	粘土	なし	被熱のため焼化 3期カマド焼土
5	2.SYR6/8	赤褐色	粘土	なし	被熱のため焼化 3期カマド焼土
6	N1.5	黒色	粘土	なし	灰 上部に灰がのる 2期カマド焼土
7	SYR6/2	灰褐色	粘土	なし	やや焼化 2期カマド焼土 2期カマド焼土
8	10YR5/3	灰オリーブ色	粘土	なし	10YR5/3 粘土 2SY7/4 粘土ブロック 2期カマド焼土
9	2.SYR7/3	浅黄色	粘土	なし	被熱のため焼化 1期カマド焼土
10	2.SYR8/8	赤褐色	粘土	なし	被熱のため焼化 1期カマド焼土
11	2SY3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径 1～2mmの小礫少量 脱り方
12	2SY3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	脱り方
13	2SY2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	脱り方

第153図 SX2 カマド跡平面図・断面図

幅18~25cm、厚さ7~12cmの切り石が積まれ、隙間には小円錐と瓦片が埋められる。

3期火床面の直下から、灰オリーブ色に変色した2期の火床面が検出され、さらにその下から、1期の火床面が、若干東側に位置を換えて検出された。1期の火床面の周囲には被熱して赤変した切り石が検出された。以上のことから、当遺構は、当初のカマドをやや西側に移動させ、作り換えを行った可能性が考えられる。

出土遺物は瓦35点、陶器24点、磁器14点、土師質土器2点、金属製品7点出土した。瓦は壁の構築材として使用されたもので、平瓦若しくは板瓦の破片が多く、被熱している。陶器は大堀相馬産の碗、皿、土瓶等の破片が多く、その他、小野相馬産の皿や堤産の焰烙等18世紀後葉~19世紀代の遺物が上層カマドの堆積土から出土している。磁器は、肥前産、波佐見産、瀬戸・美濃産の碗や皿等、陶器と同様の時期の遺物が出土した。金属製品では、2層から頭巻き釘が5本出土した他、寛永通宝と煙管の破片が出土した。そのうち肥前産磁器碗、皿、古錢各1点を図示した。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	107-9	13層	磁器	碗	上縁~全体部	素	(10.9)	-	3.8	肥前	18世紀~19世紀	染付草花文	J-67
2	108-1	12層	石製品	(14.1)	5.4	2.1	289.26	安山岩質 凝灰岩	吸石 吸石に転用 裏側に傷痕あり	備考			K-6
3	107-10	12層	銭貨名	初鋳年	法量(cm・g)			石材			備考		登録番号
			寛永通宝 (古)	1639	外径	穿径	重量						N-17
					2.4	0.5	3.82						

第154図 SX2 カマド跡出土遺物

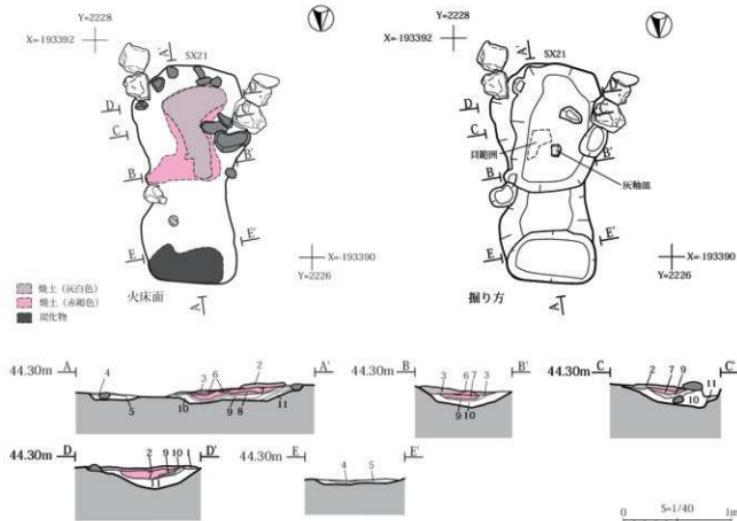
### 第3節 迂回路部

#### 2) SX4 カマド跡（第155・156図、図版73-5～74-1）

N1-W8 グリッドに位置する。SX21と重複し、SX21より新しい。南側に燃焼室、北側に焚口と搔き出しを有する。規模は、長軸 1.98m、短軸 85cm、掘り方の深さ最大 22cm を測る。主軸方向は N.7°-W を示す。

燃焼室は硬く焼きしまり、被熱してにぶい黄褐色ないし明褐色に変色した火床面が広がる。火床面の規模は、長さ 91cm 幅 65cm を測る。その周囲には長さ 11.4～40.2cm、幅 7.2～19.2cm、厚さ 5～15cm の円礫が 10 点残存している。もともとは馬蹄形に並んでいたカマドの壁石の一部であると考えられる。焼土下の床面は梢円形を呈し、緩やかに窪んでいた。掘り方底面中央で、大堀相馬産の灰釉皿が正位で出土した。その北側は一度隆起してからわずかに窪み、炭化物を多量に含む黒褐色シルト及び砂質シルトが薄く堆積する。

遺物は前述した皿の他に、カマド内の焼土から、大堀相馬産の灰釉丸碗、肥前産の磁器碗の破片等 18世紀後葉～19世紀代の陶器 5点、磁器 1点と寛永通宝が 1点、掘り方底面付近で、釘が 5本と貝殻の破片が散在していた。カマド前底部搔き出しの堆積土からは、瓦質の蚊遣りと土師質の灯明皿が出土した。そのうち大堀相馬産の灰釉皿 1点、土師質土器 1点、瓦質土器 1点、金属製品 3点を図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR7/2 にぶい黄褐色	粘土	なし	あり	被熱
2	10YR7/2 にぶい黄褐色	粘土	なし	あり	被熱
3	7.5YR7/2 明褐色	粘土	なし	あり	被熱
4	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	炭化物多量に含む
5	2.5Y3/2 黒褐色	シルト	あり	あり	径 3～5mm の炭化物粒少量
6	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	なし	あり	被熱
7	7.5YR5/8 明褐色	粘土	なし	あり	被熱
8	10YR4/6 褐色	粘土	なし	あり	被熱
9	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	あり	あり	被熱
10	2.5Y4/2 暗灰褐色	砂質シルト	あり	あり	径 5～8mm の炭化物粒多量
11	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	あり	あり	径 2～5mm の炭化物粒多量

第155図 SX4 カマド跡平面図・断面図

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	108-3	10層	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	(12.7)	4.9	4.45	大堀相馬	18世紀後～ 19世紀初頭	灰釉	1-88
2	108-4	5層	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	8.05	5.0	1.85	在地	19世紀代	スヌ付着 ロクロ整形後ヨコナデ 回転系切り痕	1-89
3	108-2	5層	瓦質土器	紋通り	体部～底部	粗	-	18.5	(12.5)	在地	19世紀代	ヘラミガキ ロクロナデ	1-90

図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)			備考	登録番号	
				長さ	幅	厚さ			
4	108-5	10層	金属製品	(2.6)	3	3	0.74	頭巻釘	N-18
5	108-6	10層	金属製品	4.65	3.9	3	2.51	頭巻釘	N-19

図版番号	写真図版番号	層位	銭貨名	初鑄年	法量(cm・g)			備考	登録番号
					外径	穿孔	重量		
6	108-7	10層	寛永通宝(新)	1697	22	0.6	2.84		N-20

第156図 SX4 カマド跡出土遺物

## 3) SX5 カマド跡（第157・158図、図版74-2～7）

N2-W8 グリッドに位置し、SB1P64・P65に隣接する。カマドの上部は削平され、燃焼室の焼土と西側の壁石の一部のみ検出された。確認した規模は、長軸 1.2 m、短軸 1.17 m、掘り方底面までの深さ 24cm を測る。平面形は隅丸方形で、主軸方向は N-87° -W を示す。

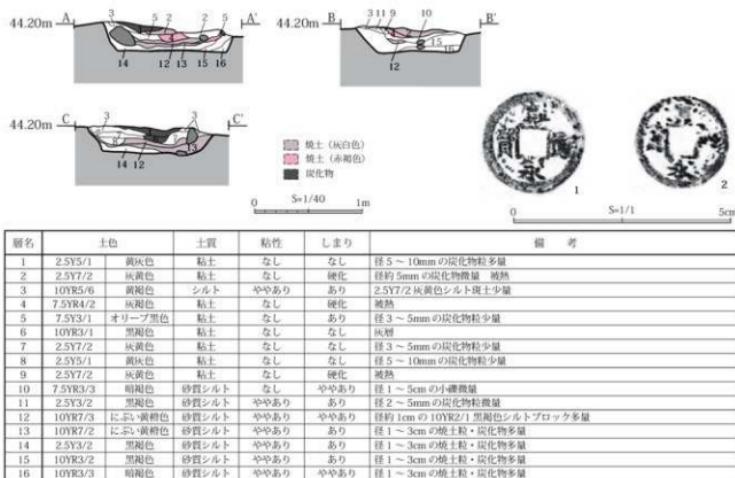
火床面は東側に位置し、被熱して灰黄色に変色した粘土層が広がる。火床面の規模は、長さ 90cm、幅 80cm を測る。西側及び北側には長さ 22～44cm、幅 15～25cm、厚さ 8～15cm の円碟や円礫を打ち欠いて成形された被熱した石が火床面を囲んで 4 点検出された。これらの石は、壁面の構築材であったものと考えられる。火床面と壁石を覆うように、西寄り上層に炭化物を多量に含む黄灰色の粘土と黄褐色シルトの層（堆積層 1・3 層）が重なるが、この 2 層はカマド廃棄時に堆積したものであろうと考えられる。

遺物は、4 層及び 5 層から大堀相馬産の碗、皿、土瓶の蓋等陶器 4 点、磁器は破片が 1 点、金属製品は釘が 3 点、掘り方上面で寛永通宝が 2 点出土し、寛永通宝 2 点を示した



第157図 SX5 カマド跡平面図

### 第3節 迂回路部

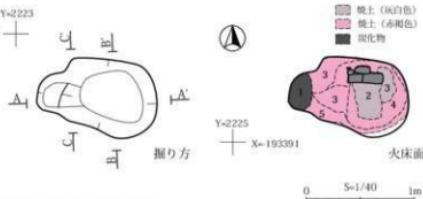


第158図 SX5 カマド跡断面図・出土遺物

#### 4) SX6 カマド跡 (第159・160図、図版74-8~75-2)

N1-W8グリッドに位置し、カマドの上部構造は削平され、燃焼室と構築材の一部と思われる石が検出された。東端及び南端でP74、75と重複し、SX6が新しい。規模は、長軸1.10m、短軸71cm、掘り方底面までの深さ16cmを測る。火床面の平面形は楕円形で、主軸方向はN-89°-Wを示す。遺構内には被熱して硬化し、変色した火床面が広がり、中心から外側に向かって、灰白色、明黄褐色、明赤褐色という土色の変化が認められた。灰白色の焼土北側に長さ約16cm、幅約12cm、厚さ約8cmの被熱した切り石が2点と円礫が検出された。これらの石は、カマドの構築材の一部を構成していたものと考えられる。焼土層(2・3層)直下の4層はこれら壁石の下に広がっており、当カマドは火床を張替え、2時期に渡って使用された可能性も考えられる。床面は浅い描跡状を呈し、外側に向かって緩やかに立ち上がる。焼土面の西側はわずかに窪み炭化物を多量に含んだ黒色シルトが堆積する。焚口は確認できなかったが、おそらく西側に位置し、掘き出しが広がっていたものと推測される。

出土遺物は底面直上で瓦片が1点出土したのみである。



第159図 SX6 カマド跡平面図



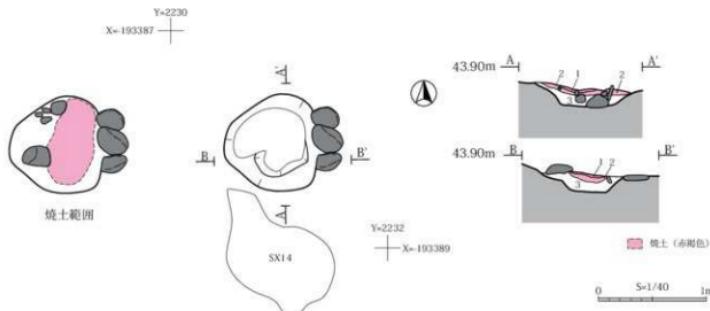
第160図 SX6 カマド跡断面図

## 5) SX13 カマド跡（第161図、図版75-3～5）

N2-W7 グリッドに位置し、カマドの上部は削平され、燃焼室のみが検出された。SX2 の南側、SX14 の北隣りに位置する。東側で SX34 性格不明遺構の石列と隣接する。規模は、長軸 89cm、短軸 82cm、掘り方底面までの深さ 22cm を測る。平面形は不整円形で、断面形は浅い逆台形である。東西を主軸とみると、方位は N-90°-W を示す。

遺構内には被熱して明赤褐色に変色した火床面が広がり、東側に被熱した切石と円礫がやや雜然と並んで検出された。これらの石は当カマドの構築材であったものと推測される。灰白色まで変色した土層が検出されなかったことから、削平されてしまったか、あるいは他のカマドに比して使用頻度が少なかったものと考えられる。

遺物は出土していない。



第161図 SX13 カマド跡平面図・断面図

## 6) SX14 カマド跡（第162図、図版75-3・4 75-6）

N2-W7 グリッド、SX13 カマド跡の南隣に位置する。カマドの上部は削平され、燃焼部のみが検出された。東側で SX31 性格不明遺構の石列と隣接する。規模は、長軸 89cm、短軸 82cm、掘り方までの深さ 22cm を測る。平面形は不整形で、断面形は皿形である。

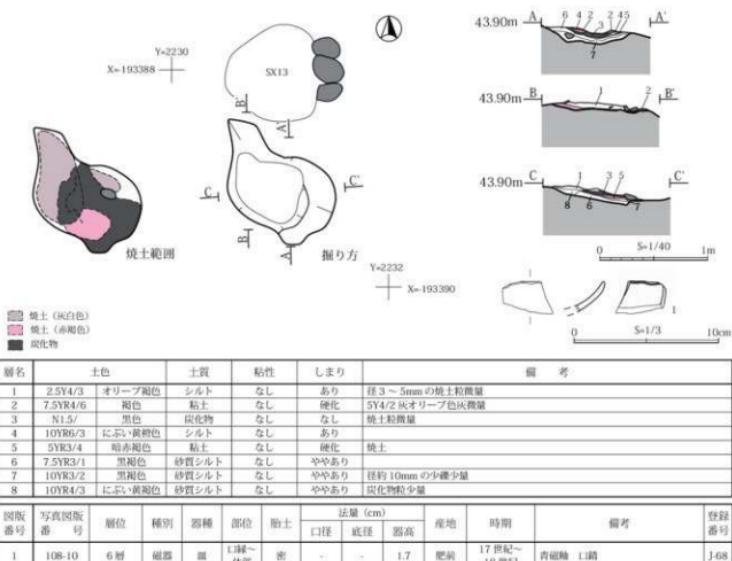
遺構内には被熱してにぶい黄褐色や赤褐色に変色した火床面が梢円形に広がる。その周囲に長さ 10~15cm、

### 第3節 迂回路部

幅5~10cmの被熱した円礫が数点検出された。焼土の北側はオリーブ褐色シルトの層(1層)が薄く堆積しているが、これは当カマド廃棄後に埋めた土層と推測される。

当カマドはSX13と隣接し、規模や主軸方向、検出状況も良く似ており、同時に使用されていたものと考えられ、2連の構造であった可能性も考えられる。

遺物は、6層から17世紀~18世紀代の肥前産の青磁皿が1点のみ出土したので図示した。



第162図 SX14 カマド跡平面図・断面図・出土遺物

### 7) SX21 カマド跡 (第163~165図、図版75-7~77-1)

N1-W8グリッドに位置する、東西に燃焼室を有する2連構造のカマド跡である。南側は東西に走るSD2に隣接し、北東側はSX4と重複し、SX4より古い。北側上層は、南側に燃焼室、北側に焚口が開き、挿出しが広がる。規模は、長軸2.95m、短軸2.82m、掘り方底面までの深さ48cmを測る。主軸方向はN-6°-Eを示す。

東カマドは長さ1.06m、幅99cmの燃焼室を有する。燃焼室の周りには長さ11~33cm、幅10~30cm、厚さ10~22cmの直方体に整形された切石が馬蹄形に据えられ、隙間には扁平な円礫がはめ込まれる。北側は半球状に落ち込み、両側に袖石が据えられ、底面には長さ約50cm、幅約24cmの楕円形の円礫が敷かれた焚口が位置する。燃焼室内はさほど被熱しておらず、火床面が一部赤褐色に変色し、その上に炭化物が堆積する。

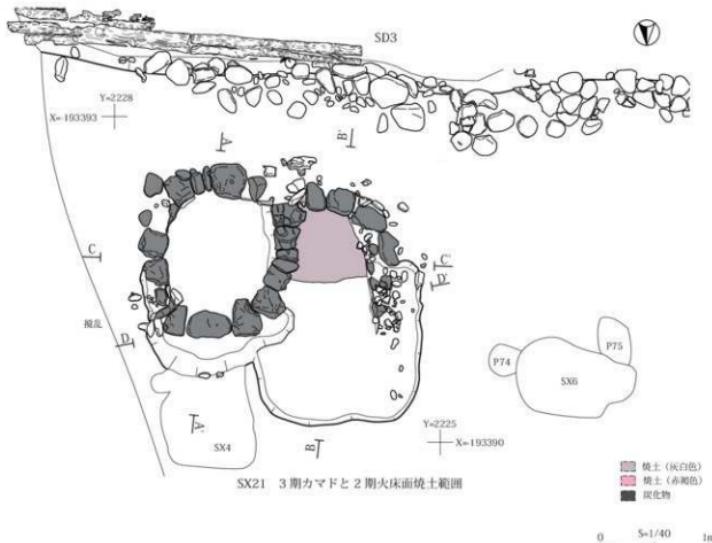
西カマドは、長さ99cm、幅90cmの燃焼室を有する。西カマドの壁は1段目には激しく被熱した切石が据えられ、2段目にはさほど被熱していない長さ28~32cm、幅18~20cm、厚さ12~15cmの円礫や円礫を打ち欠いた

石が積まれている。北側に焚口があったものと思われるが、後世の削平で確認できなかった。しかし、焚口、搔き出し部分と思われる東西約1.5m、南北約1mの範囲は熱を受けたことにより硬化していた。燃焼室の火床面は良く焼き締まっており、強く被熱した中央付近から後部（南寄り）にかけては灰白色に変色している。この灰白色的火床面の下層に、炭化物と灰の薄い堆積が確認され、その下に新たな灰白色ないし橙色の火床面を確認した。この下層の火床面は、東西のカマドを仕切る壁石の下から東側へ35cm程度がっていた。このことから西カマドは東側へ広がっていたものと考えられる。また、西カマドは南側と西側の壁石の更に下層で火床面が確認され、同時に被熱して灰白色に変色した長方形の構築材らしき粘土塊が確認された。

以上のことから、SX21 カマド跡は当初使用していた1期のカマドを位置を変えて作り直し、さらに2連式のカマドに作り直したという、3時期に渡るものと理解される。

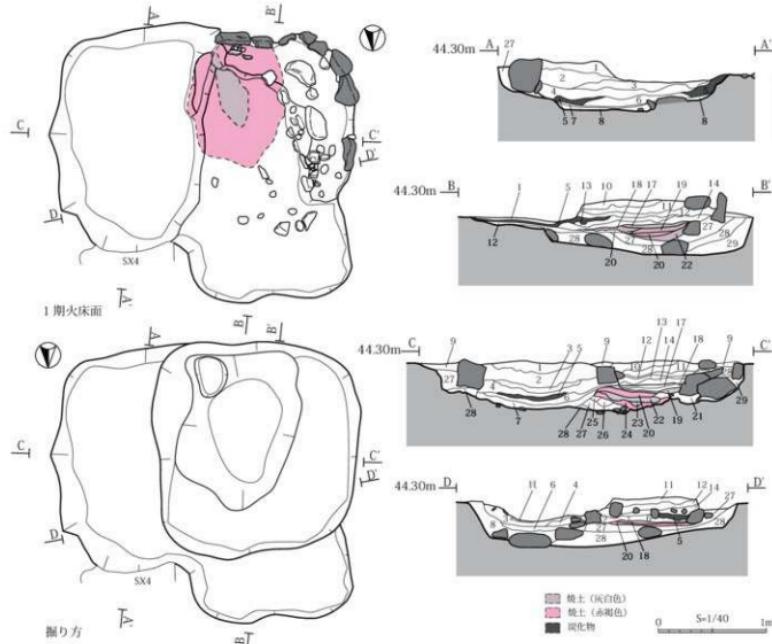
出土遺物は平瓦、軒平瓦、丸瓦等の瓦片15点、肥前産の碗や大堀相馬産の碗、小野相馬産の皿等陶器破片が15点、肥前産や波佐見産の染付け碗や鉢、皿等磁器の破片が26点、その他、焼塙壺やかわらけの他、西カマド下層の焼土中より15点余りの釘が出土した。そのうち、陶器が大堀相馬産の香炉、小野相馬産の擂鉢、磁器は肥前の皿、鉢、土師質土器が焼塙壺、その他軒平瓦小片、釘類3点を図示した。

遺構の時期は、基本層及び出土遺物から18世紀後葉以降で、堤焼や瀬戸・美濃産磁器製品等は出土しなかったため、18世紀末～19世紀初頭が下限であると考えられる。



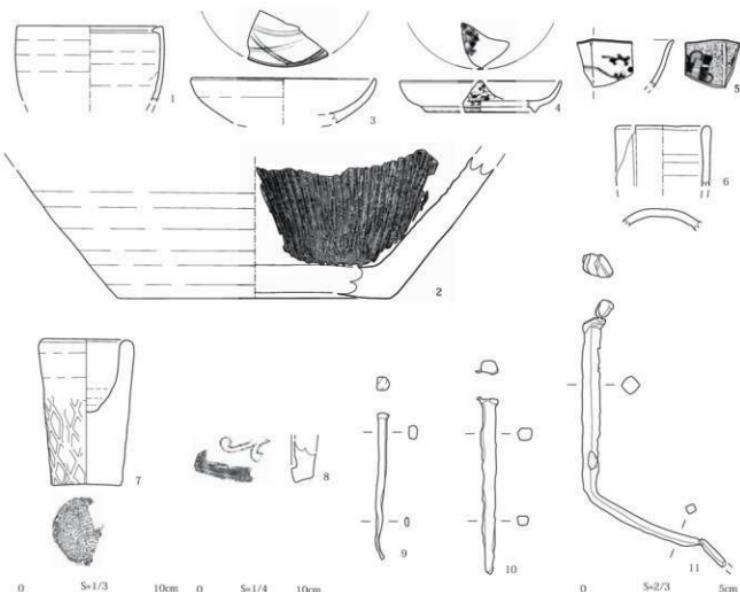
第163図 SX21 カマド跡平面図

### 第3節 亜回路部



剖面名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/2	黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 直5~10mmの炭化物少量 東カマド
2	10YR4/1	褐色	砂質シルト	ややあり	あり 直5~10mmの炭化物少量 東カマド
3	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 直1~2mmの小塊 糙3~5mmの炭化物少量 東カマド
4	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 直1~2mmの小塊 糙3~5mmの炭化物少量 東カマド
5	2.5Y2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	なし 炭化物多量 東カマド
6	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 無土粒少量 東カマド
7	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 無土ブロック少量 東カマド
8	5Y3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	ややあり	ややあり 炭化物 無土ブロック少量
9	2.5Y4/1	灰色	砂質シルト	ややあり	ややあり 炭化物 無土ブロック少量
10	10YR4/2	灰褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 粘5~10mmの炭化物 少量 東土粒少量
11	10YR4/1	褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 炭化物 無土ブロック多量
12	2.5Y5/1	黄色	砂質シルト	なし	ややあり 灰多量
13	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 炭化物 無土ブロック多量
14	5Y3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	ややあり	ややあり 炭化物 無土ブロック多量
15	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 粘5~10mmの炭化物少量
16	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり
17	2.5Y7/2	灰黄色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 3期灰床面
18	2.5Y6/2	灰黄色	粘土	なし	ややあり 被熱のため硬化 3期灰床面
19	2.5Y7/2	灰黄色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 2期灰床面
20	7.5Y6/6	褐色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 2期灰床面
21	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	ややあり	あり 炭化物微量
22	2.5Y7/2	灰黄色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 1期灰床面
23	2.5Y6/2	灰黄色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 1期灰床面
24	10Y5/4	にぶい黄褐色	粘土	なし	あり
25	2.5Y6/2	灰黄色	粘土	なし	あり 被熱のため硬化 1期?
26	10YR4/1	褐色	粘土	なし	あり
27	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	なし	あり 炭化物少量
28	2.5Y4/1	黄灰色	粘土質シルト	あり	ややあり
29	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり

第164図 SX21 カマド跡平面図・断面図



図版番号	写真図版番号	層位	種類	器形	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径	器高					
1	108-11	2層	陶器	香炉	口縁~体部	半粘土	(10)	-	(5.2)	大畠相馬	18世紀後葉	灰釉	I-91	
2	108-13	6層	陶器	擺盤	体部	粗	-	(18.9)	(9.78)	小野相馬	18世紀代	鉄輪	I-92	
3	108-12	3層	磁器	皿	口縁~体部	泥	(12.4)	-	3.15	波佐見	18世紀中葉~後半	J-69		
4	108-14	11層	磁器	皿	口縁~高台	半粘土	11.2	(7.6)	2.15	肥前	18世紀中葉	染付小花文 二重團扇	J-70	
5	108-15	2層	磁器	鉢	口縁~体部	泥	-	-	(3.3)	肥前	18世紀前葉~中期	染付花唐草文 内面: 染付渋巻き 文登付文	J-71	
6	109-1	11層	磁器	変形鉢	口縁~体部	泥	(6.3)	-	-	波佐見	18世紀代	青磁釉	J-72	
7	109-3	6層	土師質土器	燒塗皿	口縁~底部	半粘土	6.5	4.8	10.2	在地	18世紀前葉	ロウ口整形後ナデ 叩き目 回転 系切り縫	I-93	
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			備考					登録番号		
				長さ	幅	厚さ								
8	109-2	24層	軒平瓦	-	-	-	文様水瓶: (5.5) cm 文様(高: (3.2) cm 直当幅: (7.15) cm 直当高: (4.5) cm 直当厚: (2.05) cm 脊区幅: (1.1) cm 脊区厚: (1.3) cm 弧深: - 最大長: (3.6) cm 文様: 牡丹2輪?						G-2	
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)			備考					登録番号		
				長さ	幅	厚さ								
9	109-4	24層	金属性製品	5.15	0.42	0.35	2.61	渋巻灯					N-23	
10	109-5	24層	金属性製品	6.15	0.55	0.4	3.07	切町					N-24	
11	109-6	24層	金属性製品	11.5	0.54	0.52	12.08	渋巻灯					N-25	

第165図 SX21カマド跡出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### 8) SX31 カマド跡（第166図、図版77-2・3）

N2-W8 グリッドに位置し、遺構の大部分は近代以降の擾乱で削平を受けている。確認した規模は、長軸 84cm、短軸 22cm、掘り方底面までの深さ 15cm を測る。平面形は不明で、断面形は 2 連の逆台形を呈する。主軸方向は N-11°-W を示す。

検出されたのはカマドの火床面下層に当たる焼土層 2 層と、その北側に炭化物と焼土を大量に含む土層、掘り方の 4 層である。炭化物と焼土粒が堆積した挿き出し部と思われる窪みがあり、焚口は北にあったと考えられる。火床面の削平の程度から、当該遺構は上層の遺構である可能性もある。遺物は出土していない。



第166図 SX31 カマド跡平面図・断面図

#### 9) SX35 カマド跡（第167・168図、図版77-4 ~ 78-2）

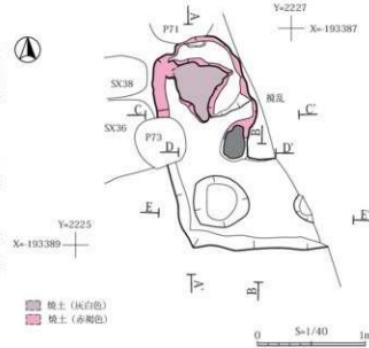
N2-W8 グリッドに位置し、北側に燃焼室、南側に焚口と挿き出しを有するカマド跡である。北端を P71 に、西側を P73 に切られ、同じくカマド跡である SX36、SX38 に隣接する。規模は、燃焼室と焚口部を合わせ、長軸 2.02m、短軸 1.12m、深さ 25cm を測る。主軸方向は N-16°-W を示す。

燃焼室は長さ 1.2m、幅 90cm の馬蹄形である。被熱して棕色に変色した壁面が巡り、袖東側の 1 点を除いて壁面を構築する石は確認できなかった。燃焼室内は焼土と炭化物を多量に含む黒褐色のシルトが堆積し、その下に、被熱して黄褐色に変色した粘土と灰の混入した焼土層が広がっていた。焼土の下層に、被熱して硬く縮まった火床面が検出された。火床面は中央部分がわずかに隆起し、周間に窪みが連続して巡る。この窪みに壁を構築する礫が据えられたものと考えられる。

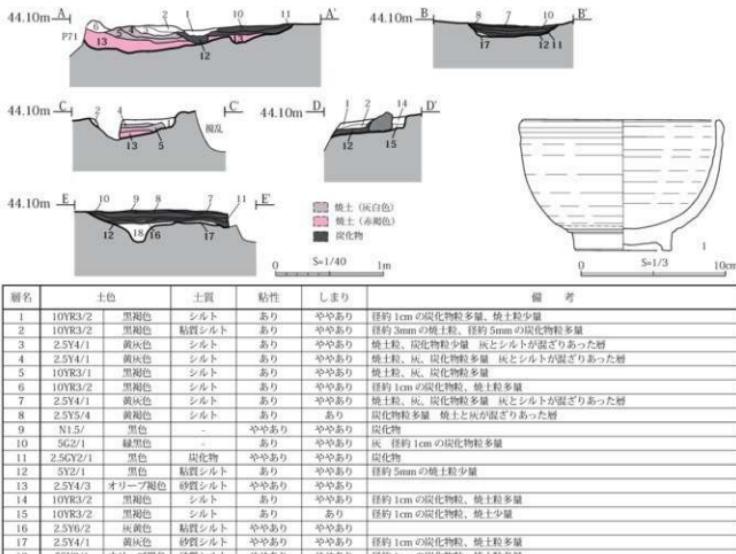
南側の焚口から挿き出し部の範囲には、灰や炭化物と焼土が混入したシルト層が東側へ広がっているが、擾乱によって削平される。SX35 東側を南北に走る擾乱の壁面で焼土層が確認されており、隣接するカマドの存在が想定される。

出土遺物は、挿き出し部堆積土より在地産と思われる擂鉢や唐津産の陶器等の破片、肥前産の磁器碗の破片等 5 点ほど出土したが、何れも細片のため図化し得なかつた。このほかに、火床面直下で 18 世紀中葉の瀬戸・美濃産の片口鉢が出土した。このうち瀬戸・美濃産の陶器碗 1 点を図示した。

遺構の時期は 18 世紀後葉以降である。



第167図 SX35 カマド跡平面図



番名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10VR3/2	黒褐色	シルト	あり	径約 1cm の炭化物粒多量、焼土粒少量
2	10VR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	ややあり 径約 3mm の焼土粒、直径 5mm の炭化物粒多量
3	2.5V4/1	黄褐色	シルト	あり	ややあり 焼土粒、炭化物粒少量 灰とシルトが混ざりあった層
4	2.5V4/1	黄褐色	シルト	あり	ややあり 焼土粒、灰、炭化物粒多量 灰とシルトが混ざりあった層
5	10VR3/1	黒褐色	シルト	あり	ややあり 焼土粒、灰、炭化物粒多量
6	10VR3/2	黒褐色	シルト	あり	ややあり 径約 1cm の炭化物粒、焼土粒多量
7	2.5V4/1	黄褐色	シルト	あり	ややあり 焼土粒、灰、炭化物粒多量 灰とシルトが混ざりあった層
8	2.5V5/4	黄褐色	シルト	あり	ややあり 灰化物粒多量 灰土と灰が混ざりあった層
9	N1.5	-	-	-	炭化物粒
10	5G2/1	墨黒色	-	-	炭化物粒
11	2.5G2/1	黒色	炭化物	ややあり	ややあり 灰化物
12	5/2/1	墨黒色	粘質シルト	あり	ややあり 径約 5mm の燒土粒少量
13	2.5V4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり
14	10VR3/2	黒褐色	シルト	あり	ややあり 径約 1cm の炭化物粒、焼土粒多量
15	10VR3/2	黒褐色	シルト	あり	あり 径約 1cm の炭化物粒、焼土粒多量、焼土少量
16	2.5V6/2	灰褐色	粘質シルト	ややあり	ややあり
17	2.5V4/1	黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径約 1cm の炭化物粒、焼土粒多量
18	5G2/1	オリーブ墨色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径約 1cm の炭化物粒、焼土粒多量

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	肚土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	109-7	13層	陶器	碗	体部	やや厚	-	6.8	6.35	瀬戸・美濃	18世紀中葉	黒輪内面:目皿 3ヶ	194

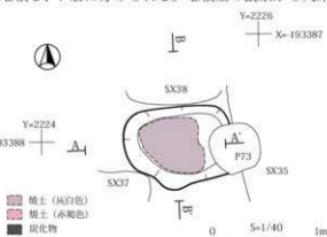
第168図 SX35 カマド跡断面図・出土遺物

## 10) SX36 カマド跡 (第169・170図、図版 79-1~4)

N2-W8 グリッドに位置するもので、カマドの上部は削平され、燃焼室のみ検出された。東側に SX35、北側に SX38 と隣接し、東側で P73 と重複し、P73 より古い。規模は、長軸 80cm、短軸 67cm、掘り方底面までの深さ 17cm を測る。平面形は梢円形であり、断面形は皿形である。主軸方向は N-90°-E を示す。

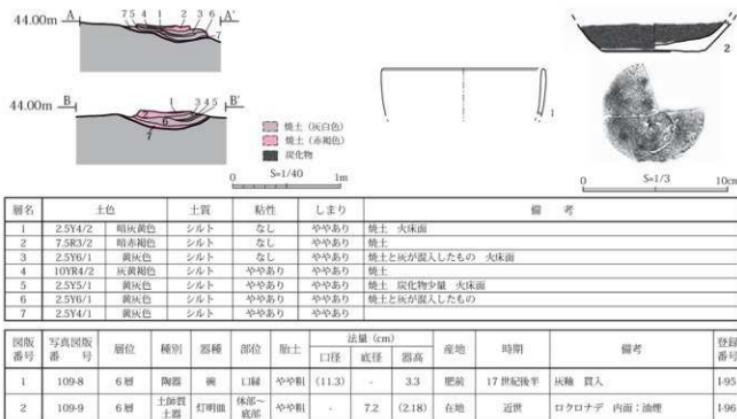
燃焼室には被熱して変色した粘土あるいはシルトの焼土層が堆積し、7 層に分けられる。堆積土の観察から火床面は 3 面確認した。掘り方は鉢状を呈し、外側に向かって緩やかに立ち上がる。その西側にわずかな窪みが見られるが、これが搔き出しにあたるものと推測される。

遺物は、桟瓦等瓦 2 点、17 世紀後半の肥前産の碗や丹波産の擂鉢の破片等陶器の破片が 2 点、土師質土器 1 点が 6・7 層から出土した。そのうち肥前産陶器碗、在地產土師質土器が図示した。



第169図 SX36 カマド跡平面図

### 第3節 迂回路部



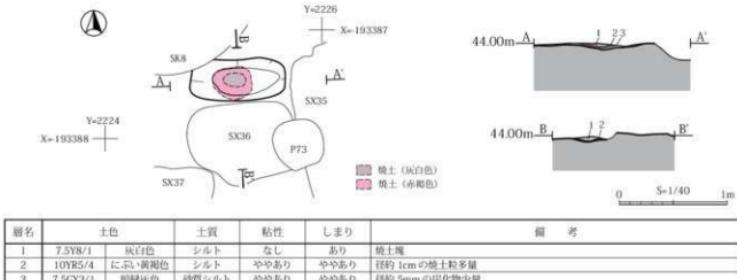
第170図 SX36 カマド跡断面図・出土遺物

### 11) SX38 カマド跡 (第171図、図版79-1～4)

N2-W8 グリッドに位置し、カマドの上部は削平され、燃焼室のみ検出された。南側は SX36 と隣接し、北西側で、SK8 と重複し、SK8 より古い。規模は、長幅 88cm、短幅 49cm、深さ 6cm を測る。平面形は梢円形であり、断面形は浅い皿形である。主軸方向は N-90°-E を示す。

燃焼室には、被熱して暗灰黄色等に変色した焼土が広がり、その周辺はわずかに窪んでおり、円礫が据えられていたものと考えられ、もともとカマドの壁石として据えられていたものが抜き取られたか、壊されたものと考えられる。北側には長さ約 18cm、幅約 12cm の円礫が 2 点見られる。焼土は 3 層に分けられるが、全体的に SX36 カマド跡に比較して薄く遺存状態も良くなかった。

遺物は出土しておらず、遺構の時期も判然としないが、当カマド跡と SX36 カマド跡は隣接し、規模、主軸方向等がほぼ同一であるので、2 連構造のカマドであった可能性も考えられる。



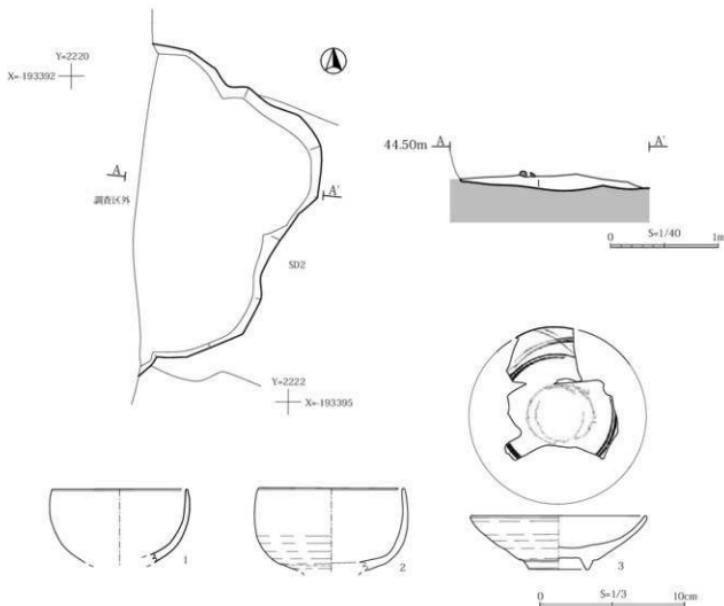
第171図 SX38 カマド跡平面図・断面図

## (6) 性格不明遺構

## 1) SX8 性格不明遺構（第172図、図版79-5・6）

N1-W8 グリッドに位置し、西側は調査区外へ広がる。SD2 と重複し、SD2 より新しい。確認した規模は、検出長 1.87m、幅 1.04m、深さ 26cm を測る。平面形は不整形で、断面形は皿形である。堆積土はオリーブ黒色砂質シルトの単層で、径 10 ~ 25cm の円礫が多量に含まれる。

遺物は堆積土中より、大堀相馬産の碗や皿、土瓶の破片、肥前産の碗等の陶器や、肥前や波佐見産の皿、瀬戸・美濃産の碗等の磁器等、17世紀後葉～19世紀代の遺物が出土した。そのうち大堀相馬産の陶器碗 2 点、波佐見産の磁器皿 1 点を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	5Y2/2 オリーブ黒色	砂質シルト	あり	やや締まる 径 0.5 ~ 1cm の炭化物少量 5Y4/2 深オリーブ色の中粒砂少層	

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	109-10	1層	陶器	碗	上縁～ 底部	やや密	(9.5)	-	(5.1)	大堀相馬	18世紀後葉	灰釉 貫入	I-97
2	109-11	1層	陶器	碗	上縁～ 底部	やや密	(10.2)	(4.70)	(5.75)	大堀相馬	18世紀代	灰釉	I-98
3	109-12	1層	磁器	皿	高台～ 底	(12.2)	4.2	4.75	波佐見	18世紀中葉～末葉	透明釉 内面：染付格子文	J-73	

第172図 SX8 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

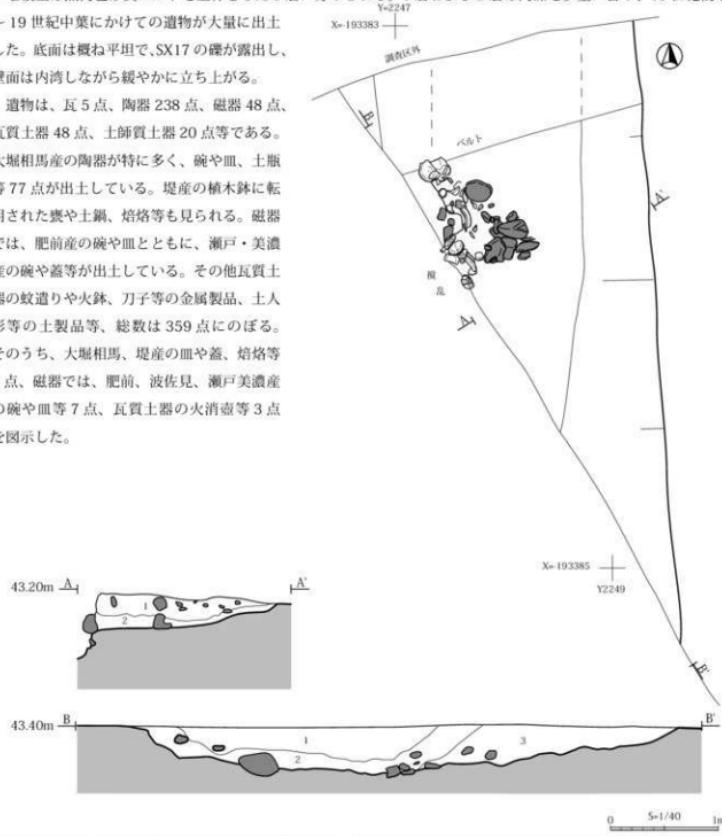
### 第3節 迂回路部

#### 2) SX9 性格不明遺構 (第 173 ~ 176 図、図版 79-7 ~ 80-2)

N2-W6 グリッドに位置する南北に走る溝状を呈する遺構である。SX17 と重複し、SX17 より新しい。南西側を斜めに搅乱により削平され、北側は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 5.78m、幅 2.24m、深さ 42cm を測る。残存している範囲が少ないため平面形は不明で、断面形は皿形である。主軸方向は N.2°W を示す。

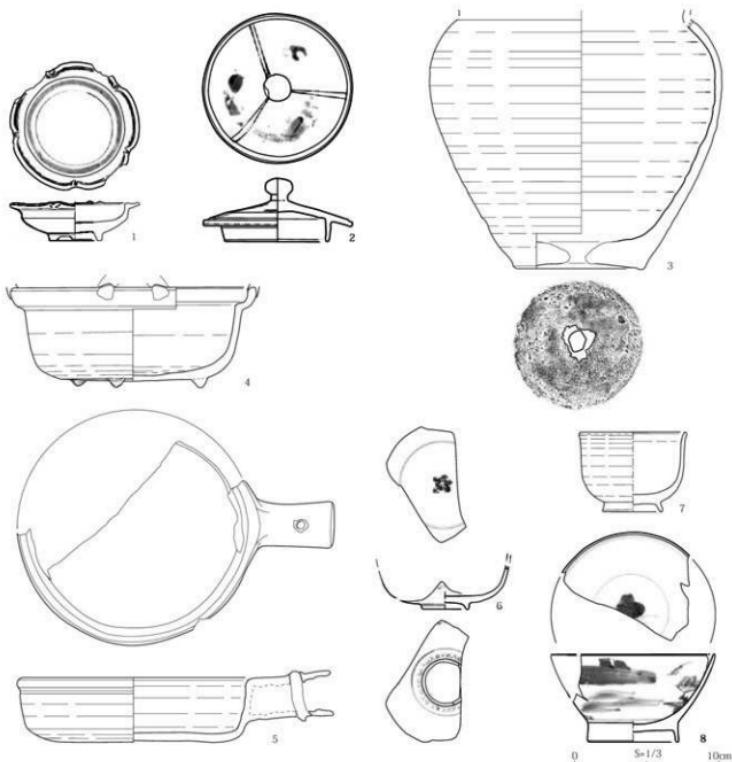
堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とした 3 層に分けられる。1 層および 2 層は円礫を多量に含み、18 世紀後半～19 世紀中葉にかけての遺物が大量に出土した。底面は概ね平坦で、SX17 の礫が露出し、壁面は内湾しながら緩やかに立ち上がる。

遺物は、瓦 5 点、陶器 238 点、磁器 48 点、瓦質土器 48 点、土師質土器 20 点等である。大堀相馬産の陶器が特に多く、碗や皿、土瓶等 77 点が出土している。堤産の植木鉢に転用された甕や土鍋、焙烙等も見られる。磁器では、肥前産の碗や皿とともに、瀬戸・美濃産の碗や蓋等が出土している。その他瓦質土器の蚊遣りや火鉢、刀子等の金属製品、土人形等の土製品等、総数は 359 点にのぼる。そのうち、大堀相馬、堤産の皿や蓋、焙烙等 5 点、磁器では、肥前、波佐見、瀬戸美濃産の碗や皿等 7 点、瓦質土器の火消窓等 3 点を図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり 径 5 ~ 20cm の円礫多量 炭化物微量
2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり 径 10 ~ 20cm の円礫多量 炭化物微量
3	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり 径 5 ~ 10cm の円礫少量 炭化物微量

第 173 図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図



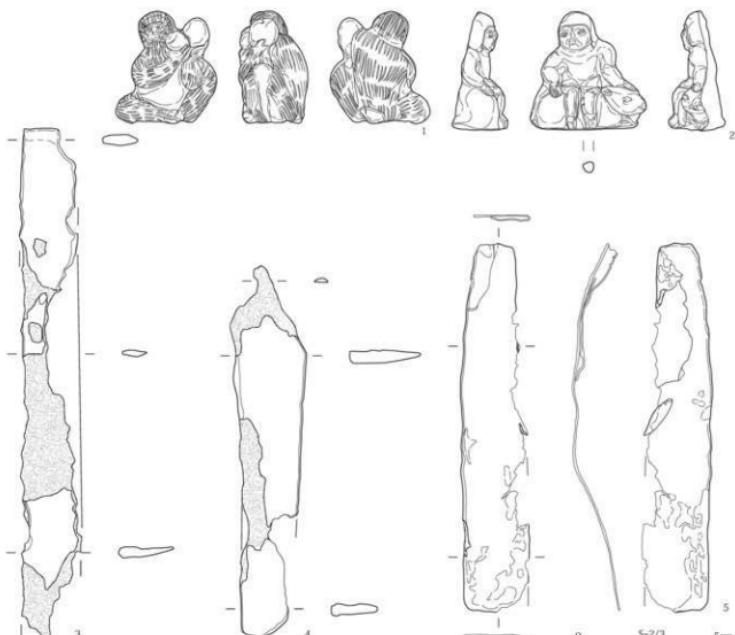
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	109-13	1層	陶器	輪花皿	口縁～高台	密	9.0	3.8	2.7	大堀組馬	18世紀後半～19世紀初頭	灰釉	I-99
2	110-1	1層	陶器	土瓶蓋	瓶口～底部	半空心	5.3	-	3.2	大堀組馬	19世紀中期	灰釉、鉄錆、緑錆、片面無錆	I-100
3	110-2	2層	陶器	甕	瓶口～底部	半空心	-	9.15	(17.3)	堤	19世紀	鉄錆、底部穿孔、植木鉢に転用	I-101
4	110-3	1層	陶器	土網	口縁～底部	粗	17.0	9.6	6.9	堤	19世紀	鉄錆柄に釘残存	I-102
5	110-4	1層	軟質施釉陶器	焰燈	口縁～底部	粗	(16.1)	9.9	4.45	堤	19世紀	染付松文二重團扇内面：染付五瓣花	I-103
6	110-5	1層	磁器	碗	体部～高台	密	-	3.05	3.0	肥前	18世紀後葉	染付松文二重團扇内面：染付五瓣花	J-74
7	110-6	1層	磁器	碗	口縁～高台	密	(7.45)	4.0	5.05	肥前	19世紀前半	鉄錆白抜き文様	J-75
8	110-7	3層	磁器	広口瓶	口縁～高台	密	(11.2)	(6.3)	6.1	肥前	18世紀末葉～19世紀前葉	染付松文二重團扇内面：染付岩文二重團扇	J-76

第174図 SX9 性格不明遺構出土遺物（1）



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	110-8	2層	磁器	碗	口縁～高台	密	(9.4)	3.6	5.8	波佐見	18世紀後葉～ 19世紀初頭	青磁釉、内面：四瓣四方襷 二重脚鉢足込み に丸作花高台に難波村材者 コンニャク 田附	J-77
2	111-1	2層	磁器	鉢	口縁～高台	密	(10.0)	(5.55)	4.3	肥前	17世紀後半～ 18世紀前半	染付青・漆・人物文 足込みに染付青文 竹林の七賢人文？	J-78
3	111-2	2層	磁器	蓋	口縁～高台	密	9.23	3.6	2.8	瀬戸、 美濃	19世紀前葉	染付青文 二重脚鉢	J-79
4	111-3	2層	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	14.95	8.6	4.9	肥前	18c末～ 19世紀	青磁千鳥文 内面：鶴・草文の組み合わせ 足込みに巾着 蛇の口四形高台口縁が鉄道	J-80
5	111-4	1層	瓦質土器	火消壺	体部～ 底部	粗	(18.6)	-	(5.8)	在地	18世紀末葉～ 19世紀中葉	ロクロナデ	I-104
6	111-5	1層	瓦質土器	火消壺	体部～ 底部	粗	-	(17.6)	(11.85)	在地	18世紀末葉～ 19世紀中葉	ロクロナデ(懸)脚欠損	I-105
7	111-6	1層	瓦質土器	火消壺	捕み～ 体部	粗	-	(10.0)	3.75	在地	19世紀前葉～ 中葉	19軒系切り痕	I-106

第175図 SX9 性格不明構出土遺物（2）



図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	111-7	1層	土製品	3.9	3.51	2.42	20.00	土人形(猿)部分的にキラ粉付着型物	P-3
2	111-8	1層	土製品	4.1	4.06	1.95	16.8	土人形(人)型押し成形	P-4

図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
3	111-9	2層	金属製品	17.65	2	0.4	38.0	刀子(身)	N-26
4	112-1	2層	金属製品	12.9	2.5	0.5	33.06	刀子(身)	N-27
5	112-2	2層	金属製品	12.73	2.28	0.18	19.5	刀子(柄)	N-28

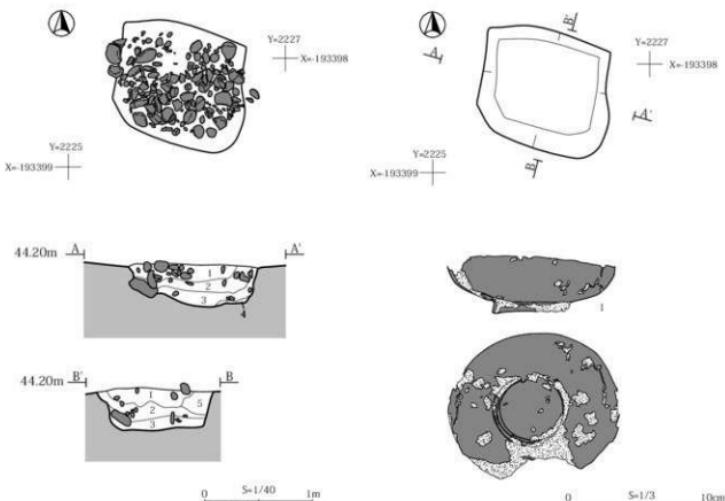
第176図 SX9 性格不明遺構出土遺物(3)

## 3) SX10 性格不明遺構(第177図、図版80-3~6)

N1-W8 グリッドに位置する方形の土坑状を呈する遺構である。規模は、長さ 1.22m、幅 1.08m、深さ 38cm を測る。平面形はやや歪んだ方形で、底面は平坦、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形である。主軸方向は N-75°-W を示す。

1 層上面には径 5 ~ 15cm の円礫が多量に見られた。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体に 5 層に分けられ、1・2 層で特に礫を多く含む。

遺物は底面直上で漆器椀が 1 点出土したので図示した。



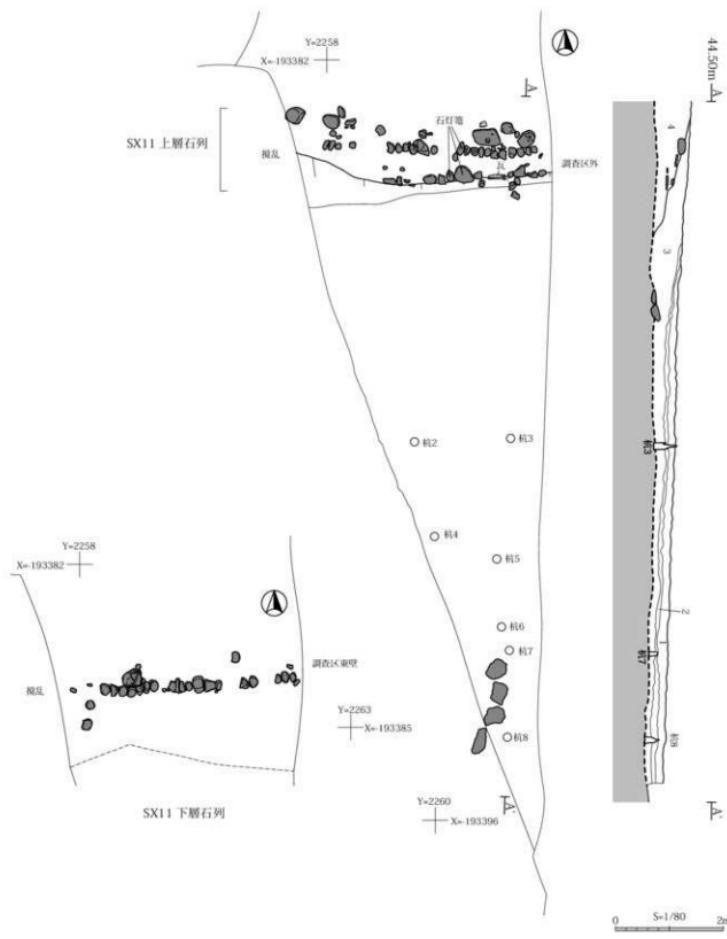
第177図 SX11性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

## 4) SX11 性格不明遺構 (第178・179図、図版80-7~81-1)

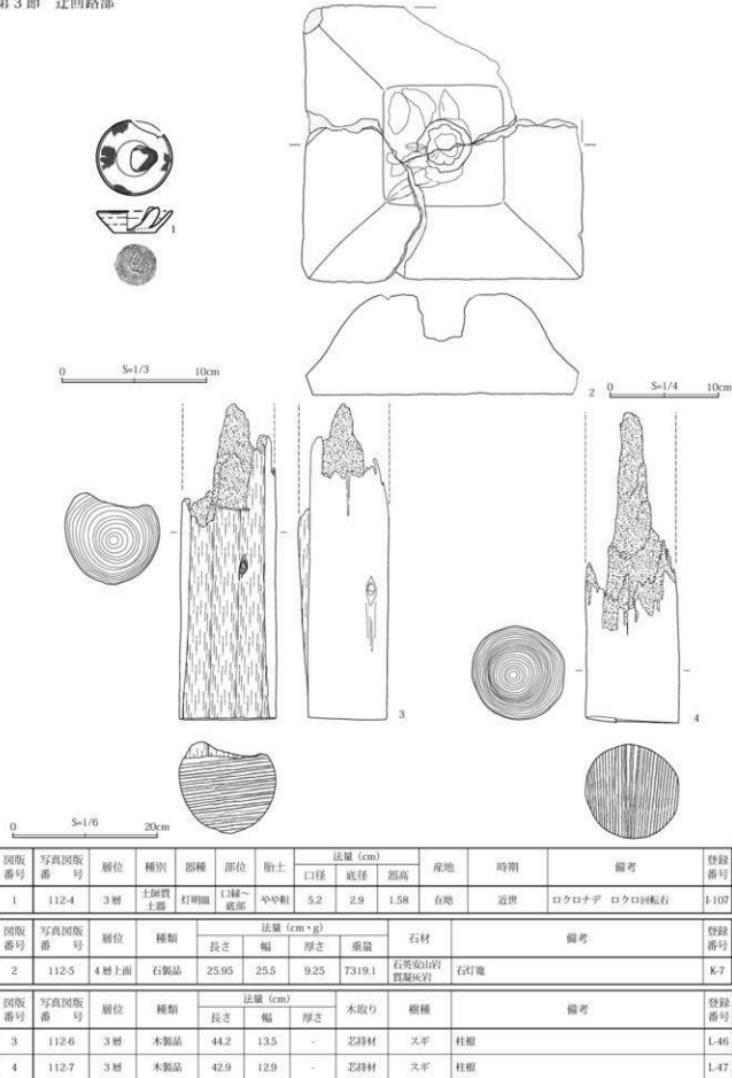
N2-W4・W5 グリッドに位置する石列とその南側に広がる遺構である。石列は東西に走り、西側は近代以降の擾乱で削平され、東側は調査区外へ延びる。また、2層にわたって検出され、上層は2列、下層は1列を呈する。確認した規模は、長さ 2.62m、幅 60cm を測る。主軸方向は N-88°-W を示す。

検出された上層の石列は、長さ 10 ~ 32cm、幅 8 ~ 25cm、厚さ 5 ~ 20cm の円礫や角礫が、概ね 40cm の間隔をあけて 2列に並ぶ。下層の石列は、同様の大きさの礫が、上層の南側石列の 8cm ほど下で検出された。石列には円礫や角礫に混じって、丸瓦の破片、石灯籠の一部等が確認された。SX11 の石列を境に南側は緩やかに落ち込んでいく、堆積土は黒褐色の腐植混じりのシルトである。以上から SX11 の石列は、池ないし湿地状を呈する施設の護岸にあたるものと推測される。SX11 の南側では、飛び石状の石列や直径約 13cm の丸太を使用した柱根が7本検出されており、関連する施設跡等であった可能性が考えられる。

出土遺物のうち、灯明皿1点、石灯籠の一部、柱根2点を図示した。



第178図 SX11 性格不明遺構平面図・断面図



第179図 SX11性格不明遺構出土遺物

## 5) SX17 性格不明遺構（第180～183図、図版81-2～4）

N2-W5・W6 グリッドに位置する石組の遺構である。東西両側を搅乱により削平されており全体の形状は明確ではない。SX9と重複し、SX9より古い。確認した規模は、検出長8.56m、幅4.56m、深さ68cmを測る。

当初は北西から南東に走る石列が検出され、その形状から池等の境界等が想定されたが、掘り下げると石列に交差して埋められた石組溝が異なる高さで3条検出された。以下個別にその概要を述べる。また、ここでは、便宜的に溝を北からa溝・b溝・c溝と呼称する。

## 〈石列〉

石列はSX17西側を北西から南東方向へ走り、確認した長さ8.56m、主軸方向はN-54°-Wを示す。長さ14～48cm、幅10～36cm、厚さ6～30cmの円礫及び打ち欠いて板状に整形された礫等を立てて並べている。その内側（東側）は落ち込み、池状を呈している。壁面は、所々表面を円礫や角礫で覆われており、もともとは壁面全体が礫で覆わっていたものと推測される。

## 〈a溝〉

SX17北側を東西に走る石組溝である。西側は石列によって埋められ、その後で搅乱により削平される。東端も搅乱により削平される。平面形はほぼ直線状であるが、搅乱により判然としないが北壁の形状から東端で北へ屈曲する可能性がある。確認した規模は、長さ3.82m、石組内側の上端幅24～30cm、下端幅20～24cm、深さ最大32cmを測る。主軸方向はN-74°-Eを示し、断面形は逆台形である。

石組は、長さ20～40cm、幅10～22cm、厚さ6～15cmの円礫を、平坦な面を内側へ向けて2段ないし3段に重ねられている。隙間に多く含む黒褐色砂質シルトを詰めて安定させている。底面は平坦で西から東へ僅かに傾斜し、側壁のものよりやや小ぶりの平坦な円礫が敷かれている。遺物は出土していない。

## 〈b溝〉

a溝と角度を変えて、東西方向に走る石組の溝である。西端は搅乱により削平される。確認した規模は、長さ3.7m、石組内側の上端幅40cm、下端幅35cm、深さ25cmを測る。平面形は直線状であり、主軸方向はN-89°-Eを示す。断面形は逆台形である。

石組は長さ20～40cm、幅15～25cm、厚さ8～15cmの円礫を、平坦な面を内側へ向けて1段ないし2段重ねられている。隙間に多く含む黒褐色砂質シルトを詰めて安定させている。底面は平坦で西から東へ僅かに傾斜し、小ぶりの扁平な円礫が敷かれている。遺物は出土していない。

## 〈c溝〉

b溝の南側を平行して走る石組溝である。西端は石列とその下の斜面に埋まっているが、その西側は搅乱により削平される。東側は石列下の斜面から2m程で途切れる。確認した規模は、長さ3.2m、石組内側の上端幅22～28cm、下端幅20～23cm、深さ23cmを測る。平面形は直線状であり、主軸方向はN-88°-Eを示す。断面形は逆台形である。

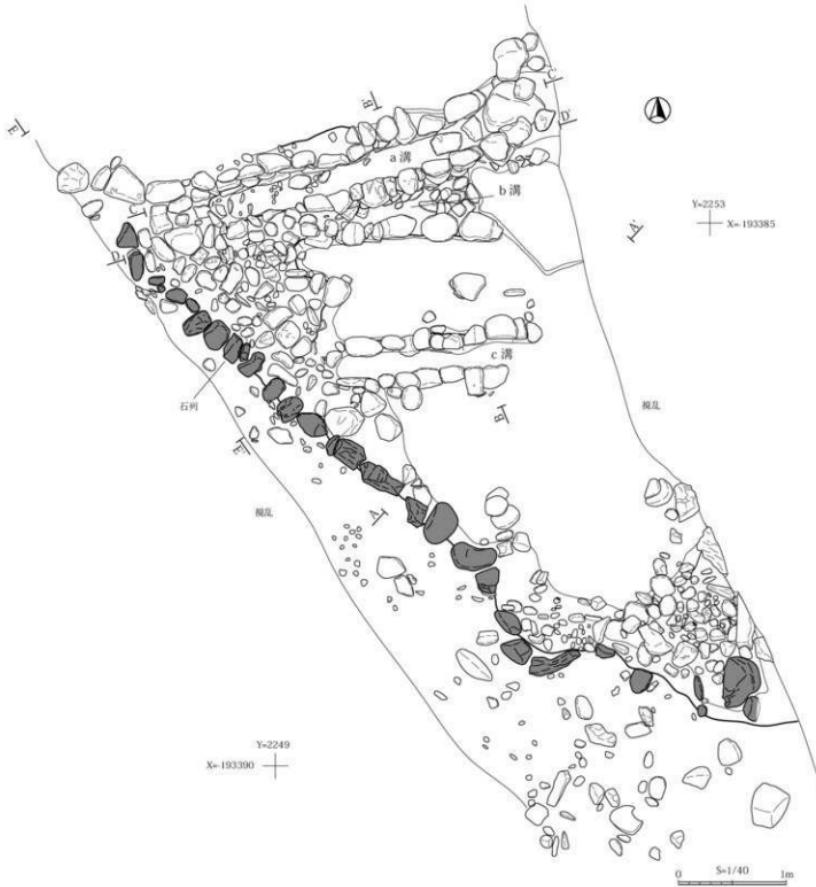
石組は長さ15～40cm、幅12～19cm、厚さ8～15cmの円礫を、平坦な面を内側へ向けて1段ないし2段重ねられている。隙間に多く含む黒褐色砂質シルトを詰めて安定させている。底面は平坦で西から東へ僅かに傾斜し、内部に小礫を多量に含む砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。

SX17性格不明遺構は現場調査では、その性格が十分理解できなかった。土層断面を観察すると堆積層は大きく上下2層に分けられることより、下層で検出された2本の溝（b・c）があったところを埋め、上層に別の溝（a）を構築し、更にその溝を埋めて池状の施設が築造されたものと推定できる。当遺構の西側を南北に走る搅乱の東壁では、3条の溝の断面が確認されており（E-E'）、それぞれ西側へ繋がっていたものと考えられる。その先は搅乱により削平されており判然としないが、位置的には搅乱を挟んで西側に位置するSX21性格不明遺構に繋がっていく。

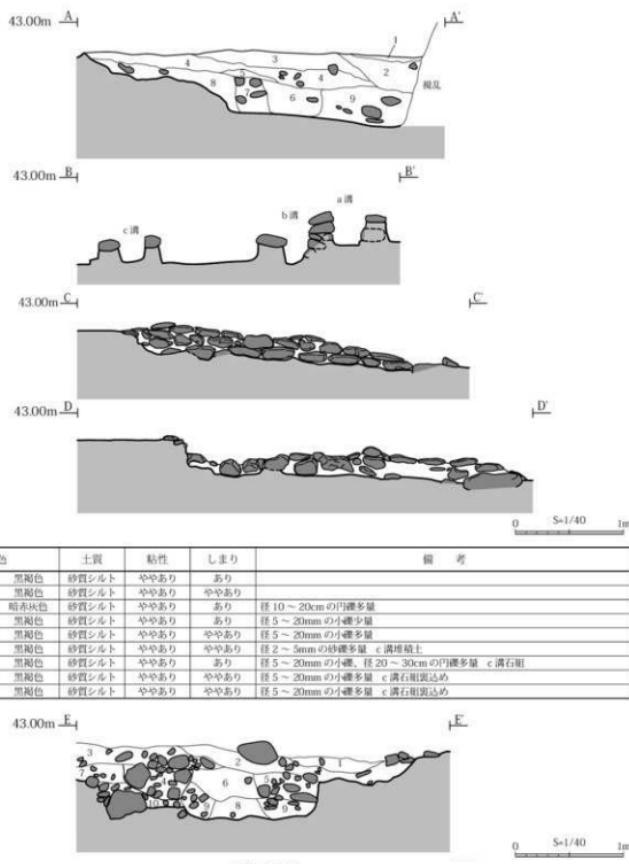
### 第3節 迂回路部

可能性が考えられる。当遺構はIV層が盛土される18世紀後葉から機能し、何回か変遷を経て、重複するSX9が掘削される以前に埋められたものと考えられる。

遺物は、重複関係にあるSX9に帰属するものが混入している可能性があるが、池状の遺構の堆積土（3～5層）から、18世紀後半～19世紀にかけての陶磁器を中心に多量の遺物が出土している。そのうち、陶器では、大堀相馬産の碗や皿、壺等5点、磁器では、肥前産の小杯や皿等4点、土師質土器2点、瓦質土器1点、平瓦1点、古銭1点図示した。

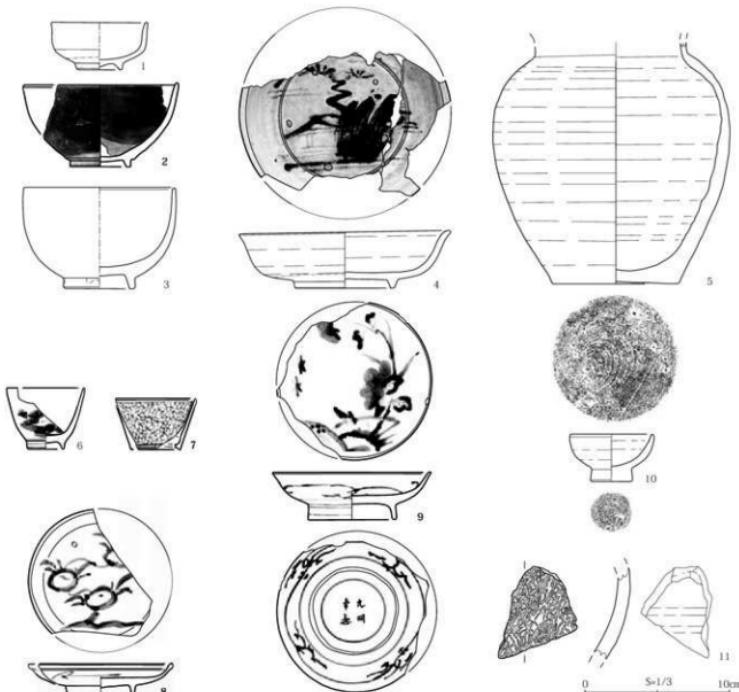


第180図 SX17 性格不明遺構平面図



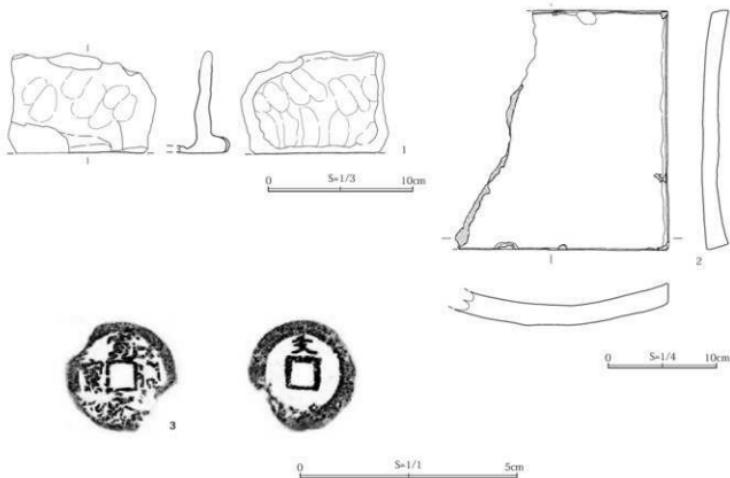
第181図 SX17 性格不明遺構断面図・立面図

第3節 迂回路部



図版番号	写真番号	部位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	112-8	4層	陶器	小杯	口縁～高台	やや密	6.66	3.22	3.3	大幅粗馬	18世紀後半～ 19世紀初葉	灰釉	I-108
2	112-10	3層	陶器	掛分け碗	口縁～高台	やや密	(10.8)	(4.2)	5.85	大幅粗馬	18世紀後半	鉄輪(茶褐色と黒輪)	I-109
3	112-9	4層	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	(10.5)	(5.0)	7.0	大幅粗馬	18世紀後半～ 19世紀初葉	灰釉 貫入	I-110
4	112-11	4層	陶器	皿	口縁～高台	密	4.68	6.9	3.5	大幅粗馬	18世紀後半	鉄輪山水文	I-111
5	113-1	4層	陶器	壺	口縁～高台	やや粗	-	8.9	16.65	有地	19世紀	鉄輪	I-112
6	113-2	4層	磁器	小杯	口縁～高台	密	(5.4)	2.6	4.25	肥前	18世紀末葉～ 19世紀初頭	染付松文	J-81
7	113-3	4層	磁器	挂口	口縁～高台	密	(5.45)	(3.45)	3.55	肥前	18世紀末葉～ 19世紀初頭	染付山水図文	J-82
8	113-4	4層	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.06)	4.6	2.1	肥前	19世紀初頭	染付 内面：染付草花文 外縁	J-83
9	113-5	4層	磁器	皿	口縁～高台	密	11.0	6.1	3.3	肥前	18世紀後半～ 19世紀初葉	染付草花文 高台内に路「大明年製」 内面：染付草花文 雕文	J-84
10	113-6	4層	土師質土器	皿	口縁～高台	やや粗	(5.9)	2.98	3.27	在地	近世	ロクロナデ 底部削起系切り痕	I-113
11	113-7	4層	土師質土器	不明	底部	粗	-	-	6.3	在地	不明	無繪	I-114

第182図 SX17性格不明遺構出土遺物(1)



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	産地	時期	備考	登録番号
1	113-8	3層	瓦質土器	不明	口縁～体部	やや粗	口径：(12.0) (13.7) 厚さ：7.1	在地	近世	指頭痕	I-115
備考											
2	113-9	3層	平瓦	-	-	-	尻幅：(12.5) cm 頭幅：(19.75) cm 長さ：22.1 谷深：(2.0) cm 表、裏面ともにヨコナギ				G-3
備考											
3	113-10	4層	瓦質土器	1668	2.5	0.5	2.31	文政			N-29
備考											

第183図 SX17性格不明遺構出土遺物（2）

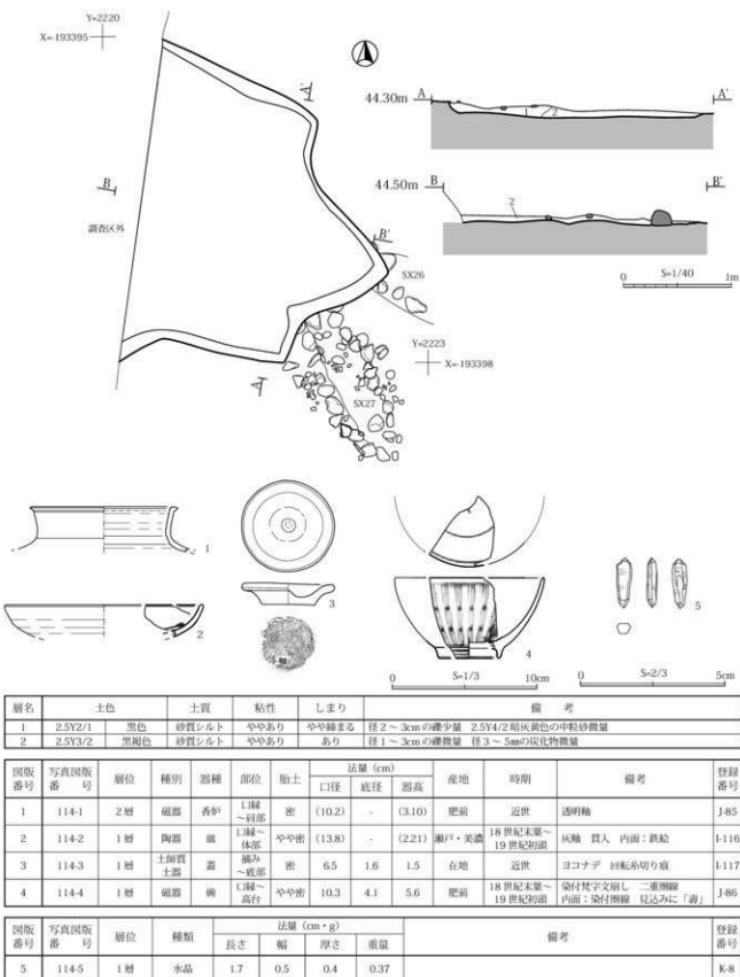
## 6) SX18 性格不明遺構（第184図、図版82-1～3）

N1-W8 グリッドに位置し、東側でSX26・27と、北側でP48と重複し、SX26・27より新しく、P48より古い。西側は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ3.0m、幅2.34m、深さ15cmを測る。平面形は不整形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒色及び黒褐色の砂質シルトで、南北で2層に分けられる。底面は概ね平坦で、SX26やSX27等の石列が確認される。壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物は破片総数で91点出土した。内訳は陶器36点、磁器11点、瓦質土器2点、土師質土器38点、石製品2点、金属製品（釘）2点である。1点（183図-1）を除いて全て1層より出土した。陶器は瀬戸・美濃産の鉄筋皿や堤産の焙烙、在地産の擂鉢、大堀相馬産の碗等が出土した。磁器は肥前産の碗や皿等が出土しており、18世紀末葉から19世紀にかけてのものである。また当遺構では土師質の皿の破片が比較的多く目立つが、その他に18世紀

### 第3節 迂回路部

前葉の焼塙壺が出土している。石製品では、碁石（黒石）1点と水晶が1点出土した。そのうち、瀬戸・美濃産陶器の皿1点、肥前産磁器の碗と香炉各1点、土師質土器の蓋1点、水晶1点を図示した。



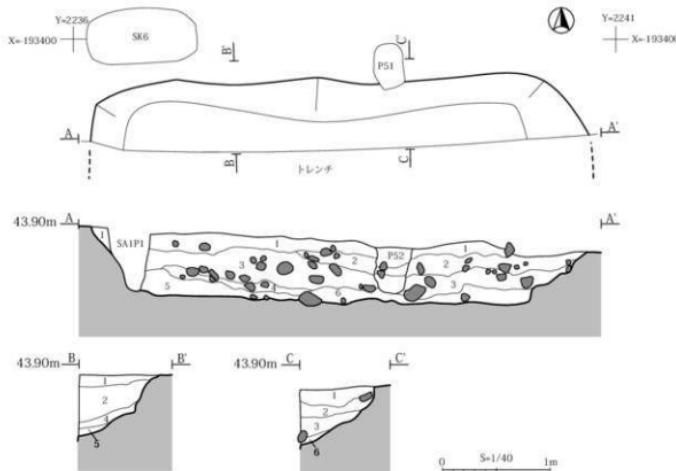
第184図 SX18 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

## 7) SX19 性格不明遺構（第185・186図、図版82-4～6）

S1-W7・W8 グリッドに位置する土坑状の遺構で、北側で P51 と、西側で SA1P1 と、中央で P52 と、南側で SK7 と重複し、P51、SA1P1、P52 より古く、SK7 より新しい。また、SK7 を切る。中央から南側は土層観察用のトレンチで削平され、さらに調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 4.59m、残存幅 1.65m、深さ最大 61cm を測る。平面形は不明で、縦断面は逆台形である。長軸方向は N-90°-E を示す。堆積土は砂質シルトを主体として円礫を含み、褐灰色、黒褐色ないし黒色の 6 層に分けられる。壁面は内湾しながら緩やかに立ち上がる。

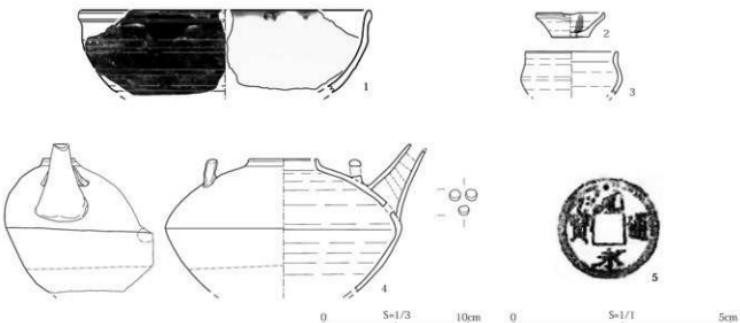
遺物は 2 層からの出土が比較的多いが、ほぼ全ての層から出土しており、破片総数で 138 点出土した。内訳は、瓦 9 点、陶器 54 点、磁器 43 点、瓦質土器 5 点、土師質土器 13 点、石製品 1 点、木製品 2 点、土製品 1 点、金属製品 7 点、その他 3 点である。瓦はほとんど種類の判別ができるなかった。陶器は大堀相馬産の碗や土瓶が半数を占め、他に小野相馬産の皿や堤産の擂鉢等 18 世紀後半～19 世紀代の遺物が出土している。堤産では軟質施釉陶器擂鉢のミニチュアが見られる。磁器は、肥前産の碗や皿、杯、合子、瀬戸・美濃産の碗等が少量、陶器と同様 18 世紀後半～19 世紀代の遺物が出土している。そのうち、陶器が大堀相馬産の鉢と土瓶、堤産の鉢と在地産の甕のミニチュアの 4 点、古鏡 1 点を図示した。

遺構の時期は 19 世紀前葉の遺物を出土する SK7 より新しく、出土遺物より 19 世紀前葉以降に掘削されたものと考えられる。



編名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	ややあり	径 5 ~ 20mm の小礫少量、炭化物少量
2	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	ややあり	径 5 ~ 20mm の小礫、径 10 ~ 20cm の礫少量
3	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径 5 ~ 20mm の小礫、径 10 ~ 20cm の礫少量
4	10YR4/1	褐灰色	砂質シルト	あり	ややあり
5	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり 径 5 ~ 20mm の小礫、径 10 ~ 20cm の礫少量
6	10YR2/1	黒色	砂質シルト	あり	ややあり 径 5 ~ 20mm の小礫、径 10 ~ 20cm の礫少量

第185図 SX19 性格不明遺構平面図・断面図



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法線(cm)		産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径				
1	114-4	3層	陶器	鉢	口縁～体部	やや粗	(22.12)	-	(5.65)	大堀相馬	18世紀後葉	E-118
2	114-6	4層	軟質陶器	擂鉢三つ足	口縁～底部	やや粗	(4.8)	(2.6)	(1.9)	堤	19世紀代	E-119
3	114-5	4層	土師質土器	甕ミニチュア	口縁～体部	やや粗	(6.4)	-	(2.91)	在地	近世	E-120
4	114-7	5層	陶器	土瓶	口縁～体部	やや密	(4.8)	(9.0)	(9.0)	大堀相馬	18世紀末～19世紀初頭	E-121

図版番号	写真図版番号	層位	鉢貨名	初鉄年	法線(cm・g)			備考	登録番号
					外径	穿径	重量		
5	114-8	1層	寛永通宝(新)	1697	2.3	0.6	284	無齊	N-30

第186図 SX19 性格不明遺構出土遺物

## 8) SX22 性格不明遺構 (第187・188図、図版82-7～83-1)

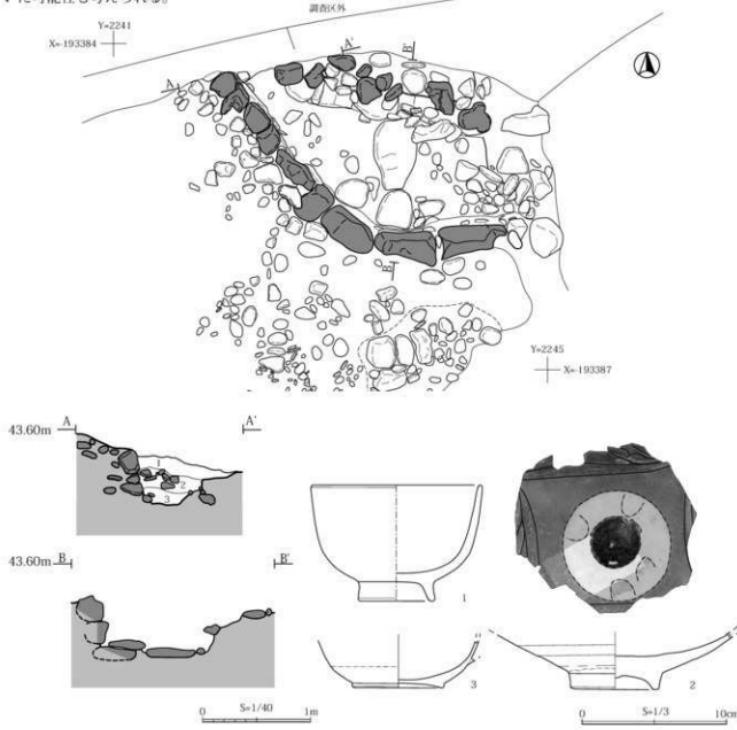
N2-W6 グリッドに位置する石組の溝の一部と思われる遺構である。当初、石列状の遺構と考えたため SX とした。東側を搅乱により削平され、北側は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 3.07m、上端幅 1.10 m、下端幅 25 ~ 54cm、深さ 50cm を測る。平面形は北から東へ弧を描くようになっており、東へ向かって傾斜する。断面形は逆台形である。

石組は西側壁面に見られるが、長さ 15 ~ 60cm、幅 14 ~ 25cm、厚さ 10 ~ 20cm の円礫を 2段ないし 3段積み上げ、東へ行くに従い、大きな石を使用している。裏込めには径 8 ~ 12cm 程の小礫を使用し、石組の裏側及び隙間に詰めて安定させている。堆積土は黒褐色及び黒色の砂質シルトを主体とし 3 層に分けられる。底面で、長さ 10 ~ 65cm、幅 6 ~ 38cm、厚さ 5 ~ 12cm の扁平な石が検出され、石が敷かれていたものと思われる。

遺物は破片総数で 86点出土した。内訳は、瓦 9点、陶器 26点、磁器 30点、土師質土器 17点、土製品 1点、古銭 1点、その他 2点である。瓦は平瓦、丸瓦他が出土しており桟瓦は見られない。陶器は大堀相馬産の碗や小野相馬産の鉢、肥前産の碗や皿、瀬戸・美濃産や岸窯産の擂鉢や香炉等 17世紀後半～18世紀代の遺物が出土している。磁器も陶器と同時期の肥前産及び波佐見産のものが出土しており、他に 1点中国産の皿が見られる。そのうち、肥前及び嬉野他、大堀相馬、岸窯、小野相馬産の陶器 6点、中国産及び肥前産の磁器 3点を図示した。

当遺構はIV層上面で検出されているが、出土遺物は 18世紀以前の、IV層上面検出遺構としては比較的古い遺物

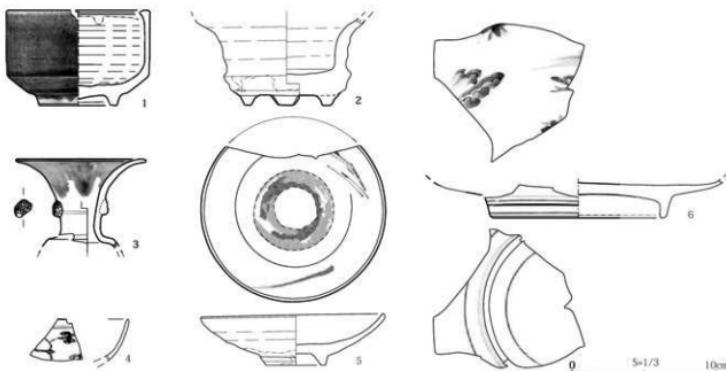
が多く見られる。東側が擾乱により欠損しているので判然としないが、位置的にはV層上面で検出された石組のSD3溝跡につながる可能性も考えられる。SD3溝跡に繋がるのであれば、落差80cm余りの流のように流下していたものと思われる。あるいは、擾乱の反対側に位置するSX17性格不明遺構の石組溝3条のいずれかにつながっていた可能性も考えられる。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			備考	登録番号
							口径	底径	高さ		
1	115-1	1層	陶器	瓶	口縁~高台	普通	(1.185)	5.30	8.05	昭和 17世紀後半 透明釉	I-122
2	114-9	2層	陶器	皿	体部~高台	やや密	-	6.1	(4.0)	昭和 17世紀後半 ロクロ回転;左:最大径:(16.24)蛇ノ目模刻ぎ	I-123
3	115-2	2層	陶器	瓶	体部~高台	やや密	-	6.40	(3.25)	九州? 遊世 跡輪目貼付突帯?状の底あり	I-124

第187図 SX22 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物（1）

### 第3節 迂回路部



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	周高				
1	115-3	2層	陶器	香炉	口縁～高台	粗	9.9	5.2	6.6	小野相馬	18世紀後半	灰釉	I-125
2	115-4	2層	陶器	香炉	体部～脚部	やや密	(10.8)	6.6	(6.08)	岸窯	17世紀後半	灰釉 口クロ回転：左 形状に添み有り 底部回転式切り底 脚部4個	I-126
3	115-5	2層	陶器	仏花器	口縁～底	やや密	9.08	-	6.05	大堀相馬	18世紀中葉～後半	灰釉 斜軸かけ流し	I-127
4	115-6	2層	磁器	皿	口縁～体部	密	-	-	2.9	中国	16世紀末葉～17世紀前葉	染付蔓草文 口内部が尖り味	J-87
5	115-7	2層	磁器	皿	口縁～高台	密	12.8	4.2	3.55	肥前	17世紀末葉～18世紀後葉	透明釉内面：染付草文蛇の行輪剥ぎ	J-88
6	115-8	2層	磁器	皿	体部～高台	密	-	(12.2)	(2.54)	肥前	18世紀代	透明釉圓線 内面：染付 花、鳥 文 最大径：(20.0) cm	J-89

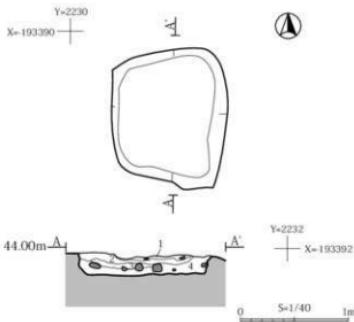
第188図 SX22 性格不明遺構出土遺物 (2)

#### 9) SX23 性格不明遺構

(第189・190図 図版83-2・3)

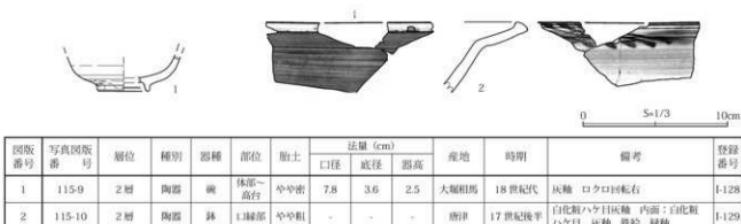
N-1W7 グリッドに位置する浅い土坑状を呈する遺構である。規模は、長軸 1.22m、短軸 1.06m、深さ 20cm を測る。平面形は、主軸方向 N-0°-W を示す隅丸長方形であり、断面形状は逆台形である。堆積土は砂質シルトを主体とし 4 層に分けられる。何れの層にも炭化物と礫が微量含まれ、2 層には焼土粒が含まれる。底面は平坦で、壁面は僅かに外傾し直線的に立ち上がる。

出土遺物は陶器が大堀相馬産の碗や、唐津産の鉢等、磁器では肥前産の皿等、17世紀後半～18世紀代の陶磁器と土師質土器の皿等数点が出土している。そのうち、大堀相馬産と唐津産の陶器の碗と鉢 2 点を図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y6/6 明黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	2.5Y3/2 黒褐色の砂質シルト粉少量 径 3～5mm の炭化物微量
2	2.5Y3/1 黒褐色	砂質シルト	なし	ややあり	径 0.5～1cm の炭化物少量 径 3～5mm の SRS/6 明赤褐色の燒土粒微量
3	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	なし	あり	径 3～5mm の炭化物微量 径 2～5cm の礫微量
4	2.5Y4/2 單灰褐色	砂質シルト	なし	ややあり	径 5～8mm の炭化物微量 径約 10cm の礫微量

第189図 SX23 性格不明遺構平面図・断面図

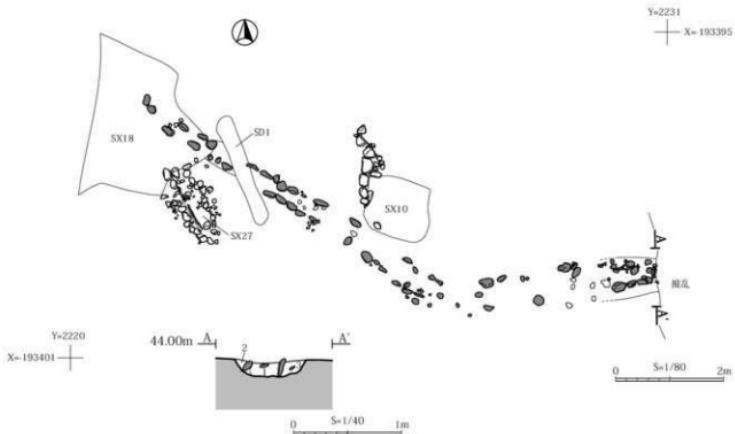


第190図 SX23 性格不明遺構出土遺物

## 10) SX26 性格不明遺構（第191図、図版83-4・5）

N1-W7～S1-W8 グリッドに位置し、2列の石列を有する溝状の遺構である。全体的に削平され、残存していたのは最下段の石列の一部のみで、振り方等も東端の一部を除いて確認されなかつた。西側で SX18、SD1 と重複し、両遺構より古い。確認した規模は、長さ 10.5m、幅 45cm、深さ最大 14.4cm を測る。平面形は「く」の字形であり、断面形は逆台形である。主軸方向は西側で N-59°W、東側で N-80°E を示す。

石列は長さ 15～30cm、幅 5～17.6cm である。厚さ 4～15.5cm の円礫の長軸を遺構の主軸方向に平行にして並べている。大部分削平されているため、堆積土や振り方等は、東端を除いて明確に確認できなかつたが、東端の断面形は逆台形を呈し、堆積土は砂質シルト主体で 3 層に分けられる。西側では、SD1 の壁面で、炭化物を多量に含む黒褐色砂質シルトの堆積が僅かに観察される。遺物は出土していない。



第191図 SX26 性格不明遺構平面図・断面図

### 第3節 迂回路部

#### 11) SX27 性格不明遺構（第192図、図版83-6）

N1-W8 グリッドに位置し、石で周囲を巡らせる小規模 X=193397  
な溝状の遺構である。規模は、長軸 1.64m、短軸 86cm、  
掘り方底面までの深さ 6cm を測る。平面形は長楕円形で  
あり、断面形は浅い皿形である。主軸方向は N-30°-W を  
示す。

遺構の外周には長さ 12 ~ 24cm、幅 9 ~ 15cm、厚さ  
5 ~ 12cm の円礫や角礫を巡らせる。その内側には木質も  
しくは自然木が横たわる。この木質については、損傷が激  
しく、板や角材等の加工木か自然木かも判断できかねた。  
堆積土は黄褐色粘土、黒褐色砂質シルトが堆積し、南側に  
粘土ブロックを含む硬化面が見られる。

遺物は 18 世紀後半の大崩落相馬産の碗の破片が数点出土  
しているが細片のため、図示し得なかった。

剖面名	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	5Y5/1	黄灰色	粘土	あり	あり
2	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	延 3 ~ 5mm の砂礫少量
3	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	延 2 ~ 10mm の砂礫多量

第192図 SX27 性格不明遺構平面図・断面図

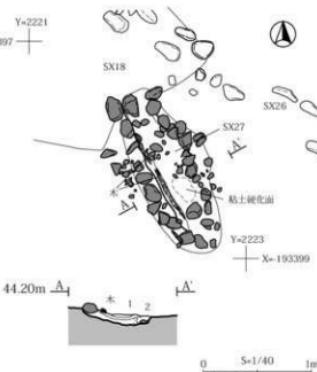
#### 12) SX28 性格不明遺構（第193・194図、図版84-1・2）

N2-W7 グリッドに位置する、南北に走る石列状を呈す  
る遺構である。北端は調査区外へ延び、南側は後世の擾乱  
により削平されている。また、中央を土層断面確認用のペ  
ルトが斜めに横切る。確認した規模は、長さ 5.03m、幅  
1.49m、深さ 24cm を測る。平面形は、主軸方向 N-5°-W  
を示す直線状で、断面形は東へ下がる階段状である。

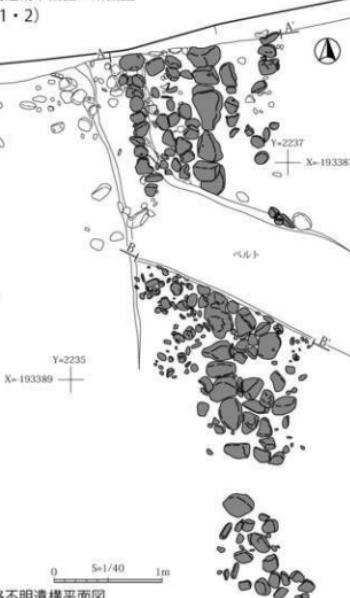
石列はおよそ 60cm 間隔で大きく 3 列に分けられ、西  
側は長径 13 ~ 24cm の円礫が並び、その東側、中央の列  
は長径 22 ~ 38cm の礫が並ぶ。西端の石列は、長さ 1.4m  
程度して南側は削平されて残っていなかったが、北側では、  
西端の石列から 1 段下がって中央の石列まで長径 10 ~  
18cm 程の円礫が敷かれているように見える。中央石列か  
らさらに東側に長径 15 ~ 25cm 程の円礫の石列が検出さ  
れ、南側では中央石列との間にも石が詰められている。

遺物は、東側と中央の石列の間の敷石状の隙間にから磁器  
が 2 点、17 世紀後葉～18 世紀中葉の肥前産の皿と 19 世  
紀前半頃の波佐見産の灰落しが出土した。

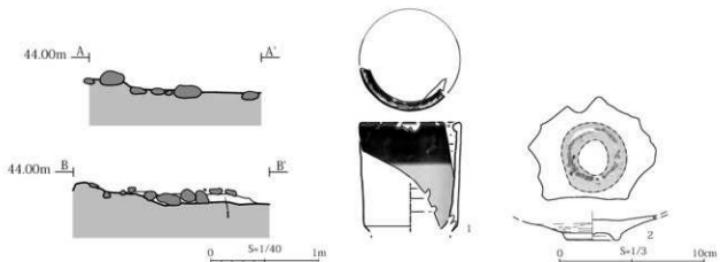
当遺構は上層が削平されているので判然としないが、階  
段状を呈することから、建物の端の基壇等を想定するこ  
とができる。時期は出土遺物より 19 世紀前半以降と考えら  
れる。



第193図 SX28 性格不明遺構平面図



れ、迂回路部北西部で検出された建物跡の東の端に当たるものであるとも考えられる。



番号	土色		土質		粘性		しまり		備考	登録番号
	1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径 10 ~ 18cm の礫多量				
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	断面	法量 (cm)	产地	時期	備考
1	115-11	1層	磁器	灰陶	口縁～体部	密	7.0 (7.0) - (7.55)	波佐見	19世紀前半	青磁 緑釉 内面：口縁部 緑釉 無釉 口縁部に斜打痕
2	115-12	1層	磁器	皿	体部～高台	密	9.6 (9.6) 3.72 (1.7)	肥前	17世紀後葉～18世紀中葉	透明釉 無釉 内面：口縁部削ぎ ロクロ回転；左

第194図 SX28 性格不明遺構断面図・出土遺物

## 13) SX34 性格不明遺構 (第195・196図、図版84-3・4)

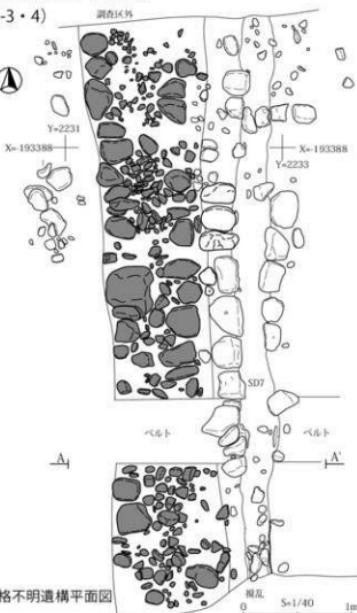
N1・N2-W7 グリッドに位置し、南北に走る石列状を呈する遺構である。SD7溝跡に隣接しているが、完全に平行配置にはない。北端は調査区外へ延び、南端は擾乱により削平される。確認した規模は、長さ 5.4m、幅 92cm、掘り方の深さ 32cm を測る。平面形は主軸方向 N-4°-W を示す直線状であり、断面形は逆台形である。

石列の構成は、長さ 25 ~ 50cm、幅 12 ~ 40cm、厚さ 10 ~ 25cm の円礫を、各円礫の長軸を主軸方向に対して直交させて 2 列に並べ、その内側に裏込めとして長径 5 ~ 15cm 程の礫を詰めて安定させている。2 列の石列は、西側の石列は西側へ、東側の石は東側へ、それぞれ外側へ向けて面を合せて並べられているように見える。また、さらに東側には SD7 の石組が連なっている。

堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、3 層に分けられる。2 層は裏込めの長径 5 ~ 10cm 程の礫を多量に含み、また、その東側は SD7 に削平されている。遺物は出土していない。

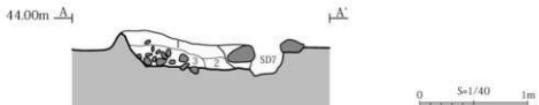
本遺構は東側に広がるカマド遺構の上屋の東端にあ

第195図 SX34 性格不明遺構平面図



### 第3節 迂回路部

たるものと思われ、床面とのつながりが明確には確認できなかったが、建物の東側の壁の基礎に当たるものと推測される。隣接するSD7との関係であるが、建物を建てたのち、雨落ち溝としてSD7を掘削したものと考えられる。一方では、東側の石列が東側へ面をそろえて並んでいること、及び土層断面の堆積状況から、もともとSX34の東側石列が雨落ち溝の西辺で、掘り直した雨落ち溝がSD7である可能性等も考えられる。



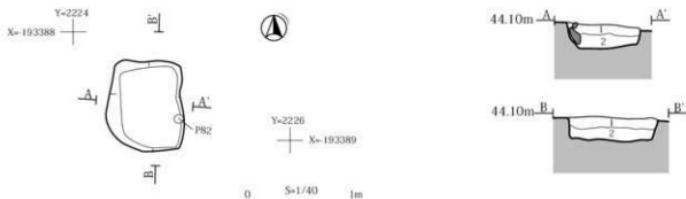
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR4/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	
2	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径5~10cmの礫少量
3	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり	径5~10cmの礫少量

第196図 SX34 性格不明遺構断面図

#### 14) SX37 性格不明遺構（第197図、図版84-5～8）

N2-W2 グリッドに位置する土坑状を呈する遺構である。規模は、長軸 84cm、短軸 71cm、深さ 24cm を測る。平面形は、主軸方向 N0°W を示す隅丸方形であり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし 2 層に分けられる。1 層は炭化物及び灰が多量に含まれ、当初力マドであるかとも考えられたが、火床面や構築材等は確認されなかった。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は平瓦の破片や、陶器では 19 世紀代の堤産の鉢、土師質土器の皿の破片等が少量出土しているが、細片のため同定化しえなかった。

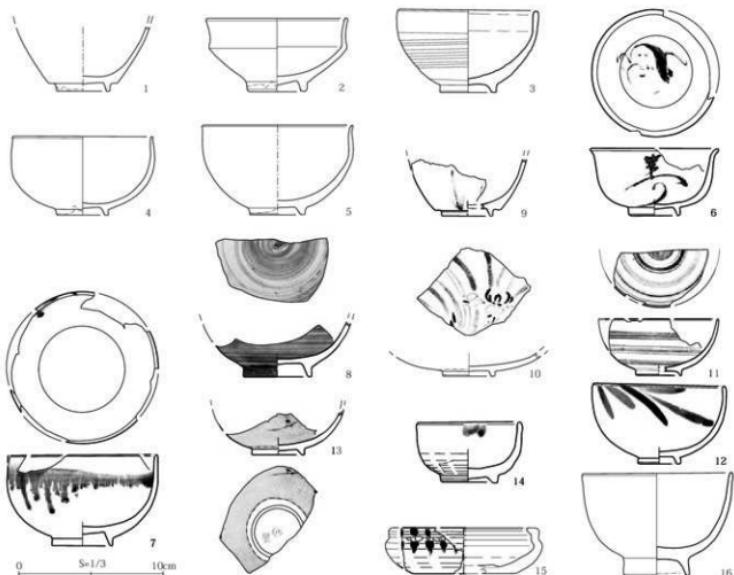


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	径約 1cm の炭化物、灰多量
2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり	中粒砂少量

第197図 SX37 性格不明遺構平面図・断面図

#### (7) IV層出土遺物（第198～216図、図版115-13～128-16）

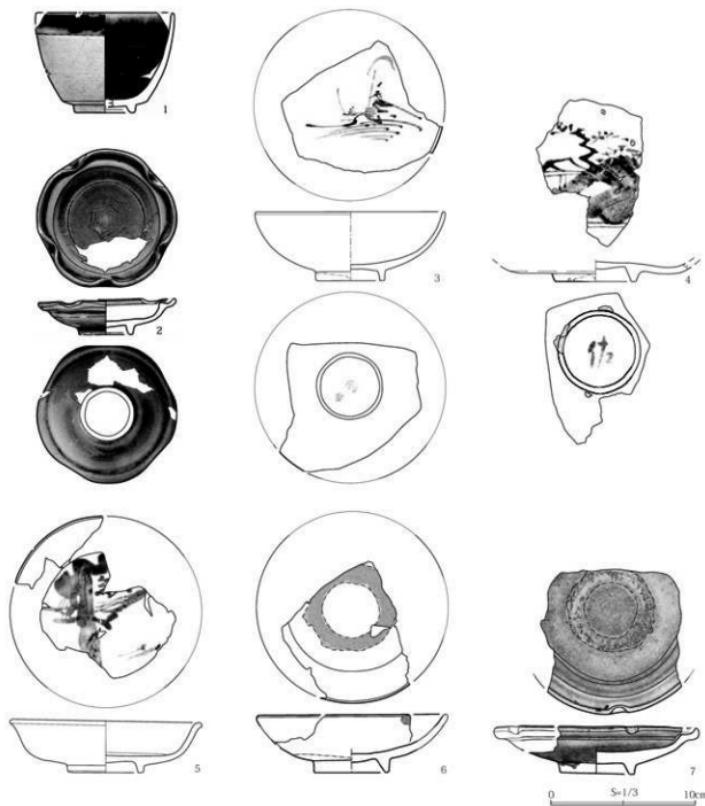
IV層からの出土遺物は破片数で 2,083 点である。内訳は陶器 887 点、磁器 683 点、瓦質土器 67 点、土師質土器 164 点、瓦 184 点、金属製品 60 点、木製品 14 点、石製品 8 点、土製品 2 点、その他 14 点である。陶器は 18 世紀末葉～19 世紀初頭の大堀相馬産の碗や皿が多く、次いで肥前産や瀬戸・美濃産、小野相馬産等が見られる。肥前産の陶器は 17 世紀後半の碗や京焼風の皿等が見られる。瀬戸・美濃産では 16 世紀末葉～17 世紀初頭の輪花皿、織部や志野等が出土している。小野相馬産は片口と皿が目に付く。磁器では、肥前産のものがほとんどで、波佐見産が次ぐ。陶磁器を見る限り概ね 16 世紀末葉～19 世紀初頭の遺物が見られるが、18 世紀後葉のものが主体となる。陶磁器以外では、瓦質の火鉢や土師質の皿、灯明皿、焼塙壺等が見られ、金属製品では飾り金具や簪、釘、寛永通宝、キセル等、土製品の人形（動物）や、石製品の硯、砥石が出土している。そのうち 132 点を図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド番号	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)		産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径					
1	115-13	N1-W6	陶器	碗	体部～高台	やや粗	-	3.35	4.4	大堀相馬	18世紀後葉	灰釉	I-130
2	116-1	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	(8.85)	4.2	5.1	大堀相馬	18世紀後葉～19世紀初頭	灰釉 貫入	I-131
3	116-2	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	9.8	3.9	5.78	大堀相馬	18世紀後葉	灰釉 斧輪目掛け分け 内面：灰釉	I-132
4	116-3	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	密	9.75	3.55	5.49	大堀相馬	18世紀後葉	灰釉	I-133
5	116-4	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	(10.5)	3.85	6.2	大堀相馬	18世紀後葉～19世紀初頭	灰釉 貫入	I-134
6	116-5	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	8.87	3.6	6.65	大堀相馬	18世紀末葉～19世紀初頭	鉄輪「寿」灰釉 内面：鉄輪「多福」	I-135
7	116-6	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	10.4	4.15	6.35	大堀相馬	18世紀後葉	灰釉 斧輪目掛け流し 貫入	I-136
8	116-7	N1-W6	陶器	碗	体部～高台	やや粗	-	4.75	(3.8)	唐津	17世紀後半	刷毛目 灰釉	I-137
9	116-8	N1-W6	陶器	碗	体部～高台	やや密	(8.5)	(3.6)	(4.09)	信楽	18世紀後半～19世紀	白瀬目 鉄輪若松文	I-138
10	116-9	N1-W7	陶器	碗	体部～高台	密	(9.9)	3.6	(1.65)	京都	18世紀後葉～19世紀	透明白 滴頭紋 内面：上絵付け草花文 (赤絵、金模)	I-139
11	116-10	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	(8.3)	(3.1)	3.9	京御器	18世紀後半～19世紀	透明白 貫入	I-140
12	116-11	N1-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	9.2	2.94	5.6	京都	18世紀中葉	灰釉 貫入 上絵付け(緑繪、赤絵、白文)	I-141
13	116-12	N1-W6	陶器	碗	高台～体部	やや密	-	(3.7)	(3.15)	京都	18世紀中葉	灰釉 上絵付け草花 灰白内に刷毛目 内面：貫入あり	I-142
14	117-1	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや密	14.0	3.7	4.2	瀬戸・美濃	18世紀後葉	灰釉	I-143
15	117-2	N2-W6	陶器	両付け	口縁～底部	和	(10.5)	(7.0)	3.2	瀬戸・美濃	16世紀末～17世紀初頭	鉄輪 反石繩 大輪わたり	I-144
16	117-3	N2-W6	陶器	碗	口縁～高台	やや粗	10.5	4.6	7.15	肥前	17世紀後半	灰釉 貫入	I-145

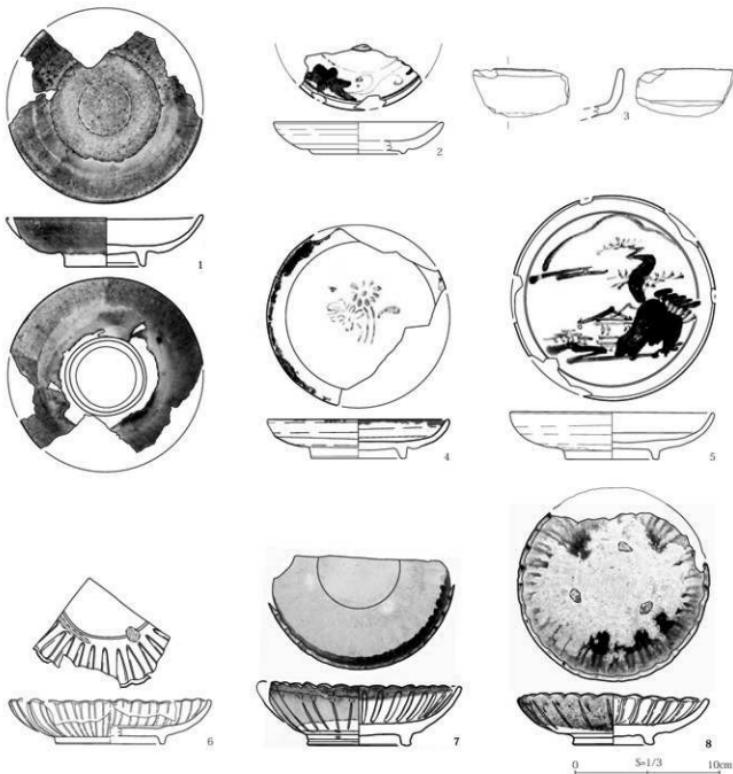
第198図 IV層出土遺物(1)

第3節 迂回路部



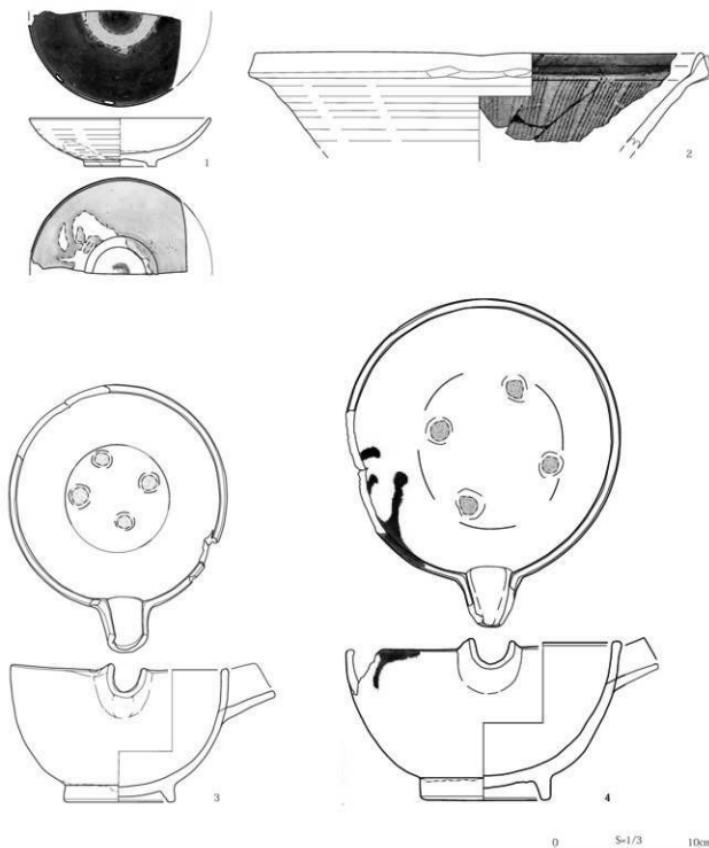
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)		産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径					
1	117-4	N1-W6	陶器	画	口縁～高台	中空密	6.9	(4.20)	6.95	瀬戸・美濃	18世紀代	灰釉 花手	I-146
2	117-5	N1-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	中空密	(9.7)	3.5	2.45	大垣相馬	18世紀後葉	灰釉 貫入 内面：対达みに印刷	I-147
3	117-6	N1-W8	陶器	平底	口縁～高台	中空密	13.0	4.6	4.8	肥前	17世紀後半	染付 花入あり 内面：鉄筋山水 模様文 内面に刻印	I-148
4	117-7	N1-W8	陶器	画	底盤～高台	中空粗	-	5.7	1.85	大垣相馬	18世紀末葉～ 19世紀初頭	灰釉 貫入有り 高台内に墨書き (左) 内面：貝須熟鶴山水文	I-149
5	117-8	N2-W6	陶器	画	底盤～高台	中空密	(13.3)	5.25	3.7	大垣相馬	18世紀末葉～ 19世紀初頭	灰釉 貫入 内面：貝須熟鶴山水文	I-150
6	117-11	N1-W6	陶器	画	口縁～高台	粗	(13.2)	4.95	4.05	小野相馬	18世紀後半	灰釉 貫入あり	I-151
7	118-1	N2-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	中空粗	(14.2)	5.1	3.3	小野相馬	18世紀後葉	灰釉 貫入 他の口輪割ぎ	I-152

第199図 IV層出土遺物(2)



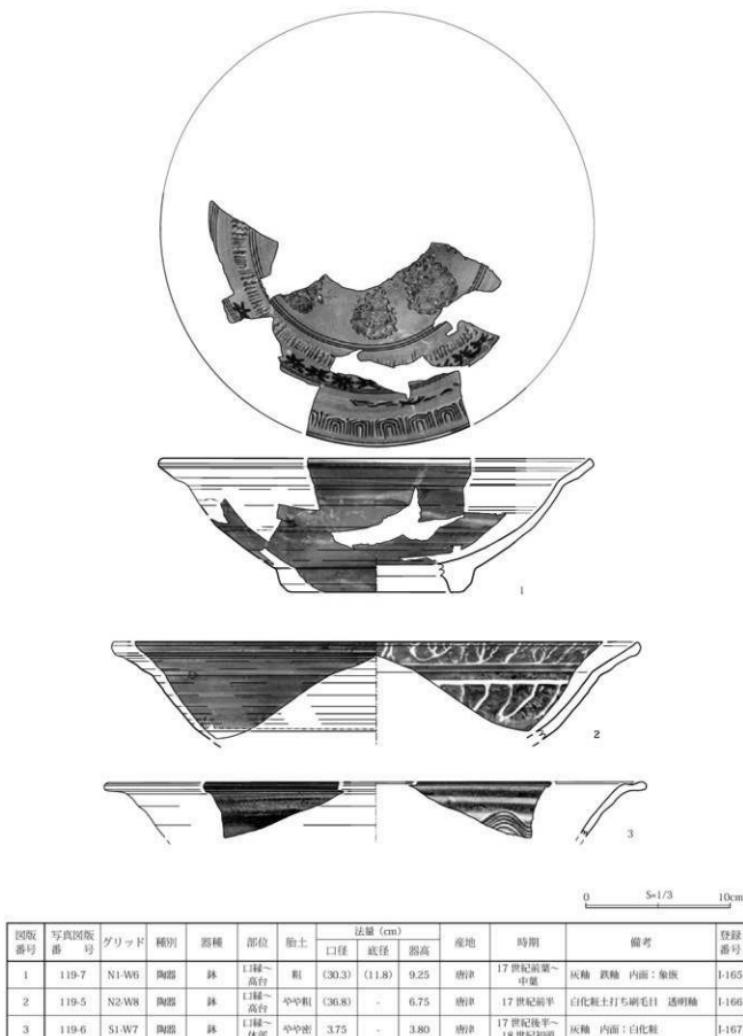
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号	
						口径	底径	器高					
1	118-2	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	粗	13.6	5.50	3.7	小野相馬	18世紀中葉～後葉	灰釉 蛇の目輪削ぎ	I-153
2	117-9	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	粗	(11.8)	(6.5)	2.2	瀬戸・美濃	16世紀末～17世紀前葉	立野輪 貫入 内面：鉄輪 貫入りあり	I-154
3	117-10	N1-W6	陶器	碗形～舟形	口縁～体部	粗	-	-	(3.35)	瀬戸・美濃	16世紀末葉～17世紀前葉	透明輪 貫入	I-155
4	118-3	N1-W7	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	12.6	6.6	2.7	瀬戸・美濃	18世紀後葉	灰釉 油押付着・二次焼成 灯 明顯に油押か 内面：鉄輪草花文	I-156
5	118-4	N1-W6	陶器	皿	口縁～高台	やや粗	14.2	6.45	3.3	瀬戸・美濃	18世紀後葉半	灰釉 ハラタズリ 内面：鉄輪 山水文 貫込みに浅縫	I-157
6	118-5	N1-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	やや粗	(14.0)	(7.5)	3.04	瀬戸・美濃	17世紀後葉～18世紀前葉	灰釉 脊上目 扇柱彫	I-158
7	118-6	S1-W8	陶器	輪花皿	口縁～高台	やや粗	(13.66)	7.15	4.4	瀬戸・美濃	17世紀後葉～18世紀前葉	灰釉 無輪 目残存(内面2側、外側2箇) 花み有り	I-159
8	118-7	N2-W6	陶器	輪花皿	口縁～高台	やや粗	13.22	5.2	3.62	瀬戸・美濃	17世紀後葉～18世紀前葉	灰釉 目前3ヶ残存	I-160

第200図 IV層出土遺物(3)



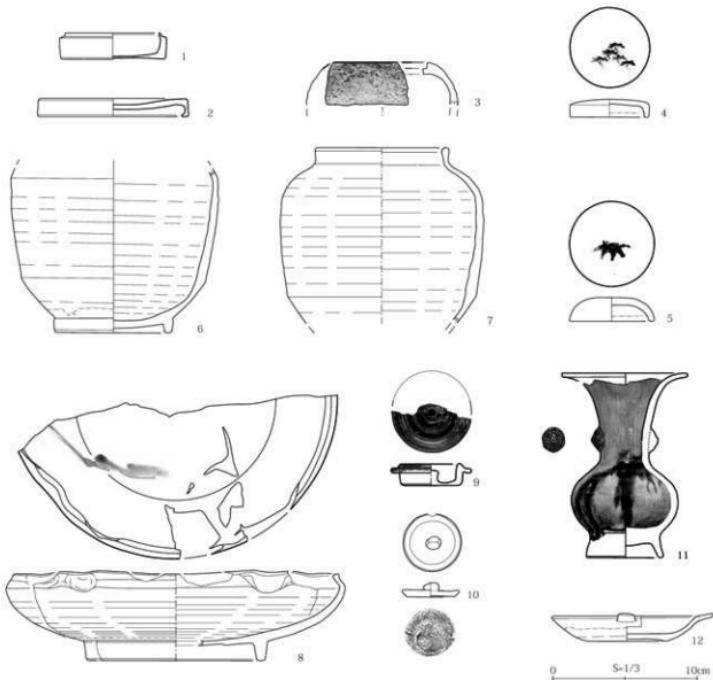
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	119-1 N1-W6		陶器	皿	口縁~ 高台	やや粗	(12.6)	(5.0)	3.35	姫野	17世紀後半	灰釉 内面：蛇ノ目模消ぎ 高台内に墨書「○」	I-161
2	119-4 N1-W8		陶器	擂鉢	口縁~ 全体	粗	(31.2)	-	(6.55)	丹波	17世紀後半~ 18世紀初期	鐵釉	I-162
3	119-2 N1-W6		陶器	片口鉢	口縁~ 高台	粗	15.3	7.4	9.8	小野相馬	18世紀前葉~ 中葉	灰釉 内面に目痕4ヶ	I-163
4	119-3 N1-W6		陶器	片口鉢	口縁~ 高台	やや粗	19.4	8.5	10.6	小野相馬	18世紀前葉~ 中葉	灰釉 内面：鉄釉剥け流し 内面に目痕4ヶ	I-164

第201図 IV層出土遺物(4)



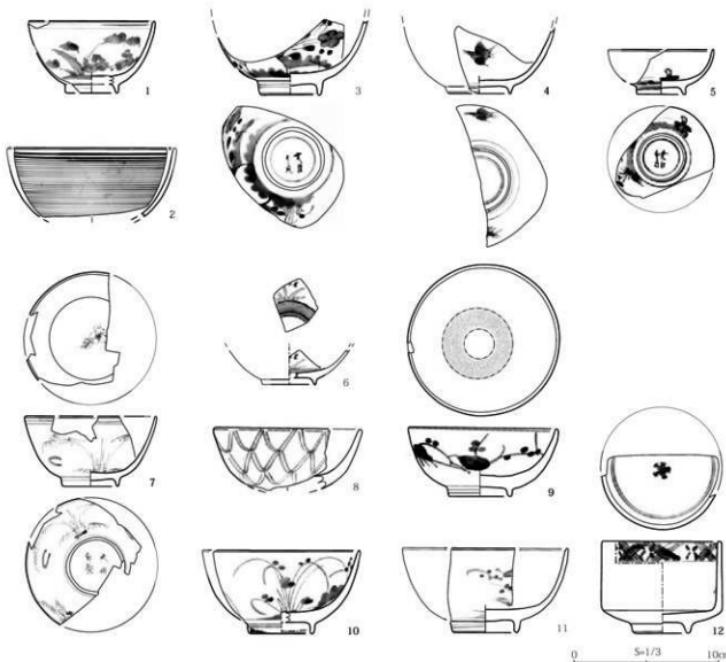
第202図 IV層出土遺物(5)

第3節 迂回路部



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	119-8	N1-W6	陶器	合子(身)	口縁~底部	やや密	(6.6)	7.1	(1.8)	大堀相馬	18世紀	灰釉 豊入、底面に目皿あり	I-168
2	119-9	N1-W6	陶器	合子(蓋)	面部~口縁	やや粗	10.45	-	1.25	大堀相馬	18世紀代	灰釉 豊入、内面:無釉	I-169
3	119-10	N2-W6	陶器	蓋もの	口縁	粗	6.4	-	2.95	京都?	18世紀~19世紀	黄釉 交趾焼?	I-170
4	119-11	N1-W6	陶器	合子(身)	面部~口縁	密	5.5	-	1.2	肥前	18世紀前半	灰釉 鉄輪供須松文	I-171
5	119-12	N1-W6	陶器	合子(蓋)	口縁	密	5.9	-	1.65	肥前	18世紀代	黄釉 兵頭江戸文	I-172
6	120-1	N2-W6	陶器	甕	全体	やや密	-	8.1	(11.39)	小野相馬	18世紀代	灰釉 豊入、クロコ右回転	I-173
7	120-2	N1-W6	陶器	口縁	やや密	(9.3)	(10.44)	(12.1)	不明	18世紀以降?	に噴出す	灰釉 豊入、胎土中の鉄分が表面	I-174
8	120-5	N2-W6	陶器	甕	口縁~高台	密	(22.7)	(12.4)	6.15	肥前	18世紀前葉	灰釉 内面:乳頭状	I-175
9	120-3	N2-W6	陶器	土瓶(蓋)	口縁~底部	やや密	(4.2)	(4.2)	1.5	大堀相馬	19世紀前葉~中葉	灰釉 無釉 大径(5.5)cm 透明白底の輪切り痕	I-176
10	120-4	N1-W8	軟質陶輪	蓋	やや密	4.0	3.3	1.0	埋	19世紀	透明釉底の輪切り痕	I-177	
11	120-6	N1-W6	陶器	盆花器	口縁~高台	粗	(8.7)	5.3	12.8	小野相馬	18世紀後半	灰釉 斜面磨け洗し 刷り付け菊文	I-178
12	120-7	N2-W6	陶器	油瓶	口縁~底部	やや密	10.44	5.52	1.84	湘南・美濃	18世紀後半	黄釉	I-179

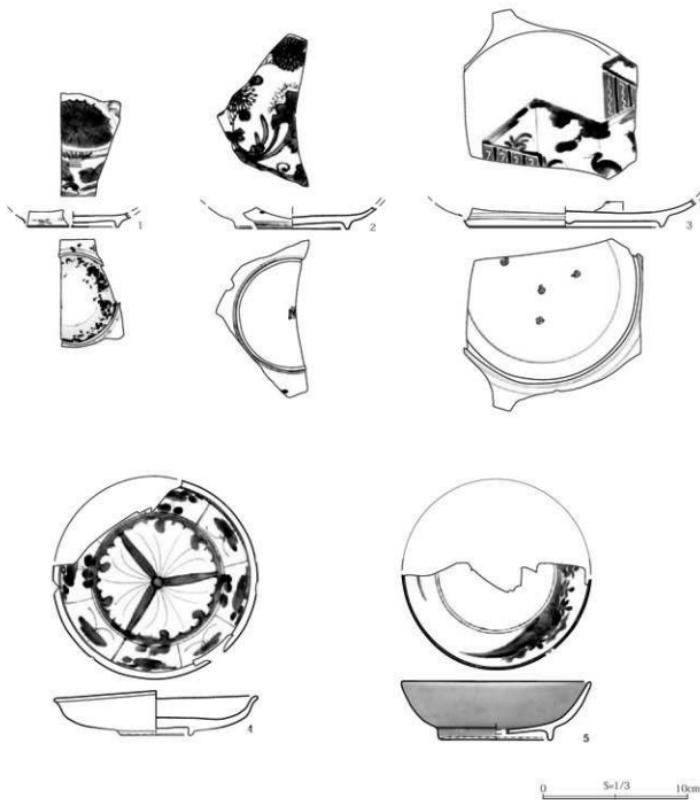
第203図 IV層出土遺物(6)



0 5=1/3 10cm

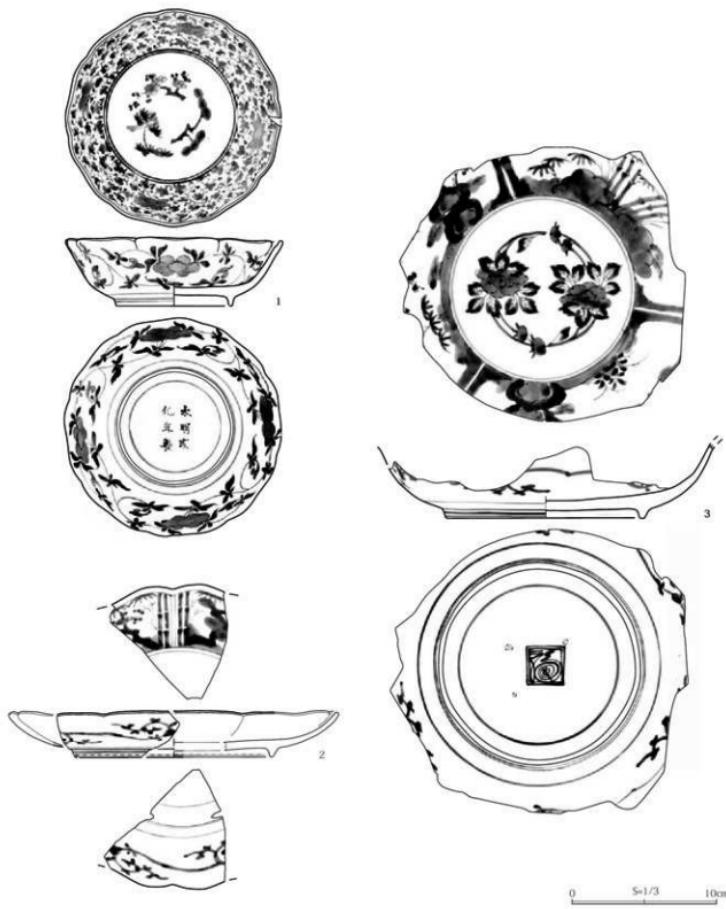
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径	器高					
1	120-8	N1-W8	磁器	画	口縁～高台	やや密	(8.75)	3.75	5.0	肥前	17世紀後葉～18世紀前葉	染付桜竹文	J-92	
2	120-9	N2-W8	磁器	画	口縁～体部	やや密	(11.7)	-	(4.8)	肥前	18世紀	染付磁文	J-93	
3	120-10	N1-W6	磁器	画	体部～高台	やや密	-	4.1	5.25	肥前	17世紀末～18世紀前半	染付桜竹文 高台内に路「大明年製」	J-94	
4	120-11	N2-W8	磁器	画	体部～高台	密	(10.4)	(4.4)	(4.6)	肥前	18世紀後葉～19世紀初頭	染付鳥文	J-95	
5	121-1	N1-W6	磁器	画	口縁～高台	密	(7.32)	3.32	3.12	肥前	18世紀代	染付桜花文	高台内に路「大明年製」	J-96
6	121-3	N1-W6	磁器	画	体部～高台	密	-	(5.70)	(2.35)	肥前	17世紀後半	透明釉 内面：絵付け（草花文）赤鈴 緑繪 黄袖 緋右衛門様式に近い	J-97	
7	121-2	N1-W8	磁器	画	口縁～高台	密	9.15	3.95	4.85	肥前	18世紀後葉	染付桜竹梅文	内面：絵付け 桜竹梅・松文 高台内に路「大明年製」	J-98
8	121-4	N1-W6	磁器	画	口縁～体部	密	(10.3)	-	(4.2)	波佐見	18世紀	染付蘭口文	J-99	
9	121-5	N1-W6	磁器	画	口縁～高台	密	10.4	4.3	4.8	波佐見	18世紀代	染付桜竹梅 蛇の目輪剥ぎ	J-100	
10	121-6	N1-W6	磁器	画	口縁～高台	やや密	10.9	4.2	5.8	波佐見	17世紀末～18世紀前葉	染付草花文	J-101	
11	121-7	N1-W8	磁器	画	口縁～高台	密	(10.5)	4.6	5.89	波佐見	17世紀末葉～18世紀前葉	染付梅蘭文	J-102	
12	121-8	N1-W6	磁器	画	口縁～高台	やや粗	8.3	3.6	6.4	波佐見	18世紀中葉～後葉	青磁釉 内面：四方陣 コンニャク印形の五角花	J-103	

第204図 IV層出土遺物(7)



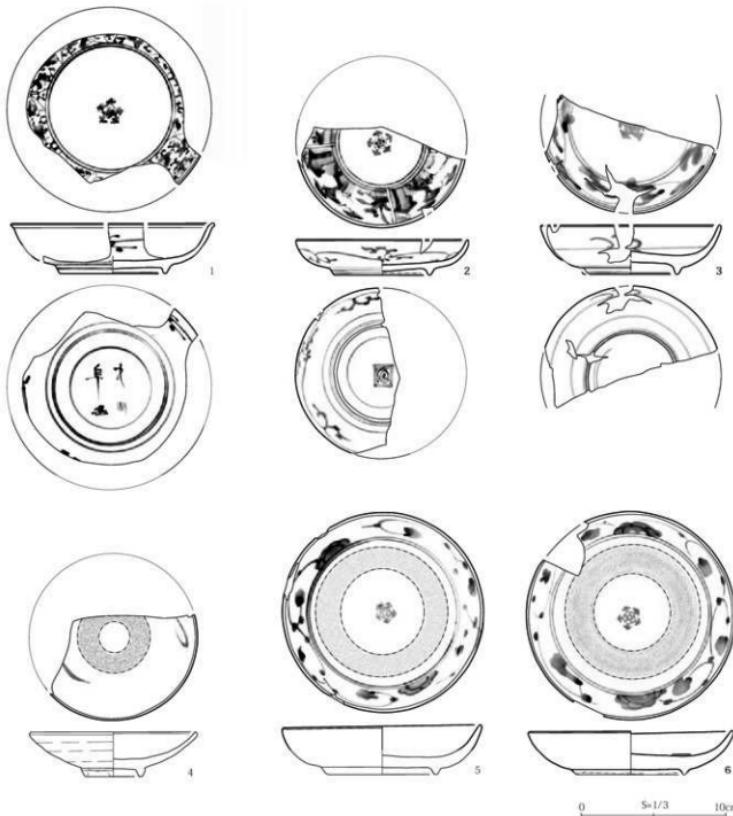
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	121-9	N2-W6	磁器	皿	体部～高台	中空密	-	6.4	1.0	中国	16世紀末葉～17世紀前葉	染付 漆線 磁れ砂付器 磁方向にへだ 削り 内面：込みに染付有り	J-104
2	121-10	N1-W6	磁器	皿	体部～底部	密	-	(7.8)	-	中国	16世紀後葉～17世紀中葉	透明釉 内面：染付草花文 高台内に墨「」	J-105
3	122-1	N1-W6	磁器	皿	体部～高台	密	-	(13.6)	-	肥前	17世紀後半～18世紀前葉	染付削線 内面：染付 文 高台内に目植 4ヶ	J-106
4	122-2	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	14.1	5.05	3.1	肥前	17世紀中葉	染付 龍文 草花文 三方割腹杏文 高台に墨れ砂付器	J-107
5	122-3	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	中空密	(13.1)	(7.80)	4.05	肥前	17世紀末葉～18世紀前半	青磁釉 口縁 内面：染付若草文 二重 削線	J-108

第205図 IV層出土遺物(8)



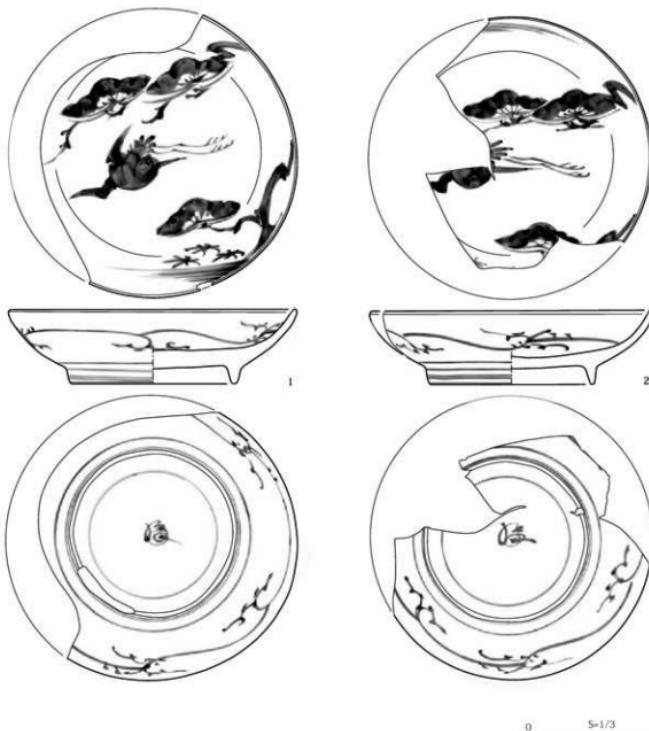
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	122-4	N1-W6	磁器	輪花皿	口縁～高台	密	15.0	8.0	4.7	肥前	17世紀末～18世紀前葉	染付牡丹唐草文 高台内「太明成化年製」 内面：松竹梅文	J-109
2	123-1	N1-W8	磁器	輪花皿	口縁～高台	今や密	(22.9)	(13.7)	3.2	肥前	18世紀前半	染付梅草文 圓線 内面：染付松竹梅文	J-110
3	123-2	N1-W6	磁器	皿	体部～高台	密	-	13.9	(5.2)	肥前	17世紀末～18世紀後葉	染付蘭草文 内面：染付松竹梅文 高台内に満描 ハリ前 4ヶ	J-111

第206図 IV層出土遺物(9)



図版 番号	写真図版 番号	ダリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録 番号
							口径	底径	高さ				
1	123-3	N1-W6	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	(14.15)	7.45	3.48	肥前	18世紀後半	染付物草文 高台内に「大明年製」 内面：花唐草文 見込みに五瓣花 コンニャク印判 裏に日輪	J-112
2	123-4	N1-W6	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	(6.0)	6.8	2.45	肥前	18世紀前半	染付物草文 内面：松文 高台内に鉢（角満瓶）	J-113
3	124-1	N1-W8	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	(12.5)	(6.6)	3.4	波佐見	18世紀後半	染付 内面：染付唐草文 五瓣花	J-114
4	124-2	N1+N2-W6	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	11.6	4.0	3.1	波佐見	17世紀末葉～ 18世紀中葉	染付け 蛇ノ目輪	J-115
5	124-3	N1-W6	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	13.85	7.65	3.35	波佐見	18世紀後葉	内面：染付 嘉草文 コンニャク印判 五瓣花 蛇の目輪割ぎ	J-116
6	124-4	N1-W6	磁器	皿	口縁～ 高台	泥	14.2	7.5	3.1	波佐見	18世紀後葉	内面：染付草花文 見込みに五瓣花 コンニャク印判 蛇の目輪割ぎ 高台に懸れ跡	J-117

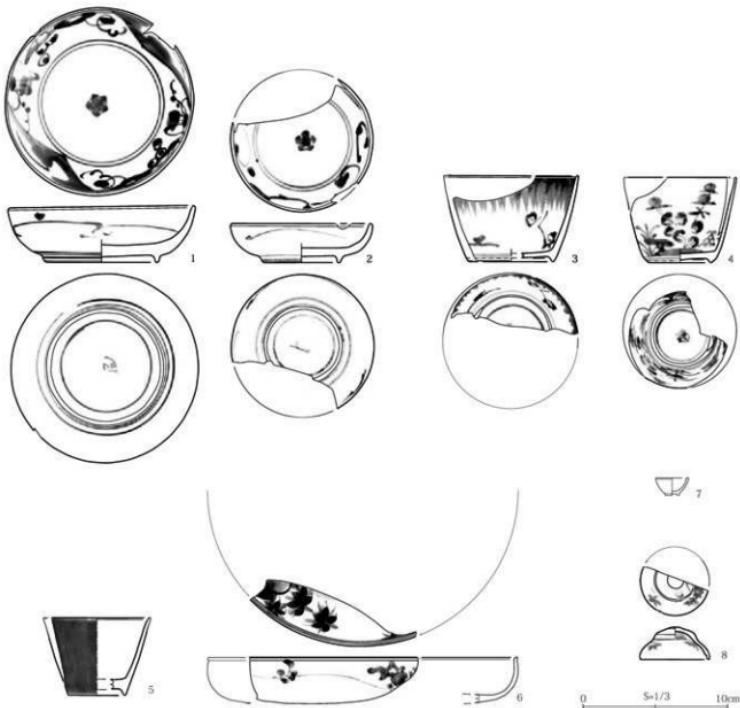
第207図 IV層出土遺物 (10)



0 5=1/3 10cm

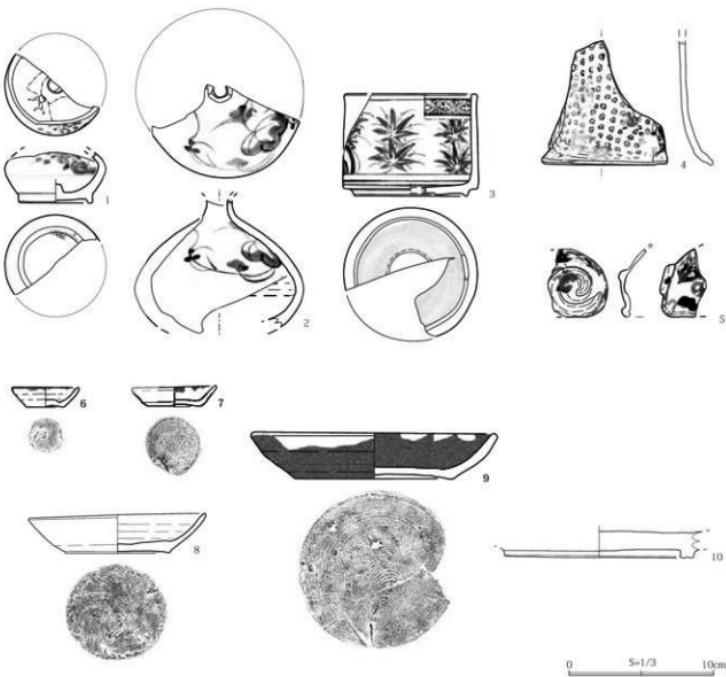
図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	124-5	N1-W6	磁器	皿	上縁～高台	密	(20.0)	11.4	5.6	波佐見	18世紀代	染付唐草文 高台内に洒墨 内面：松に鶴文	J-118
2	125-1	N2-W8	磁器	皿	上縁～高台	密	(19.5)	11.4	5.1	波佐見	18世紀代	染付唐草文 高台内に洒墨 内面：松に鶴文	J-119

第208図 IV層出土遺物(11)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	高さ				
1	125-2	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	13.1	8.0	4.0	波佐見	18世紀後半～19世紀初	染付唐草文 高台内に墨 内面：染付草花文 見込みに五弁花 コニニャク田撰	J-120
2	125-3	N1-W6	磁器	皿	口縁～高台	密	9.83	5.4	2.72	波佐見	18世紀後半	染付 椿紋 内面：染付菊唐草文 脚部：見込みに五弁花	J-121
3	125-4	N1-W6	磁器	猪口	口縁～高台	密	(9.3)	(6.0)	5.99	肥前	17世紀後葉～18世紀初頭	染付南隠り文 二重脚輪 口縁 高台内に墨「」	J-122
4	125-5	N1-W6	磁器	猪口	口縁～高台	密	(7.78)	4.2	5.92	肥前	18世紀前葉～中葉	染付草花文 二重脚輪	J-123
5	125-6	N1-W6	磁器	猪口	口縁～高台	やや密	(7.4)	(4.0)	5.4	肥前	18世紀後半	粗脚輪	J-124
6	125-7	N1-W6	磁器	盤	口縁～全体部	密	(21.4)	-	-	肥前	17世紀後葉	染付草花文	J-125
7	125-8	N1-W6	磁器	猪口	口縁～高台	密	2.3	1.0	1.22	肥前	18世紀代	白磁	J-126
8	125-9	N2-W6	磁器	合子(蓋)	口縁～頭部	密	4.8	-	2.24	肥前	18世紀代	染付花蝶文	J-127

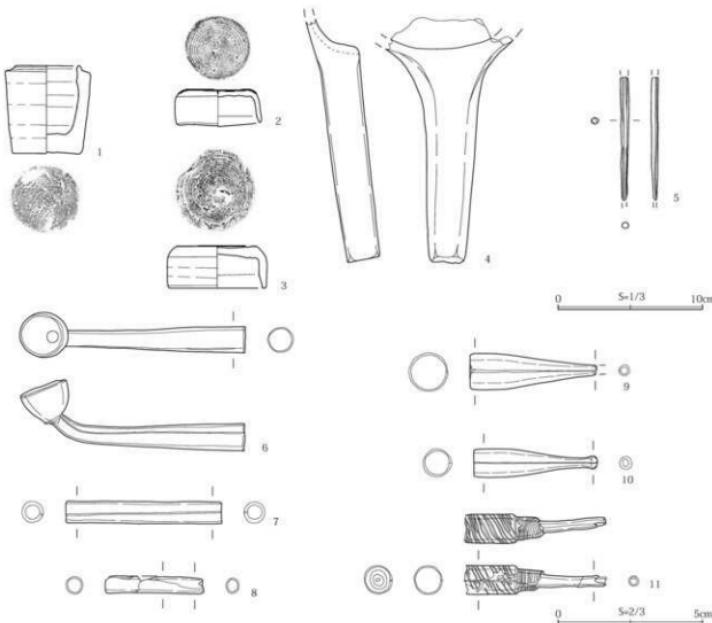
第209図 IV層出土遺物(12)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	125-10	N2-W6	磁器	油壺	体部～高台	密	(5.4)	5.1	(3.5)	肥前	17世紀中葉～後葉	染付草花文・縞紋 高台内面付着 内面に突起 最大径7.0cm	J-128
2	125-11	N1-W6	磁器	油壺	頭部～体部	密	-	-	(8.75)	肥前	18世紀代	染付大蔓草文 内面：無繪 最大径(11.70cm)	J-129
3	126-1	N1-W6	磁器	香炉	口縁～高台	やや粗	(9.2)	(7.9)	7.1	肥前	18世紀後半	染付草花文 縞紋 内面：四方舞文 蛇ノ口凹型高台	J-130
4	126-2	N1-W8	磁器	人形	若物の頭	やや密	-	-	(8.6)	肥前	18世紀代	上絵染付(赤絵)・黄須・縞紋 指遊玉頭 人形 若物の頭	J-131
5	126-3	S1-W5	磁器	人形(猫)	尾	やや密	(4.7)	(4.1)	0.5	不明	近世	上絵付 猫頭	J-132
6	126-4	N1-2-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	4.64	2.65	1.38	在埴	近世	無繪 油煙付着	J-180
7	126-5	N2-W8	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	6.85	4.3	1.85	在埴	近世	ヨコナデ 回転系切り直し油煙付着	J-181
8	126-6	N2-W6	土師質土器	皿	一高台	粗	12.3	7.3	3.7	在埴	近世	ロクロナデ ロクロ右回転	J-182
9	126-7	N1-W6	土師質土器	灯明皿	口縁～底部	やや粗	17.1	10.9	3.23	在埴	近世	ロクロナデ 回転系切り直し	J-183
10	126-8	N1-W8	土師質土器	火入れ	底部～高台	やや粗	(14.36)	13.16	(1.8)	在埴	近世	無繪	J-184

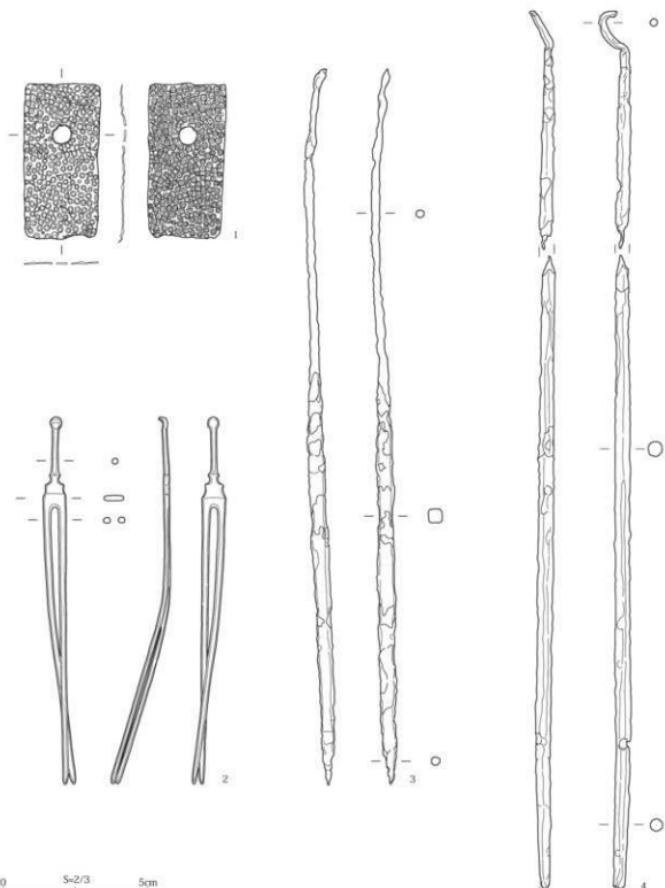
第210図 IV層出土遺物(13)

第3節 迂回路部



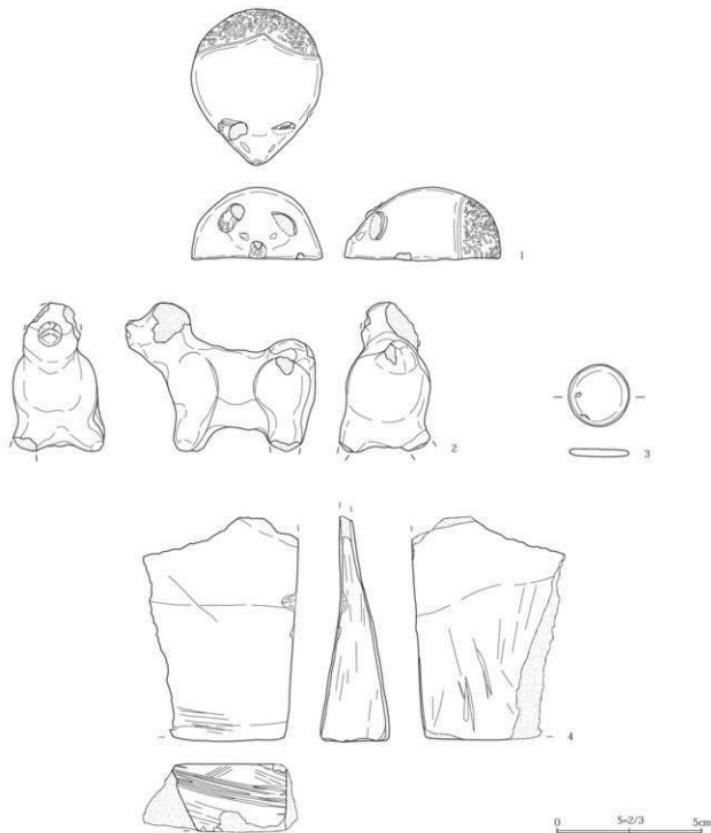
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号		
							口径	底径	器高						
1	126-9	N1・N2-W6	土加質 土器	燒塗壺	LII-I 直底～ 口斜	粗	4.2	4.8	6.1	関西	18世紀代	ヨコナデ	I-185		
2	126-10	N1-W6	土加質 土器	燒塗壺蓋	直底～ 口斜	粗	5.4	4.5	2.45	関西	18世紀代	ヨコナデ	I-186		
3	126-11	N1-W7	土加質 土器	燒塗壺蓋	～口斜	やや粗	6.8	6.5	2.95	関西	17世紀末～ 18世紀後半	ヨコナデ 軸系切り崩	I-187		
4	126-12	N1-W6	瓦質土器	十能(柄)	柄	粗	(16.8)	(3.8)	(3.1)	在地	近世		I-188		
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			木取り	櫛種	備考			登録番号			
				長さ	幅	厚さ									
5	126-13	N1-W8	著	8.5	0.6	0.5	分割材	スピ				I-48			
図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)				備考				登録番号			
				長さ	幅	厚さ	重量								
6	127-1	N2-W8	金属製品	7.8	-	約 0.1	8.39	煙管(雁首)最大幅 1.58cm	最小幅 0.9cm			N-31			
7	127-2	N2-W8	金属製品	5.4	0.8	約 0.1	11.47	煙管(雁首)最大径 0.75cm	最小径 0.7cm			N-32			
8	127-3	N1-W8	金属製品	3.4	-	約 0.5	1.65	煙管(吸口)最大径 0.6cm	最小径 0.5cm			N-33			
9	127-4	N1・N2-W6	金属製品	4.4	-	約 0.1	4.33	煙管(吸口)最大径 1.3cm	最小径 0.4cm			N-34			
10	127-5	N1-W6	金属製品	4.3	-	約 0.1	3.6	煙管(吸口)最大径 0.95cm	最小径 0.45cm			N-35			
11	127-6	N2-W7b	金属製品	4.4	-	約 0.5	3.54	煙管(吸口)最大径 1.0cm	最小径 0.35cm			N-36			

第211図 IV層出土遺物(14)



図版 番号	写真図版 番号	グリッド	種類	法量 (cm・g)				備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	127-10	N2-W8	金属製品	5.3	2.6	0.05	3.2	飾り金具 塑形…打ち出し	N-37
2	127-7	N1-W6	金属製品	12.7	0.78	0.2	7.16	かんざし	N-38
3	127-8	N1-W6	金属製品	24.8	0.65	-	15.28	火箸	N-39
4	127-9	N2-W8	金属製品	(30.4)	0.52	-	27.03	不明	N-40

第212 図 IV層出土遺物 (15)

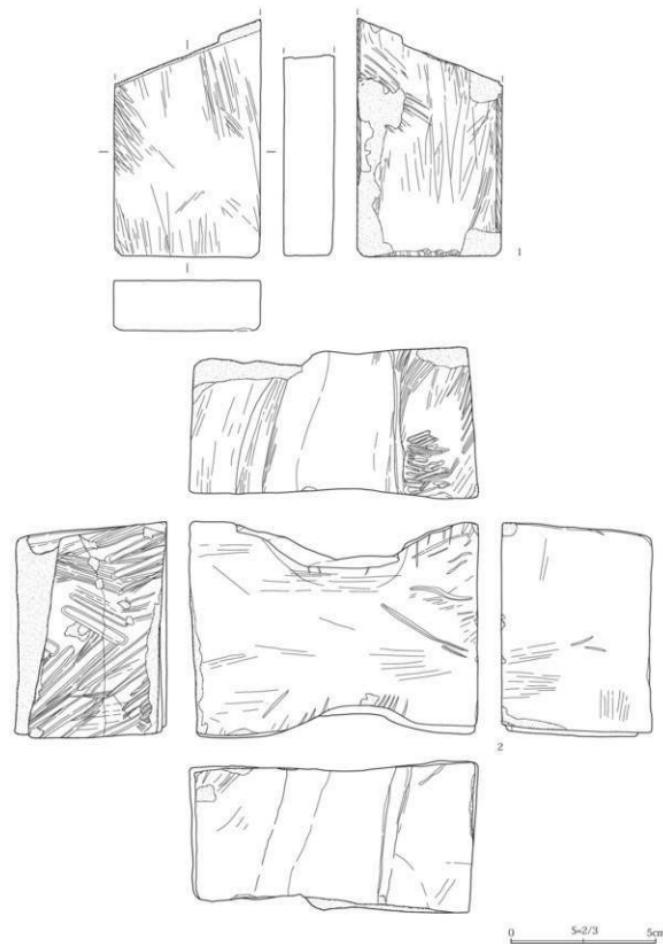


図版 番号	写真図版 番号	層位	種類	法量 (cm・g)				備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	127-11	N1-W6	土製品	5.4	4.55	2.5	21.1	土人形(ねずみ)型押し	P-5
2	127-12	N2-W6	土製品	6.5	3.15	5.15	49.25	土人形(犬)型押し	P-6

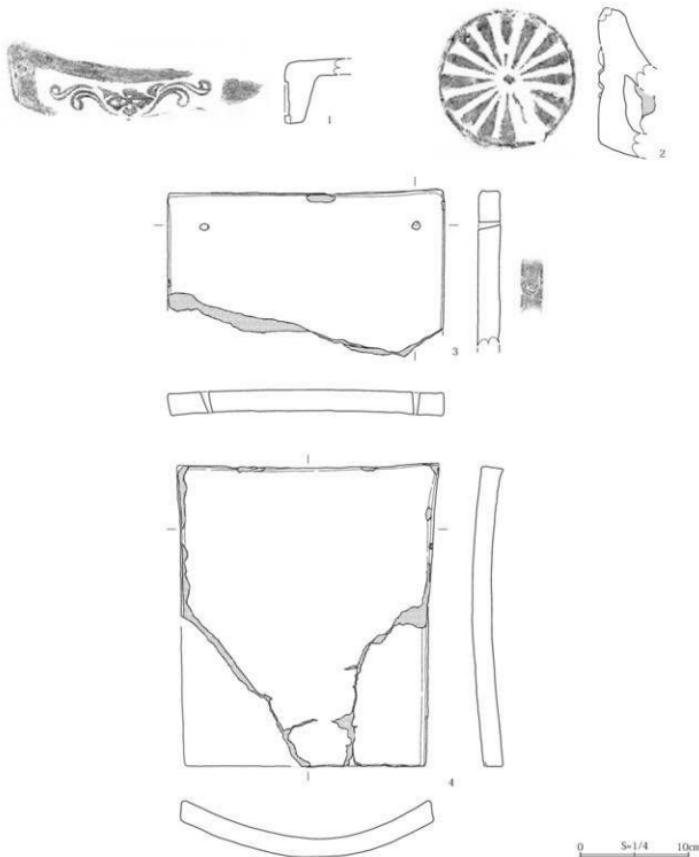
図版 番号	写真図版 番号	グリッド	種類	法量 (cm・g)				石材	備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ	重量			
3	127-13	N2-W4	石製品	2.14	2.1	0.3	2.21	粘板岩	碧石	K-9
4	127-14	N1-W6	石製品	(7.7)	5.35	2.35	93.8	石英斑山岩 質變火岩	砥石	K-10

第213図 IV層出土遺物 (16)



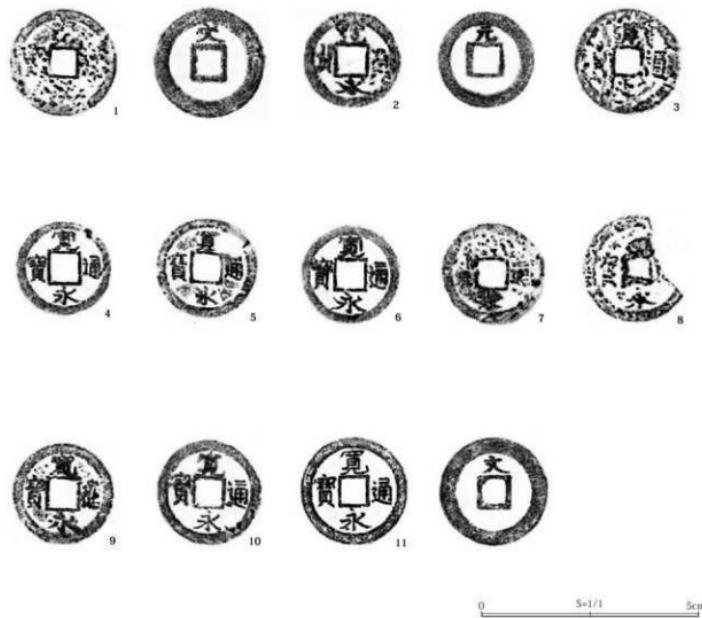
第214図 IV層出土遺物(17)

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)				石材	備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量			
1	127-15	N1-W6	石製品	(8.25)	5	1.75	131.64	凝灰質頁岩	礫石	K-11
2	128-1	N1・N2-W6	石製品	10	7.5	(5.25)	619.21	石英安山岩 質凝灰岩	礫石 柄をつけた痕?あり	K-12



図版 番号	写真図版 番号	グリッド 番号	種類	法量(cm)			備考	登録 番号
				長さ	幅	厚さ		
1	128-2	N1-W8	軒平瓦	(5.0)	-	1.4	文様外幅:(17.0) cm 文様内高:(3.7) cm 反凸幅:(2.35) cm 及当高:(7.8) cm 瓦当厚:(1.8) cm 瓦匡幅:(2.9) cm 周縁幅:(0.5) cm 高瀬:(2.5) cm	G-4
2	128-3	N2-W8	鳥舎	(5.0)	-	-	文様外径:12.4cm 外面:型押し成形後指による調節 瓦司利付着? ヨコナデ 内面: 指跡削 ヨコナデ 文様:菊花文	H-3
3	128-4	N1-W6	板頭瓦	(15.2)	25.4	2.0	全体にキラコ付着 全体にヨコナデ 印あり	H-4
4	128-5	N1-W8	軒平瓦	28.05	24.0	1.9	面幅:(11.3) cm 所幅:23.5cm 弧深:3.5cm ヨコナデ	G-5

第215図 IV層出土遺物 (18)



図版番号	写真図版番号	グリッド	銭貨名	初鋲年	法量 (cm・g)			備考	登録番号
					外径	穿孔	重量		
1	128-6	N2-W8	寛永通宝 (新)	1667	2.5	0.6	2.83	文銘	N-41
2	128-7	N2-W6	寛永通宝 (新)	1697	2.2	0.6	2.17	背元	N-42
3	128-8	N1-W6	寛永通宝 (新)	1697	2.4	0.6	3	無背	N-43
4	128-9	N2-W6	寛永通宝 (新)	1697	2.2	0.6	1.45	無背	N-44
5	128-10	N1-W6	寛永通宝 (新)	1697	2.3	0.6	2.09	無背	N-45
6	128-11	N1-W6	寛永通宝 (新)	1697	2.3	0.6	2.4	無背	N-46
7	128-12	N1-W8	寛永通宝 (新)	1697	2.4	0.6	2.1	無背	N-47
8	128-13	N2-W8	寛永通宝 (新)	1697	2.4	0.4	2	無背	N-48
9	128-14	N2-W8	寛永通宝 (新)	1697	2.3	0.6	2.63	無背	N-49
10	128-15	N2-W8	寛永通宝 (新)	1697	2.4	0.6	3.42	無背	N-50
11	128-16	N1-W8	寛永通宝 (新)	1668	2.5	0.6	3.92	文銘	N-51

第216図 IV層出土遺物 (19)

## 4 III層上面検出遺構とIII層出土遺物

迂回路部におけるIII層は、調査区中央以東でその堆積が確認された。中央部では比較的薄く、南東へ向かって傾斜しながら層厚を増す。III層堆積土は、IV層に比較すると少ないものの礫を多く含み、掘り下げるに南北方向に走る石列状の遺構が検出された。遺物は18世紀後半以降から19世紀中葉にかけての陶磁器や土師質土器、蚊遣り等の瓦質土器が多く出土し、III層上面では近代の遺物も見られた。出土遺物から、III層の堆積時期は概ね19世紀中葉以降で、明治にまでかかるものと思われる。

III層上面で検出した遺構は、土坑4基、性格不明遺構4基、石列遺構3条、柱穴21基である。



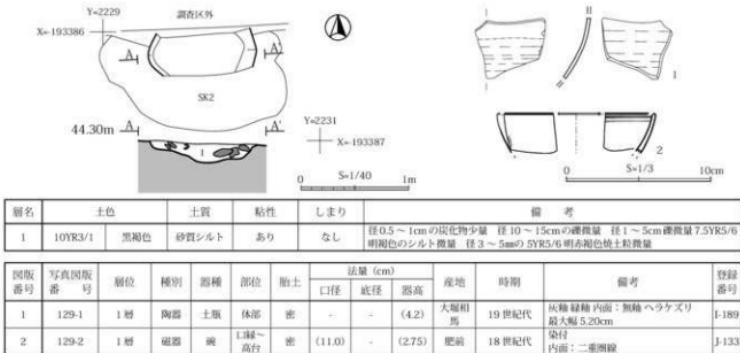
第217図 III層上面遺構配置図

## (1) 土坑

## 1) SK1 土坑（第218図、図版85-1～3）

N2-W7・W8 グリッドに位置し、北端は調査区外へ延び、南端は削平される。SK2と重複し、SK2より新しい。確認した規模は、長軸1.0m、短軸38cm、深さ20cmを測る。平面形は不明で、断面形は皿状である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、礫及び炭化物等を含む。底面は緩やかに起伏し、壁面も緩やかに立ち上がる。

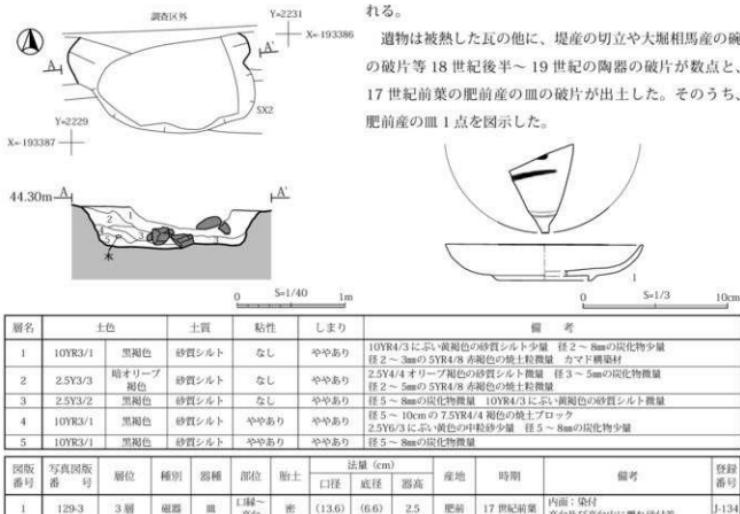
遺物は18世紀代の唐津産の陶器碗や肥前産や波佐見産の磁器、19世紀代の大堀相馬産の土瓶や瀬戸・美濃産の磁器碗の破片等が出土した。そのうち、大堀相馬産の土瓶と肥前産の磁器碗の2点を図示した。



第218図 SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物

## 2) SK2 土坑 (第219図、図版85-1・2・4)

N2-W7・W8 グリッドに位置しており、北端は調査区外へ広がり、南端は削平されている。また、SK1・SX2 と重複し、SK1 より古く SX2 より新しい。規模は、長軸 1.68m、短軸 84cm、深さ 38cm を測る。平面形は不明で、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色ないし暗オリーブ褐色の砂質シルトを主体とし、5 層に分けられる。堆積土には SX2 カマド遺構の構造材であったと思われる被熱した円窓や角礫、瓦片、焼土ブロックや炭化物等が含まれる。



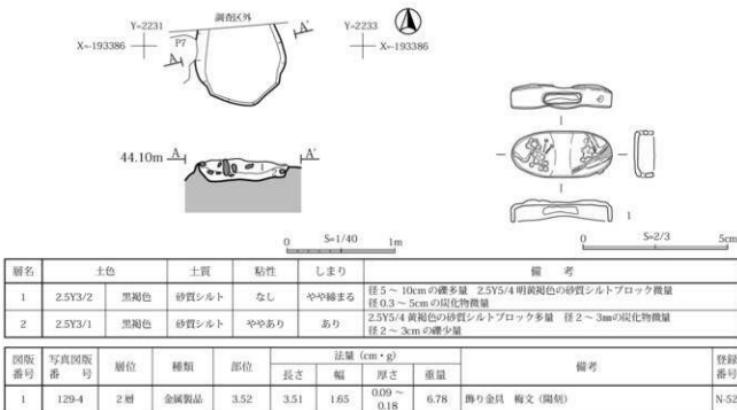
第219図 SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物

### 第3節 迂回路部

#### 3) SK3 土坑 (第 220 図、図版 85-1・5・6)

N2-W7 グリッド、SK1・2 の東側に位置する。北端は調査区外へ広がり、西側で P7 と重複し、P7 より古い。確認した規模は、長さ 82cm、幅 73cm、深さ 21cm を測る。平面形は主軸方向 N-1°-W を示す楕円形と考えらる。堆積土は黒褐色砂質シルトで 2 層に分けられる。底面及び壁面は、下層に含まれる礫等により凹凸はあるが、底面は概ね平坦で、壁面は外傾しながら直線的に立ち上がり、断面形は逆台形である。

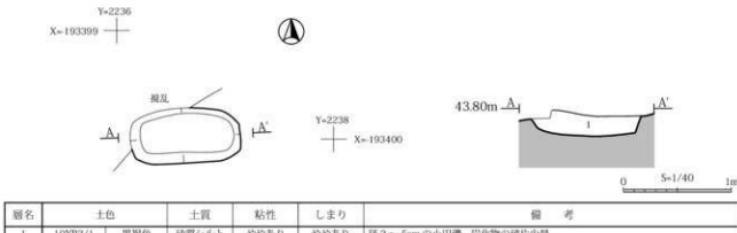
遺物は 2 層から瓦や 19 世紀代の大堀相馬産の碗、肥前产の磁器の破片、金属製品等が出土した。そのうち、刀の柄頭部分の飾り金具 1 点を図示した。



第 220 図 SK3 土坑平面図・断面図・出土遺物

#### 4) SK6 土坑 (第 221 図、図版 85-7・8)

N1・S1-W7 グリッドに位置し、北西上端を擾乱により削平される。規模は、長軸 1.02m、短軸 51cm、深さ 19cm を測る。平面形は主軸方向 N-87°-E を示す楕円形である。底面は平坦で、壁面は外傾して直線的に立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



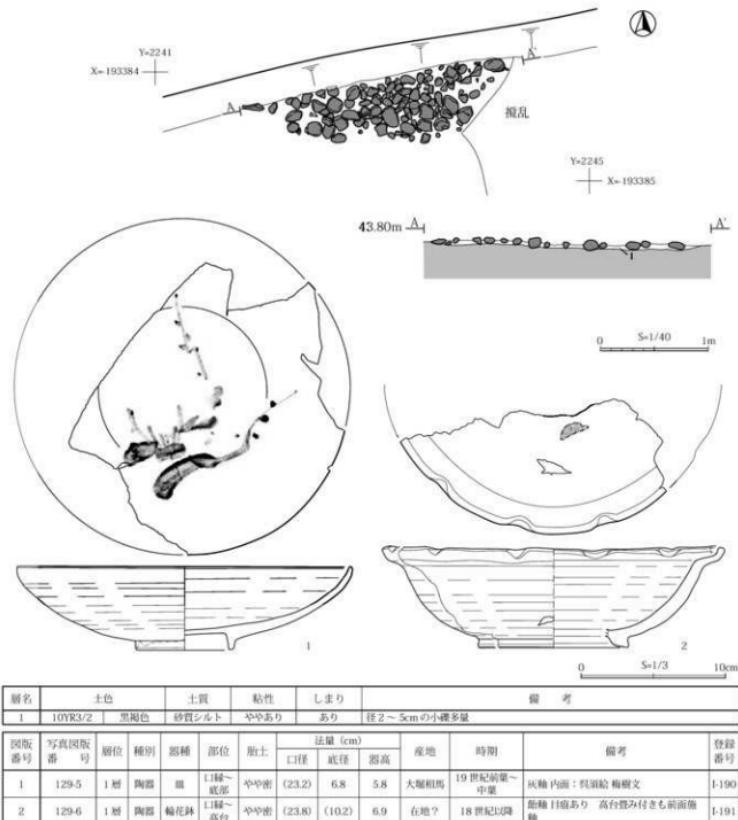
第 221 図 SK6 土坑平面図・断面図

## (2) 性格不明遺構

## 1) SX1 性格不明遺構 (第 222・223 図)

N2-W6 グリッドに位置する石敷き状の遺構である。北端は調査区外へ広がり、東側は後世の搅乱により削平されている。確認した規模は、長さ 2.50m、幅 60cm を測る。遺構は長さ 10～20cm、幅 8～12cm、厚さ 5～10cm 程の円礫がやや雜然と並び、その隙間に径 2～5cm の小礫が詰められる。

遺物は礫の隙間や下から、在地産の輪花鉢や大堀相馬産の皿、肥前産の磁器碗や皿、瀬戸・美濃産の磁器碗等、18 世紀後半～19 世紀中葉の陶磁器や、瓦質の火鉢の破片や灯明皿等の土師質土器が出土している。そのうち、大堀相馬産及び在地産の鉢、波佐見産の皿と肥前産の蓋を示した。



第 222 図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物 (1)